
幻想と現象と残像と・・・・・・現存？

永月 夜刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想と現象と残像と・・・・・・・・現存？

【Nコード】

N7765J

【作者名】

永月 夜刀

【あらすじ】

神々の遊びと勘違いとおっちょこちよいで死んでしまった主人公。なんかいろいろと能力をもらって異世界に転生させられて・・・・とりあえず俺に拒否権はないのか・・・・orz

おことわり

このサイトに掲載されている小説を読みまくってたらもの凄く書き
たくなって・・・

ついカッとなって書いてしまった
だが反省はしていない！

後悔はするかもしれませんが・・・orz

んでもって主人公最強チート設定になってます。

なので、苦手な方やこれらの設定が嫌いな方はブラウザの戻るボタ
ンをポチッと押してお帰りください。

それでも構わないという人はどうぞ。見てやっってください。
では、『幻想と現象と残像と・・・・・・現存？』始まります。

0 話一表 暗くてごめん！（前書き）

別に書いている小説をほったらかしてこっちの構成を考えていました@@;

構成っていうか妄想ですがががが

とりあえずプロットやあらすじなんかも作らずに書いていますので
おかしいところや矛盾や誤字脱字等ありましたら是非教えてやって
ください。

0 話一表 暗くてごめん!

「な、とりあえず飯でも食いにいかね?」

「んー、そーだねえ……でもさつき買い物したから、手持ちあんまりないよ?」

「だいじょーぶだって! それくらいは俺が出すからさ」

そんな風に話しながら、俺と彼女は繁華街を歩いていた。

「あ、あの子って○○ちゃんじゃない?」

「ん? ……ああ、確かにあの子だな」

「あの子も誘ってみたい?」

「別にいいよ。昨日暇だったからちよつと行ったら勝っちゃったからさ(笑)」

「もー、またパチンコ?」

「そそ、結構勝ったからさ。3人で飯でも行こうや」

そういうと「身体に悪いよ」とか「なにが面白いんだか……」などといいながら

反対車線側の歩道にいる女の子に彼女が呼びかける。どうやらこちらに気付いたようで

歩行者信号が変わり次第合流するようだ。

「ほらほら、もうすぐ信号変わるから横断歩道のここにいこ?」

「はいはい、仰せのままに」

「ん、よきにはからえ」

そうしてお互いに笑いあいながら歩いていると、どこからか『バツンッ』と何かが切れるような音が聞こえた。

「なあ、今なんか変な音が聞こえなかったか？」

「えー？変なってどんな音？」

「なんか切れるような音なんだけどさ」

「んー、聞こえなかったと思うけどなあ。あ、信号変わるよ！向こう行こ？」

「りょーかいりょーかい」

そういうながら、何の気なしに空を見上げた時だった。

俺の目に飛び込んできたのは、今にも切れそうな『ワイヤー』とそれに吊られている『1本1本』はありそうなH鋼（断面がHの形の鋼材）が5本』だった。

「おい」

「えー？なにー？」

「逃げろ！」

「は？どうしたの急に？」

「クソがつ！間に合え！！！！！」

そう吐き捨てて走り出した瞬間、『バン！』と周囲にもはっきり聞

こえる音でワイヤーが切れた。

ギリギリ走りこんだ俺は、向こう側から来ていた女の子と恋人を自分の荷物と共に対向車線側の歩道へ向かって放り投げる。

そして眼が合ってしまった、すぐ横にいた女性を恋人の方へと突き飛ばした。

流石に後1人は無理だと理性が警告を発していたが、

その女性の子供が道路で転んでいるのが眼に入り……………

『自分の命よりもその子供の命を優先した』

その結果……………落ちてきた鉄骨によって左足は膝下で切断され感覚がなく

右手は鉄骨に弾かれ粉碎骨折している。そして致命傷となったのは道路へ落ちた後に腹部を鉄骨が押しつぶすように倒れてきた事による内臓破裂だった。

鉄骨が落ちた直後は水を打ったような静けさで……………

……………そして阿鼻叫喚の地獄絵図が展開されていた。

日本のレスキューは優秀なようで事故から3分という迅速な到着で現場の救助を始めていた。不幸中の幸いか俺が助けた親子と女の子そして恋人は、俺が放り投げたことによる擦り傷だけだったようですぐに俺の傍に駆け寄ってきた。

「しゅうちゃん！なんで！なんで逃げなかったの！」

「へ……ばーか……ギリギリ間に合う予定……だったんだ……よ」

「大丈夫ですか！すぐにレスキューが到着しますから！」

これは本当に幸いなのかどうかはわからないが、俺は意識があった。そして痛覚が完全に麻痺していたから、うまく笑えていたと思う。

「レスキュー隊の兄さん……俺は間違はなく……助からないから……他の人を助けてあげてくれ」

「しゅうちゃん！」

「いいんだ……この鉄骨で下半身は見えないけど、最初に左足が千切れるのが見えた」

「！」

「んで、この鉄骨は重機がないと動かせないだろう。内臓破裂は免れないと思う」

「しゅうちゃん……もういいから！喋らなくていいから！」

「ダメだ……聞いてくれ……あと、顔……見せてくれよ。それにさ、もう痛くないんだ」

痛覚が麻痺してるんだと思う。で、よかったら手……握ってくれるか？左手しか動かないけどさ」

そう言った俺の手を彼女が握った。流石にきつついなあ……彼女の手のぬくもりも感じられないらしいわ……

「しゅうちゃん．．．やだよ．．．一人にしないでよう．．．」

「ごめんな．．．ずっと一緒にいようって約束したのに．．．．．
護れそうにないや．．．」

流石に．．．コレはどうしようもねえ．．．わ」

「もうすぐ重機が到着します！だから諦めないでください！」

「なあ．．．レスキューの兄ちゃん．．．重機が到着したとして、

10分以内にそこそこ設備の整った病院に行けるかい？」

「10分．．．は厳しいかもしれませんが．．．すぐに救助しますから！」

「もう．．．いいんだよ」

「しゅうちゃん．．．諦めないでよう．．．一緒にいてよう．．．」

「そうです！諦めないでください！」

そうやって繰り返し恋人とレスキュー隊員から声かけられる。

もう．．．無理なんだよなあ．．．約束護れなかったなあ．．．

・

「りや．．．ごめんな？もう無理っばいわ．．．」

「しゅうちゃん．．．」

「実を言うとき．．．もう目も見えないんだよな．．．っはは」

「そんな．．．」

「レスキューの兄ちゃんさ．．．俺はもう無理だから．．．他の人を優先してくれよ．．．」

自分の身体だから．．．わかるんだよな．．．声も．．．聞

こえにくい・・・し・・・さ・・・

内臓破裂と左足切断からの出血多量によるショック死ってところだろうな・・・」

「やだよ・・・しゅーちゃん！死なないでよお！」

「・・・あー・・・タイムリミット・・・っぽいわ・・・」

「しゅーちゃん！」

「・・・ご・・・めん・・・な？・・・りや・・・いままで・・・

ありが・・・とな」

「え・・・・・・？しゅ・・・ちゃん？しゅーちゃん！？しゅーちゃん！」

そして、俺は死んだ。最後まで意識があったのはなんの偶然かはたまた奇跡か・・・りやをひとりにしてしまうことが心残りっちゃん残りだけど。

大人しく迎えとやらが来るまでまちますかねえ・・・え？おんやあ？なんかどっかに引っ張られてるような感じなんだけど！？って、引っ張られてるってコレ！ちよ、おま！

う・うわああああああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!

そして彼の魂はその世界から消滅した・・・

0話一表 暗くてごめん！（後書き）

はい！ということだね。しょっぱなから暗い話ですみません！

なんていうか、転生トラック↓神に会う↓転生ってのもいいんだけど主人公の元の世界での背景が少しでも見えたらいいな〜と思って・・

まあ背景っていうか生活？でしたけど。

思い立って1発書きで書き始めたものでまとまってないかも知れませんが

優しく生暖かい目で見守ってやってくださいな。

それでは次は0話一裏でお会いしましょう。でわでわ！

0 話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (前編) (前書き)

仕事から帰って急いで書いてます。

早くリリカルな本編に入れるようにしたいです・・・

0 話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (前編)

一方、彼の命の灯火が消えようとしている頃
ある場所では……

「なあなあぜっとな、ここはこんな感じでどうかな?」

「うーん……ココをこうしたら……もつとよくな?」

「おくなるほどなるほど! んじゃここをこうして……っ」と

「いいねいいねー んじゃ俺の力も使って……と、これでどうよ?
ルーやん」

「おおおー! イイ! イイね!! んじゃデンさんにも見てもらおう
や」

「んじゃついでにエーちゃんも呼んでやるか!」

二人が何者なのかはまだわからない。しかしなにかおかしいことを
企んでいるということは窺い知れた。

「んーで? お前さんがたは今度はなにをやってんだ?」

「おー、デンさん来てくれたか。まあコレ見てくれよw」

「おいおい……いい加減デンさんはやめてくれんか……」

「まあまあ、この二人に言っても無駄ですよ(苦笑)」

「ん? なんだ、お嬢も来ておったのか」

「私は来ていたっていうか……拉致されたっていうか……」

「……お嬢も大変だのう」

「言わないでください……余計に悲しくなってきましたから……
」

そう言って、騒いでいる二人の後ろからモニターを覗いている人影
ぜっとんと呼ばれていた男。外見はジーパンに黒いTシャツという
ラフな姿で

ルーヤんと呼ばれていた男も、ジーパンに白いトレーナーこちらも
ラフな姿だった。

そして彼らの後ろにいる二人は、デンさんと呼ばれていた方が
銀髪に隻眼で大柄。服装はなぜか薄い青のゆかたを着ている。

もう一人は、腰まであるサラサラの金髪をポニーテールにした碧眼
の美少女だった。

なぜかほぼ黒で統一されたゴスロリを着ていたが……

「にしても、なぜお嬢はそんな服を着ておるのだ？」

「目が覚めたら、部屋にあったのが全部こういう服に代わってまし
た……」

「……お嬢も大変だのう」

「そんな憐みの目でみないください……自分でも似合わない
のはわかってますから」

「いや、似合うてはおるんだぞ？ただ……」

「ただ？」

「いや……アレを父親にもったのが不憫で……のう……」

「

それは自分ではどうしようもn「な、な！どうよこれ！」お父様。
人が話しているところに割り込むのはいかかなものかと思いませ
んか？」

「まあ気にすんなって！で？どうよコレ！凄くね？ルーヤんと作っ
てみてただけだよ！」

「何を作っておったんだ？」

「お！良い質問だ！題して『最強で最凶で最狂な肉体を作ってみよう』プロジェクトだぜ！」

その言葉を聞いた二人は、なにも言えずに顔を見合わせた。

「……いったい何をやってるのかと思えば、また馬鹿な事をやってたんですね」

「そうなの……さすがにワシもなんとも言えんわい」

「なーんだよ、すげーじゃん？こことかコレとかさあ」

「最近人間界のアニメや漫画やゲームや小説ばかり見てると思えば……」

こんなことをするために集めてたんですか。お父様？」

「う……なんだよーいーじゃんよーっと！エーちゃんも呼ぶんだった！」

「まだ話は終わってませんよ、お父様！「かもんエーちゃん！」ちよっと！」

そういつて男が片手をあげると、その場に急に一人の男が現れた。

「ぬお?! なんじゃなんじゃ?! いったい何がおこったんじゃ?!」

「ヘイ！エーちゃん！久しぶり！」

「へ？あ……お、おう。なんじゃぜつとんじかないか。いったい急に何事じゃ？」

「へへへ、俺とルーやんでさ、すげえの作っただわ！この前話してたじゃん？」

「この前……おお、それはアレかの？人間で最強の肉体を構成

してみるとかいう・・・」

「そーそーそれぞれ！んでさ、俺の力でコレつけて、ルーやん力でコレつけたわけよ」

「ふむ・・・つまり、ワシも力を使って何かを付与すればいいのじゃな？」

「さっすがエーちゃん！話が解るねえ！」

「ふむ・・・話が解るのはいいのじゃが。仕事の途中にいきなり呼びだすのは困るんじゃないか？」

「まあまあ気にしない気にしないw」

エーちゃんと呼ばれた男は、見た目は50代くらいで短く刈り込んだ黒い頭髮に逞しい髭

そして古代中国の官服のような服装だった。そうして彼らが話に興じていると。

「あーっ!!!!」

「どうしたのだお嬢。急に大声を出したりして」

「いま仕事の途中って言うっておられたから、仕事先を覗いてみたら・・・」

「覗いてみたら？」

「・・・エーちゃんさま。あのノートって人間の寿命を管理しているものですよね？」

「うん？そうじゃよ。帳面の手直し中に急に呼び出されてのう。焦ったわい」

「あのノートに書いてある寿命の年数がそのまま人間の寿命なんですよね？」

「うむうむ。ワシしか修正も書き足しもできんようになっておるんじゃないよ」

「だったら年数のところに墨が落ちたらまずいですよね？」

「うむ。墨が落ちた程度の失敗ならば、すぐに拭き取れば問題はないからの。」

それにワシしか操作できんから大丈夫じゃよ」

「急に呼び出されたってことは、エーちゃんさまが持ってた筆はどうなったんですか？」

「……そのまま落ちるのう」

「一人の男性の名前の横にある寿命何ですけど……」

「う……うむ……」

「墨で塗りつぶされて……真っ黒になってますよ？」

「な・なんじゃとー！」

そう絶叫し、慌しげに目の前にいくつかの空間を開いていく。

その中の一つが自らの仕事場に繋がっており、寿命が消えているのを確認することが出来た。

急いでその帳面を手元に引き寄せ修正をしようとしたが、時既に遅く……

開いていた空間の一つに、寿命が消えてしまった男性が、今まさに命の灯火を消さんとしているところだった。

「お……」

「お？」

「遅かったわい……」

「……まさか」

「この名前の主……の。いま丁度死におったわい……」

その場を静寂が支配した。そこにいる者は誰一人として声を出せな

い。

5人はお互いに視線を彷徨わせ・・・視線が会ったら逸らすということを繰り返した。

その場の収拾をつけようとするものは皆無だった・・・

0 話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (前編) (後書き)

ちよつと收拾がつかなくなりそうなので前後編にします。
既にだれが誰かは公然の秘密・・・ということでは急いで後編を書きます!

0 話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (中編) (前書き)

と、いうことで後編です。

0 話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (中編)

「う・うわあああああああああああああああああああ！
！！！！！！」

まるで何かに吸い込まれるようだった。

抗うことも出来ずに、ただこのまま消えるのか・・・と思いながら吸い込まれていた。

あの世とやらに行くのか・・・とか、自分って物は消えるんだろ
うな・・・なんて

考えながら、今の状況でまだ考えることが出来ている自分に苦笑したりしていた。

そんな風に目を閉じたまま、かすかに微笑んでいると

「これ、汝はここで一体なにをしておる」

なんて女性の声が聞こえたような気がする。

俺は死んでるんだから流石に幻聴だろう。

死んだ後に幻聴っていうのm「わらわを無視しやるのかえ？」ナン
ダッテ？

ふと、吸い込まれていた力が無くなっていることに気付き目を開けると

そこにはなぜか真っ赤なチャイナドレスを着た凄い美人なお姉さんが立っていた。

「ふむ・・・汝は死人なれかえ？」

「あ、ああ。さっき死んだってのは覚えている」

「ほう・・・なかなか珍しい死人よなあ。その若さで己が死んでいることを

自覚しておる者など滅多におらんぞ？」

「そうなのか？まあそんなこと言われても、事故で死ぬ瞬間まで意識があったからな」

「死ぬ瞬間までとな？」

「ああ、幸いなことに痛覚が麻痺していたから意識が保てたんだろ
うな」

「ふむ・・・よかろう、わらわに付いてくりやれ？」

「はい？」

「汝は何も言わずに付いてくれよいのじゃ」

「あ、ああ」

それにしてもえらく美人だなあ・・・

それにしても真紅のチャイナドレスか・・・

凄く似合って「似合っておるか？」なん・・・だと？

考えを読むのか？死神かとおもって「わらわは死神ではないぞえ？」

読まれてる・・・

「そういえば汝の名はなんじゃ？」

「ん、人に名前を聞くときは先に名乗るものじゃねーのか？」

俺がそう返すとなにが面白いのか口元を隠すようにしながら笑いだした。

一体何が面白いんだ？

「汝はなかなか面白いのう。よいわ、わらわから名乗ってやろう
よいか？ わらわは『天照大神』あまてらすおおみかみと呼ばれておるぞえ」

「それはそれはご丁寧に。俺は『水津樹 周治』みづきしゅうじ って言うって・・・

・
はあ？ 天照大神？」

「そうじゃ、わらわの名くらいは知っておろう？」

「いや、なんつーか、知ってるっていうか・・・はあ？」

「なんじゃ、信じておらんのか？」

「信じる信じないっていうかさ、俺にとっては目の前に
人のお姉さんがいるとしか思えないわけよ。」

そのお姉さんが神様っていうのは流石に信じられないっていうか・

・・・」

「まあ信じられんのも無理はないかのう。よいよい、それでは付い
てくるんじゃぞ？」

「わ、わかった」

っていうか言葉遣いは変えたほうがいいn「変えんでもよいよ」や
っぱ読まれてる・・・

つーか付いて来いってどこに行く気なんだ？ やっぱあの世ってヤツ
か？

にしても三途の川とか見なかったなー、やっぱあの吸い込まれてた
ときに

通り過ぎたのかね？ すげえ綺麗だって話だから見てみたかったんだ
けども

「安心してたもれ？ 行く先はあの世ではないゆえのう」

「は？あの世じゃないって・・・どこに行くんだ？」

「此度の事故の責任を問いにいくのじゃよ」

「事故の責任って、俺死んでるからいまさら言ってもさ」

「此度の事故、あれは人間が起こしたものではないよ」

「ハア？」

「なんじゃ変な顔じゃのう」

「いや、既に目の前に神様って名乗る美女がいる時点でただ事ではないって

わかってるけどさ？人間のせいじゃないって言われてもわかんないわけよ。

だったら誰のせいなのかっていうことになるじゃん？」

「そうよのう、先にいうてやろう。此度の事故はわらわと同格の神の起こした不始末なのじゃよ」

「えー・・・っと。どこから突っ込んで良いか迷ってるんだが。とりあえず、同格の神とかなにさ？」

「うん？わらわが日の本の最高神なのは知っておろう？」

「それは流石の俺でも知ってるけどもさ」

「世界には何人も神がいるのは知っておるか？」

「何人も・・・世界中の神話の数だけいる・・・とか？」

「おお、ほんに聡いのう。そのとおりじゃよ。

どれ、もう着くゆえ、然とついて来よ？」

そういつて彼女が目の前に手を掲げると、その空間に裂け目が出来た。

コレはあれか？スキマk「違うぞえ？」そーなのかー

まあいいや、中に入ってたってことは着いていけばいいのか？まあ行くしかないか

「さて、汝らは一体なにをやっておるのかのう？」

「げ！姐御！」

「姐さん……」

「閻魔よ、汝までここでなにをやっておるのじゃ？」

「ワシはぜつとんに急に呼び出されてしもうての」

「仕事を放置して死人を作ったのかや？」

「い、言い訳はできませぬなあ」

「わらわが丁度通りかかったゆえにここにつれて来たのじゃがのう。汝らもきちんと名を名乗るがよいわ。わらわはもう名乗ったゆえ・

・な

「な、名乗ったとはどういう！？」

「なに、名を尋ねたら『人に名前を聞くときは先に名乗るもの』と言われたゆえな、先に名乗ったまでのこと」

「姐さんに先に名乗らせるなんて……」

「いらぬことはよいから早うなのりゃ！」

「は、はい！俺はぜつとん。名はゼウスだ。ギリシアで主神をやっている」

「私はルーやん。名はルシファーだよ」

「不本意ながらデンさんと呼ばれておる。名はオーディンという」

「ワシは閻魔天じゃよ。皆にはエーちゃんなどと呼ばれておるがの」

「わ、わたしはアル……アリスよ」

そう言って5人は次々に自己紹介をしていった。正直信じられないとしかいえない。

だってそうだろう？目の前にギリシア・日本・北欧とそれぞれの主神がいるんだぜ？

まあいまさら騙されたところでどうということもないし……ここにたつてきてくれたお姉さんのことは信じられそうだから信じるか。

とりあえず俺も自己紹介をしないとな。

「俺は「こやつは『水津樹^{みつぎしゅじ} 周治』という」ソーデスネ」

「それで、何をしておったのじゃ？」

「そ、それは・・・」

「わたしが説明しますね」

「な！娘よ！裏切るのか！」

「裏切るも何も、わたしは何も聞かされずに拉致されただけですから？」

「謀ったな！謀ったなシャア！」

「・・・・・・シャアって誰ですか。わたしはそんな名前じゃないです」

少女説明中

「ふむ、つまりはすべてこの二人の責任というわけじゃな？」

「はい、そうなります。それに巻き込まれてエーちゃんさまのミスが起きたわけですから」

「ならば・・・汝がどうにかするのが筋よのう？のおゼウスよ」

「お、俺っすか？」

「汝以外にゼウスがおるかや？」

「いません！わかりましたよ・・・どーすっかなあ」

「ぜっとなん私も手伝うよ」

「おお！さすがルーやん！心の友よー！」

「暑苦しいわ！はようせぬか！」

そういった後で考え始めた2人を尻目に
俺のほうに天てr「好きに呼ぶがよいよ」読むなっつーの
まあお姉さんでいいや。を含めた3人？3神？が集まってきた。
たしかオーデインとアリスだっけ？

「っっていうかさ？お嬢さんはなんの神様なのさ？」

「私は月よ」

「ふむ・・・んじゃアルテミスってどこか」

「な！なんでわかるのよ！」

「は？だってさっきゼウスが『娘』って言ってただろ？

ゼウスの娘で月の女神って言ったら『狩猟の女神』で

『アポロンの双子の妹』で『森の神』でもあっただろ？たしか」

「・・・なんでそんなことまで知ってるのよ」

「俺は神話関係が結構好きでね。いろいろ調べてただけさ。

にしてはさっきアリスって名乗ってたけど、一体なんでさ？」

「・・・初対面の男になんで名前を教えないといけないのよ」

「あー・・・そういえばアルテミスは『純潔の女神』でもあったか」

「ええ、そうね。だk「よっしゃ！こうしよう！」お父様うるさいです」

どうやら俺をどうするのか決めたようで、ゼウスとルシファアの2
人が

こちらにやってきた。このまま輪廻の輪に戻るようになるのか。
それとも何か別のことがあるのか・・・

0 話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (中編) (後書き)

なぜか長くなってしまったので前・中・後編の3本に分けますね@
@;

とりあえず急いで続きを書いてしまいます。

今日中にリリカルな世界にいけるといいなあ・・・

0 話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (後編) (前書き)

ということの後編です。

駆け足で書いてますので誤字脱字や矛盾等ありましたら教えていただけると

助かります。

0 話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (後編)

「なあお前さんさ」

「なにさ。あ、お姉さんから喋り方は変えなくていいって言われているから」

「このままで行かせてもらおうぞ」

「ああ、んなもん気にしねえよ。それよりもお前さ、異世界ってのに興味ないかい？」

「はあ？ 異世界？」

「そう！ 異世界！ 身体はこっちで用意してやっからさ。異世界に転生してみないかい」

そういうゼウスから視線を逸らし、お姉さんへと目を向ける。するとお姉さんもなにか思うところがあったのか喋り始めた。

「それでゼウスよ、いきなり異世界とはいかなることじゃ？」

「えーっと、あれだ。丁度いい具合に出来上がってきた身体があるからさ？」

その身体を使って異世界に送ろうかなーって……」

「……………ほおう？」

「いやいやいやいや！冗談！冗談だってば！そんな睨まなくてもいいじゃん！」

「……冗談でいうたのかえ？」

「ええええーつとよ！お前さんにか叶えたい願いでもあるか？」

「……どうのことだ？」

「一つだけなら何でも叶えてやるよ！」

「なんでそういう話になってるのがちよつとわからんが……なんでもいいのか？」

「おうよ！なんてったって俺は神様だぜ？」

「もし無理だったら願いの数を10個にしてくれ」

「はあ？そんな無理に「出来るじゃろう？」そーですね！」

「だったら、周囲の記憶を改竄せずに俺の身体を修復して生き返らせてくれ」

「おう……そうきたか……」

「どうだ？できるのか？」

「あ……わりい、そいつぁ無理だわ」

「だろうな……」

「他の願いならなんだっていいからよ！ なにか無いか？！」

そういつてあせってるのを誤魔化すようにゼウスが聞いてくる。

やはり元の世界へは返れない……。か。解ってはいたが改めて言われると

結構くるものがあるな……

「ゼウスよ、これで汝はとお（十）の願いを叶えるわけじゃな？」

「あゝ……。まあそうなるわなあ」

「のう周治……。先にこやつが言っておった異世界への転生というのはどうかや？」

「元の世界以外っていうのならどこでもいいさ……」

「むう、そう悲観的になるでない。わらわも手助けをしてやるでない？」

「姐御の手助け……。て」

「それでじゃ、いうておった身体とやらはで来ておるのか？ ゼウスよ」

「おうよ！ こいつあすげえぜ！？ チートもいいところで最強だぜ？」

ゴールドセイント
1・黄金聖闘士を凌駕する身体能力

2・某ゲームの『王の財宝』が使用可能

（この世界のすべての武器防具が内蔵されている）

3・死という概念を消去したことにより、完全な不死
どうよ！これだけでもすげえチートだろう！」

「ならば、わしからはミームより授かったすべての知識を与えよう」

「おおっと、デンさんも大盤振る舞いじゃねーの！」

「直接の非はないかも知れぬが、止められなかったという負い目があるのではな」

「ふうむ、ならばわからからは・・・そうじゃのう、なにか・・・
ふむ。三種の神器をやろうかのう」

「ちょ！姐御！三種の神器はまずいって！」

「む、そうかのう？ならば・・・この勾玉をやろうかのう」

「・・・これは？」

「うむ、それを握り強く願えばわらわを呼ぶことができようよ」

「普通の人間が最高神を呼べるとかw超チートじゃね？w」

それから紆余曲折あって10個の願いもほぼ決まった。
もの凄いチートになったが実際のところはどうなんだろうな。
ぶっちゃけていうと俺は元の世界じゃない以上どこでもいい。

寧ろどうでもいいとも言える。
そんな俺の思いを知ってか、

「周治よ」

「ん？なにさ」

「どうしようもなくなったら、わらわを呼ぶのじゃぞ？」

「そうだな・・・明らかにこの身体じゃそんなことにはなりそうもないけどな」

「それでもじゃ、よいな？」

「了解、まあ死なないようにするさ」

「まあそういうことでお前さんに任務を一つやるよ。あのな？
転生する以上お前さんも人間の親から生まれるわけだけでもよ。
ちーつとばかり問題があるかもしれんからな。まあ頑張れ！
で、任務は『最低でも5人を幸せにする』コレで行こう」

「はあ？まためんどくさそうな任務だな・・・」

「ま、その超チートボディなら余裕だろうさ！んじゃ、いってきな
！」

「やれやれ・・・それじゃあな。天照のお姉さん。いろいろあり
がとうな」

「気にする必要なぞないわ。よいな？何かあったらすぐに呼ぶのじやぞ」

「りょーかい。ま、行ってくるさ」

そう言って俺が目のある扉に入ろうとしたとき。後ろからゼウスが呼び止めた。

「あ、そうだ。コイツをサポートに連れて行けよ」

「ん？」

「っってお父様?!」

「こいつがいりゃあ、大体はなんとかなるだろうさ！」

「ははっ、まあやってみるさ」

「どんな世界かはわかりませんが、仕方ないですからサポートしてあげます」

ま、ヨロシクな……そんな事を思いながら俺の意識は遠ざかっていった……

「それにしてもさう、結局ドコの世界に送ったのさ？ ぜっとな」

「んー？ この世界だぜー」

「うん、あれだね。願いで魔力を上げといて正解だったね」

「面白くなりやいいんだけどなw」

「それにしても人間の発想力ってすごいよね」

「そうだなーアレだけでも最強とか思ってたのに、もっと上を作るんだからすげえよな」

「二人だけで話しておらんと詳細をきかせぬか！」

「おおう姐御……」

「えっと、この世界ですよ？」

「なにになに？ 『魔法少女リリカルなのは』……？ なんじゃコレは？」

「まあ彼が着いてからのお楽しみってことで！」

「ふむ……あまりこういうことを何度も繰り返すでないぞよ？」

「へーい。んじゃま、各自でやっこさんのモニターをするってことで！」

んじゃお疲れさーん」

そしてそれぞれ自らのテリトリーに帰っていった。俺はあとから聞いたことだが

天照のお姉さんは最後まで俺の心配をしてくれていたようだ。

そんな風に心配してくれる相手がいるってのは嬉しいことだよな。さて、新しい世界はどんなところなんだろうな。

今度は死なない程度にがんばりますかねー！

身体のス펙&願い

1・黄金聖闘士を凌駕する身体能力

ゴールドセイント

なおこの特性には、一度受けた技は二度は効かない

自身の身体能力だけで拳速が光速を超えるなど物理法則を無視したものもある

2・某ゲームの『王の財宝』が使用可能

（この世界のすべての武器防具が内蔵されている。

この武器には神・魔・聖などの名前が付く物も含まれる

例「聖剣デュランダル・魔剣ティルフィング・神剣天叢雲剣」等あまのむらくものつるぎ

3・死という概念を消去したことにより、完全な不死

4・ミームルの泉水の効果により、この世のすべての知識を有する

5・天照の勾玉により霊的・魔法的防御がEXランクである

以下は願いにより付加されたもの

1・記憶の保護（一切の記憶を失うことが無くなる）

2・記憶の修復（水津樹 周治としての記憶を失わずに転生させる）

3・力の類の極大化（魔力・霊力・気力・神力・妖力・剋力・魅力が全てEXランクである）

4・FINAL FANTASYの召喚獣を召喚できる（シリーズ全て）

5・全ての宝具の真名開放可能

6・古今東西のありとあらゆる武術を使用可能（武器の種類問わず）

7・周治が記憶している作品（漫画・アニメ・ゲーム・小説等）の武術・魔術・技術使用可能

8・使い魔かそれに順ずるなにかが欲しい

（アルテミスが常に傍にいることになった要因）

9・答えを出す者の能力の付与

10・周治が選択したアイテムを限界数圧縮して『王の財宝』に収納
（限界数とは255個である）
ゲートオブバビロン

周治が選択したアイテムの内訳

エリクサー・ラストエリクサー・コテージ・フルポーション・フルエーテル

万能薬・弾丸等銃火器の備品・オリハルコン・日緋色金・ミスリル
ヒビイロカネ

スリースターズ・ダイアバングル（FF7）・マスターマテリア（魔法・コマンド・召喚）

他は随時追加予定

0話一裏 とりあえずてめえらはぶっ飛ばす! (後編) (後書き)

間違ってESCを押して5回消えました・・・orz

こまめにコピーをとることにしよう・・・そうしよう・・・

それにしてもほぼ会話になってしまった。

もっとうまく書けるようになりないなあ。

それでも次回からはなんとかリリカルの世界に入れそうです。

無駄に長かった・・・

あと天照に対する呼び方は

ゼウス || 姐御

ルシファー || 姐さん

オーディン || 天照殿

閻魔 || 姫神殿

アルテミス || 天照様

主人公 || お姉さん

1話 俺 誕生!・・・早速ピンチです(前書き)

こんにちは、または、こんばんわ。

チート設定にし過ぎたかなあ・・・などと考えている作者です。
話の展開を上手く持って行きたいんですけども・・・
誰か文章構成能力を譲ってください! (切実)

1話 俺 誕生!・・・早速ピンチです

うーん・・・意識が戻ってきたっつか・・・目が覚めたっつか・・・

「先生!呼吸をしません!」

「急いで逆さに持って背中を叩くように!早く!」

おいおいなんだよ・・・ただでさえなんか苦しいのに・・・とりあえず眠いんだから寝させろよ・・・

パンツパンツ!

「ひうつ・ふぎやあああああああ!!!(ちょ!いてえじやねえかよ!)」

「呼吸戻りました!それにしても大きな泣き声ですねえ」

「戻ったか・・・良かった良かった。これで一安心だね」

「ふぎやあああ!ふぎやあああ!(は?!何だよこれ!巨人か?!)」

「さ、お母さんのところに行きましようねえ」

「うぎやあ!おぎやあ!(お母さん?!どうなってんだよコレ!)」

「はいどうぞ〜元気な男の子ですよ〜」

「生まれてきてくれてありがとうねえ。私の赤ちゃん……」

「ほぎゃあ！おぎゃあ！（転生って……赤ん坊からなのかよー！）」

『命名 橘 朱兎』
たちばな しゅう

そうか……また『しゅう』って名前なんだな……
その日、俺はもう一度生まれた。

よし、ということで生まれてから3年間のことは聞かなくてくれ。
寧ろ忘れさせてくれ。……まあ能力のせいで忘れたくても忘れ
られないけどな……
どう考えても羞恥プレイとしか言えない内容だから！
身体は生まれたばっかでも、魂は20歳超えてるんだよ！

ただ一ついえることは……いや、忘れよう。忘れるんだ！俺！
とりあえず、母一人子一人で生活しているわけだ。

まあぶっちゃけて言うとき、俺が生まれた家は滅茶苦茶貧乏です。っていうかどうよコレ……おかしくね？

父親とやらは、母さんが俺を妊娠したってわかったら旅に出たそう
だ。

俺には明らかに逃げたとは思えんがな。母さんは旅に出たと信じてるようだけど。

当然仕送りもなにも無いわけだ。じゃあ母さんの実家はどうかという、

ドコの馬の骨かも解らんような男に孕まされたつつつて勘当されたらしいわ・・・

・
つてことで俺の家の生活費は、母さんのバイト代しかないわけだ。
・

俺を見ながら働かないといけないわけだから、まともな職には就けるわけも

無いわなあ……流石に3歳の俺じゃ、働くわけにもいかんしな……

まあ・・・そこらの大人じゃ全く相手にならんほどに身体能力は高いわけだが？

いろいろな貴金属も『王の財宝』の中にあるっちゃあるが？

急に子供がそんなの持ってたなら不審な上に、うちの母さんは俺がそんなもの持ってたなら

100%気絶する！・・・つーか倒れるな・・・にしてもどうにかして収入を得ないと

このままだと、俺はいいけど母さんがヤバイ。どうすれば……

「ねえしゅうちゃん」

困ったぞ。年齢って言うものは此処まで枷になるものだったのか・
・

「しゅうちゃんってばー」

発明でもして顔を晒さなければ問題ないか？特許でもとれば・
・

「もー！しゅーちゃん！」

「うわっ！急に何んなのさ母さん！」

「急じゃないもん！お母さん何回も呼んだんだもん！」

「・・・あー、ごめん。考え事してて聞いてなかったんだ。
謝るからそんな涙目にならないでよ」

「むー、泣いてないもん！いくらしゅーちゃんが大人っぽい
って言っても、まだ3歳なんだからね！」

「わかってるってば・・・もっと子供らしくしろって言いたいん
でしょ・・・」

「そういうのが子供っぽくないのー！」

「はぁ・・・ごめんごめん」

一事が万事こんな感じなわけで・・・

もうコレはあれだね。勾玉を握り締めてお祈りしても許されるよね？
だって今日の朝食とかアレだよ？俺には卵とか野菜炒めとか出してるけど

母さんはパンの耳とかバイト先でもらった廃棄処分の弁当とかだよ？
それも明らかに足りてないだろう量だし、1日3食は絶対に食べてないし。

俺が生まれた当初はもっとふっくらしてたと思うのに、今は滅茶苦茶細くなってるし。

「それじゃあしゅーちゃん。お母さんはお仕事に行って来るねえ。
いい子でお留守番しててね？」

「はいはい。母さんの方こそ氣をつけて行ってね？」

「だいじょーぶだいじょーぶ！お母さんだから！」

「そうだね。それじゃ、いってらっしゃい！（だから心配なんだよ・・・）」

「いってきまゝす」

天照のお姉さん・・・周治は、っと今は朱兎だ。

朱兎はどうすればいいのやらわかりません・・・いやマジで。

俺には打開策が・・・

『さつき発明をすればと考えておったんじゃない？』

そうなんですけども……母を支えてくれる友人の一人でも居てくれないものか……とか考えてしまうわけですよ。実家から遠く離れたこの街で、知り合いも友人もなしに親子二人で生きていくのはなかなか厳しいものが……

『汝が友人を作ればようじやろう？』

そうは言っても3歳のガキの友人が、母親とは言え20歳そこそこの女性の友人っつーわけにはいかんでしょうに……
っていうか、なんか返事があるようなキガスル
一人で考えてたはずなんだけど？アレ？

『汝の声が聞こえたゆえな、来てみただけじゃ。
それともわらわが来ると迷惑だったかや？』

ってほんとにお姉さんだったのかYO！
っーか神様が人間界にこんなに簡単に来ちゃっていいの？！

『良くはないがの、汝の様子を見ようかと思うてのう』

様子……様子ねえ……まあこんな状態ですよ。

何とかして母さんを助けたいんだけど、どうすればいいのやらって
ところ。

『じゃから発明をすればよいのじゃ』

発明したとしても、それを売り込むことも出来なければ、
特許をとることも出来ないんだよ！こちとら3歳児だぞ！

『ならばわらわが姿を現せばいいのかや？』

明らかにおかしいですから！残念！

っていうか神様なんだろう？！特許の取得方法とかわかるのかよ！

『いや・・・わからんのう。じゃが母親の友人になればようので
あろう？』

それも大事だけど、根本的な解決にならねーから・・・orz

『じゃが汝は何ゆえにアルテミスを呼ばぬのかや？

あの娘ならばそれくらいのこととは出来るとおもうのじゃがのう』

はい？呼ぶ呼ばないっつか。呼べるの？

月の女神さままだよね？　っていうか呼んで大丈夫なの？

『女神もなにも、汝の願いによりて常に傍に侍るようになっておるのじゃろう？』

・・・常につて、もしかして冗談抜きでいつもって事だったのか？
?@@;

んじゃアルテミスー来てくれー！　とでも祈ったら来るとかか？

「呼びましたか？」

「うわっ！　急に後ろから声をかけられたら驚くだろうが！
ってアルテミス？　！　なんで此処に？　！」

「なんでもなにも、貴方が呼んだんじゃないですか・・・
それで？　何の用なんです？」

「これこれ、そうけんか腰になるでないよ」

「けんか腰になんてなってません！　結局何のようなんですか！」

「けんか腰っつーか怒ってるんじゃない・・・」

「周治も混ぜ返すでないわ、お嬢もまずは話を聞くものであろ？」

「・・・解りました。それで？」

「ああ、実は……」

少年（？）説明中

「ってことでさ、どうしようかと思ってるんだけど」

「とありあえず、特許取得などの知識は何かあります。
友人の件も、私が現界すればいいでしょう。それでいいですか？」

「あ、ああ。頼めるのか？」

「この状況で嫌ですって言えと？」

「いや、助かるよ。ありがとう」

「べ、別に貴方のためにやるわけじゃないです！
天照様の要請だから仕方なくなんですからね！」

「そ、そうか……まあ助けてくれるのは嬉しいからさ。
御礼くらい言わせてくれよ」

「まあいいです。とりあえずさっさと発明なりなんなりしてください。
い。」

「そうしないと準備しても意味がありませんから」

「わかった。今からなにか考えてみるよ。でもすぐには考え付かない
かもしれないから、暫く待っていてくれ」

「ボソリ．．．（むう．．．わらわを除け者にして二人の世界じゃなあ）」

ソコ混ぜ返さない！反応するから！

とりあえず何かを発明or開発するとして．．．

何を作ろう？何を作れば需要があって供給もいけるのか．．．
よし、ここはアレだな。

スキル アンサートーカー
能力…答えを出す者発動

最適を見つけてやる！母さん、待ってるがいい！楽をさせてやるからなあ！

にしてもそういうば、ここって地球なんだよな？

「ここは地球の海鳴市ですよ」

「そうじゃのう、汝の記憶にもある名前じゃろう？」

ハイソコ、人の思考に突っ込まない。っていうかなんだって？

．．．．．海鳴？

魔王？

りカルな魔砲少女な魔王の世界だとー！！！！！！

1話 俺 誕生！・・・早速ピンチです（後書き）

あとがきと言う名の言い訳っぽい対談

作者「と、いうことでね。やっとリリカルに入れましたよ・・・と」

朱兎「いや、入ったっていうか、やっと解っただけじゃん？」

作「まあそうなんだけどね？」

朱「相変わらず文章能力ひっくいな」

作「やっかましいわ！このチート野郎！」

朱「そのチート野郎を選んだのはお前だろうが！」

作「うっさい！大体てめえはフラグ立てるのがはええんだよ！」

朱「はあ？何言ってるのかわかんねえよ！」

天照「汝らはいいい加減にせぬかや。

ほれ読んでくれておる人々があきれておろうが」

作「む、まあしょうがない」

朱「わかったよ。天照の姉さんがそういうなら・・・」

天「作者もはよう話をすすめるのじゃよ？」

作「へーい。まあ仕事で疲れてなければ更新はするけどね」

朱「最低1日1話は書けよな！」

作「まあ書ける限りはな……」

作&朱「それでは、次回第2話『コレっておかしくね?』を
ご期待ください！」

天「期待してよいのかのう……」

2話 コレっておかしくね? いやマジで(前書き)

気が付いたらPV20,000&ユニーク2000を超えました。
まだ書き始めて4日目なのに・・・
リリカルな魔力・・・恐るべし!

文章構成能力と速記能力が切実に欲しいです・・・orz

2話 コレっておかしくね? いやマジで

「ちょっと思っただんですが」

「ん?なんだよ」

「これは明らかにオーバーテクノロジーなのではないですか?」

「・・・・・・まあアレだ。気にすんな」

「簡単な物で・有用性が高く・開発が難しい物にするんじゃないかなかったです?」

「いやゝそのつもりだったんだけど。でもな」

「でも・・・・・・なんですか?」

「ミームルのおかげで材料とかいろいろわかってさ。
アンサートーカ
答えを出す者で作り方もわかつちゃってさ」

「それで?」

「ついカッとなって作ってしまった」

「『つい』なんだったらもつと簡七「だが後悔はしていない!」反
省してませんよね?」

「まあいいじゃないか、よく言うだろ? 大は小を兼ねるってさ」

「言いますけど、大きすぎるから問題なんです！」

そういつて怒るアルテミス改めアイリスをなだめながら、
今回自分が作ってしまった作品を見てみる。

見た目は1.5cmX3cmX5mm程度の何の変哲もない長方形
の物体である。

だが驚くなかれ、このサイズでもものすごい量の情報を記録できるの
である。

これだけ聞くとただのフラッシュメモリじゃねーの？と思うだろう。
しかし！詳細を聞いて驚け！なんと！

『USB3.0対応超大容量記憶媒体』このサイズで
1ペタ（1000テラ）もの情報を保存することが可能になってい
るのだ！

その名も『プラズマメモリ』なんだぜ！

もちろんネットカフェに行ってきちんと作動確認済みなのだ！

さすが俺！超天才だZE！

「いかさまですけどね」

「・・・毎回言うけどさ」

「なんですか？」

「人の思考に突っ込み入れるのをやめい」

「仕方ないじゃないですか。パスが繋がってるせいで、
聞きたくなくても聞こえるんですから」

「自分の意思でカットとかできねえのかよ」

「できますよ」

「じゃあやれよ！」

「嫌です」

「なーんーでーだーよ！」

「わたしと繋がってるのは嫌ですか？」

「え、嫌じゃないけど……」

「だったら問題はありませんね」

「そういう問題じゃねーだろ?! 大体こっちの考えは丸聞こえなのに、」

お前の考えはこっちに聞こえねーじゃねーかよ!」

「女の子の考えてることが知りたいだなんて……変態ですか？」

「……………もういいよ。不毛だ」

「そうですね、まあ言ってしまうえば、自分の意思でチャンネルを閉じてる

というだけなんですけどね」

「……………さいですか」

なんか物凄く疲れた・・・orz

まあとりあえずはこれで特許でも取れば少しは楽になるかな・・・

「ああ、特許をとる時の名前はお前の名前でよろしく」

「無理ですね」

「は？なんでさ？」

「わたしの戸籍はまだ作ってませんから」

「なん・・・だと・・・」

「ですから、登録はあなたの名前ですることになりますね」

「わらわならすぐにでも戸籍など作ることもできようよ」

「いやいやいや、照姉はさすがに現界し続けるのはまずいでしょ」

「なにゆえじゃ？わらわも久方ぶりの下界なのじゃぞ？」

「そんな目で見てもだめだってば、大体照姉は日本の最高神でしょ？！」

「むう・・・つまらんのう」

「まあ、頼んだぞ。アイリス」

「ええ。それでは行ってきますね」

「わらわも現界したいのう」

そう言って軽くむくれる日本の最高神こと天照大神……
いや、ものすごくかわいいインデスヨ？

なんでそんな風に拗ねるのさ？

んでもって何故に俺が宥めにゃならんのだ？

っていうかこの構図もおかしくね？

……まあいいや、とりあえず作り方と理論と現物はアイリスに
渡してあるし大丈夫だろう……大丈夫だよな？

まあ大丈夫と信じよう！そうしよう！

それにしても原作キャラとの接点が無いって気楽でいいね！

死亡フラグは出来る限り無いほうがいいんですよ奥さん。

っていうか士郎さんが大怪我するのっていつだったけ？

たしか公園でなのはが泣いてるのが……

小学校に入った当初だった気がするんだよなあ

回避するか、介入するか……

どのみちこの世界で生きていくのは間違いないわけで。

しかも『最低でも5人を幸せにする』とかって任務があるんだよなあ。

5人……

5人？

士郎さんが回復すれば高町家も落ち着く

←

そうするとなのはの悲しみも減る

←

高町家（最低2人・士郎さん・桃子さん）は幸せになるんじゃない？

よし、コレは介入するしかないな！
にしても、どうやって介入するべきか・・・
なにかいい手はないもんかなあ・・・

「ただいま帰りました」

「おう、おかえりアイリス。で、どうだった？」

「審査があるので、すぐに判定は出ませんが。」

「まあ他の会社が自分のところで研究していたものだ！って言うてきたとしても

8通りの作成書と構造書をつけてあるから、見比べれば簡単にわかるだろうしな」

「妙に書類の枚数が多いと思ったらそんなものも付けていたんですか」

「それくらいしとかなないとIT技術ってのは認められにくいと思つてさ」

「わたしには良くわかりませんが・・・そういうものなんですか」

「そういうものなんですよ」

ま、結果が届くまでのんびりと待つとしますかねー
なるべく早くは結果を出してほしいけどねえ

そんな風に考えていた頃もありました。

ただいま絶賛誘拐中です。どうしてこうなった……

一人なら簡単に逃げられるのにさ

なんで同時に3人（俺含む）も拉致るのかなあ。

逆ににげらんねーじゃん！

2話 コレっておかしくね? いやマジで(後書き)

作者「はい! ということでね、第2話を書いてきたわけですけども」

朱兎「はいセンセイ」

作者「ハイソコ」

朱兎「よこで転がってるお姉さんと椅子に縛られてる金髪幼女って」

作者「こらこら、ネタバレは禁止ですよ?」

朱兎「ネタバレもなにも、この二人って……」

作者「あゝあゝきーこーえーなーいー」

???「んゝむゝゝ!」

作者「あー、猿轡ってさ……上手くすれば喋れるよね」

朱兎「俺なら噛み切るけどな」

作者「そんなことが出来るのはお前くらいだよ」

朱兎「んなことねーよ」

???「んー! んー! んううー!」

作者「ああ、はいはい。落ち着いて落ち着いて」

朱兎「あんまり暴れたら擦れて怪我するぞ？」

作者「そうそう、どの道次話をUPするまではそのままなんだからさ」

朱兎「…………お前ってさ」

作者「ん？なにかな？」

朱兎「ドSだよ……………」

作者「H A H A H A！なにをおっさるやら！」

朱兎「はあ…………もういいよ。次回『出会いは偶然？』を活目して待て！」

作者「ちょ！俺のセリフとるなー！」

天照「いい加減五月蠅いやつらじやのう……………」

3話 出会いは偶然？（いえ必然です）（前書き）

更新が滅茶苦茶遅れました・・・orz

風邪引いたりイロイロあったんです。

ええ、イロイロ・・・orz

3話 出会いは偶然？（いえ必然です）

結局、特許申請をしてから許可が下りるまで1年半かかった。

こんなの誰も開発してねーんだから、さっさと認可しろよ！とか思ったのは

俺だけの秘密だったりなかったり。とりあえずはこれで暫くの生活費には

困らなければいいんだけど・・・まあとりあえず5歳になったわけ。

なにはともあれ、今日も今日とて公園で日向ぼっこ真っ最中です。だって傷心のなのは嬢を慰めてor保護して原作介入しようと思ってるんだけんども

肝心のイベント出現時期がわからない！これは真剣に困った・・・たしか5〜6歳くらいにイベントが発生したはず！

ってことで、5歳になってからほぼ毎日公園に遠征いたしておる次第であります。

・・・にしても、ぼけーつとしてるだけだと超ひまだわー
ちよっとプラズマメモリー理論の改善点でも考えてみようかなあ・・・

スキル アンサートーカー
能力…答えを出す者発動

ふむふむ・・・やっぱ此处がこうなってるからあっちはこうして・・・

「すごく難しい数式だねー」

「まあ難しいからな」

にしても、これは上手くすればMAX3ペタまでは詰め込めるようになるんじゃないのか？

「これってなんの設計図なの？」

「あ？プラズマメモリーに決まってるだろうが」

そうそう、1ペタ≡1000テラってことは流石にわかるだろうか
ら……

「それってこの間特許取ったやつだよね？」

「ああ、俺の名前で取ったやつだよ」

「え？君が作ったの？！」

「あゝあゝ？何言って……って誰？」

誰この人？え？あれ？

「あー、ごめんねー。なんか凄く集中して書いてたから何かなーっ
て思ってたねー」

「えーっと・・・見た？」

「うん。君がプラズマメモリーの開発者なんだよね？」

「よし、とりあえず忘れてくれないか」

「いやーちよーっと忘れられないk「大人しくしてもらおうか！」はい？」

「二人とも大人しくしてもらおう！動けば撃つ」

えーっと・・・なにこの展開。日課の日向ぼっこでへんなお姉さんと会ったら

拳銃を持った男5人に囲まれるとかさ。どうでもいいけど、このお姉さんが

居るせいで逃げるに逃げられないじゃん・・・

「えーっと、とりあえず僕にはk「黙れ」ういーす」

「大人しくこの車に乗ってもらおうか。下手なまねをしたらこのガキを撃つからな」

「わかった。でもこの子は関係ないでしょ！たまたまあっただけなんだから！」

「そんなのは関係ないさ。丁度いい人質だからな」

「下衆！」

「さっさと乗れ！」

つまりあれか？俺は巻き込まれた・・・と。めんどくせえなあ・・・
葉でもなんでもいいから、このお姉さんを気絶させてくれねえかなあ
はあ・・・車に乗ったら乗ったで縛られるし、目隠しまで・・・
どうせすぐに千切れるけどさ。ウザイことに変わりはないんだよな・・・

あっ！

というまにどこかに到着。担ぎ上げられて・・・
これは階段を上ってるのかな？潮風の臭いがするってことは海の近くか。

埠頭の貸し倉庫ってとこかなあ。貸し倉庫って階段あんのか？っと、目隠しが外れたな。

・・・えーっと？椅子に縛られてる金髪幼女（推定5歳）はなんだろうね？

意図せずに原作介入ってか？あ、幼女と目が合った。
涙目とかなんか萌えるんですけど？！もしかして、もしかしなくてもこの子ってAr「さーて、なんで攫われたかは解ってるよなあ？」
てめえ・・・

人の思考に割り込んでくるんじゃない！

「ええ？月村本家のお嬢さんよお」

「つまり私がお目当てってことなのね？」

「本家って言うてる時点で目的もわかってるんじゃないか？」

「……暗殺」

「ご名答！あんたが居なくなったら良い思いをするお方がクライアントさあ」

「……あー、月村本家。お嬢様。年齢的に……はい、月村忍さんですね。」

「なに？本家と分家の争いですか？なんで他人を巻き込むかなあ……」

「私が目的なんだったらこの子は無関係でしょ！」

「あんたが普通じゃないことくらいわかってるからなあ。保険だよ保険」

「あー、俺ってば安牌アンパイですか、そーですか。つまり忍嬢が暴れられないように」

「ストッパー及び人質として一緒に拉致られた……と。」

ふざけやがって……いい度胸してんじゃねーの……

「それに！そっちの椅子に縛られてる子はなによ！」

「こっちは別件だよ。あんたとは別口での依頼でね」

「な！依頼されて誘拐なんて！」

「お嬢さんにはわからない世界ってのがあるもんなのさあ。

バニングスの娘だからなあ、なかなかいい稼ぎになってくれるんだぜえ？」

「バニングス……！」

はい、アリサさんご指名はいりまーす！

っていうか原作キャラとの初顔合わせが誘拐ってどうよ？

もひとつ言うとかさ？明らかに俺が起きてるの気付いてるよね？

「私は大人しくするからこの子は帰してあげて」

「いいぜえ？お嬢さんがこの薬を大人しく飲むならなあ」

「わかった。飲m「あー無駄無駄」え？」

「大体俺がこうやって起きてることに気付いてるのに話てる時点で生かして帰らせる気が無いことくらいわかるっしょ？」

「なんだ、ガキのほうが気が回るんじゃないか」

「人質を二人も用意してる時点でお姉さんには詰みでしょ」

「はっ！口のへらねえガキだなあ。だが言ってることはあたりだよ。お前さんの言うとおりだーれも生きては帰れねえさ」

「はいはいワロスワロス」

「あゝあゝ！？お前から先に死んどくかあ！」

「そーですねー」

「てめえ……」

はあ……。頭に血が上りやすいなあ全く。この程度の挑発で怒るなんてさ
ま、アレだな。さっさとこいつら潰して二人とも助けて帰るとし
ますかね。

「よっこらしよっと」

「な！てめえロープで縛ってあったはず！」

「ハア？あの程度速攻千切ったにきまってんじゃない」

「き、君！私の後ろに隠れて！私の後ろならすぐには撃たれないか
ら！」

「君じゃなくて朱兎^{しゅう}って名前があるんだけど？」

「あ、ごめん……ってそうじゃなくて！」

「大丈夫大丈夫。この程度のザコにやられてたらいろいろ笑われるし」

「ザコって……」

「ガキいてめえ死んだぜ」

「はいはい、そーですねー」

まあこいつら程度にやられるようじゃチートボディな俺としては恥ずかしいしね？

さーてサクッと潰して帰りますかねー

「5対1じゃハンデにもなんないしー」

「死ねやゴラァ！」

パンツ！

「あうっ！」

「おーっと、てめえが動くからお嬢さんにあたっちゃったなあ？」

「……………あー、よし。決めた。お前潰すわ」

うん、よし殺そう。動けないようにして周りの奴らから先に潰して最後にゴミクズのようにグチャグチャにしてやる……

「てめえが動くからいけねえんだぜえ？わかったら動くんじゃないやねえぜえ」

「お前はもう黙れ『リストラクション』」

「?!な!か、身体が動かねえ!てめえ何しやがった!」

「アホかお前は。種明かししてやる必要がどこにあるっつーんだよ」

「クソがつ!おいてめえら!さっさとやっちゃまえ!」

「ああ、無駄無駄。当然だけど全員動けねえよ」

種明かしをすると、スコーピオンのゴールドクロス蠍座の黄金聖闘士のミロの技

リストラクション…中枢神経に指先から衝撃波を打ち込み、相手の動きを封じる

ってのを使ったわけだけでも。まあ言う必要はないわな。

「さーて、それじゃあまずはお前以外をぶっ飛ばす!受ける獅子の咆哮!『ライトニングプラズマ』!」

おー、さすが黄金聖闘士の技は凄いね！みんな車田落ちをしてくれたよw

あとは忍嬢を撃ってくれやがったコイツだけだな・・・どうしてくれよう・・・

「お前の敗因は…たったひとつだ…たったひとつのシンプルな答えだ…」

『お前は俺を怒らせた』くらえ、蠍の一刺し、真紅の衝撃！

『スカーレットニードル』！

「うぎゃあああああああ！」

あらら、泡吹いてるわーなっさけな。いくら14発撃ち込んだからってさ。

注（15発目を『アンタレス』といい、打ち込めば相手は死にます）
おっと、早く忍嬢を手当てしないと！

「つと、月村さん・・・でしたよね？大丈夫ですか？」

「ん、弾丸は貫通してるみたいだから血を止めれば大丈夫・・・
それにしても朱兎君だっけ？君強いんだね」

「気のせい気のせい。どうでもいいからさ、さっさと帰ろうよ」

「あ、そうだねーあっちの子のロープも解いてあげてくれるかな？

その間に連絡しておくから」

「りょーかい。んじゃ連絡よろしくー」

さてさて、アリサとの初顔合わせはどうかなー？

「君も大丈夫だった？」

「アンタ・・・」

「ん？」

「何者よ・・・なんなのあれは。ぜんっぜん見えなかったんだけど！」

「えーっと、とりあえずアレだ。細かいことは無事助かったんだからいいじゃないか」

「あんたねえ！」

「あーはいはい。今度機会があれば教えてやんよってことで今は諦めれ」

さて、今度の機会っていつになることやらなあ？確信犯？

いえいえ、幼女が気付かなかっただけですから！ってことで。

さっさと帰りますかねー

帰ったら照姉とアイリスに説教されました。コンチクショウ

3話 出会いは偶然？（いえ必然です）（後書き）

作者と朱兎＋αのあとがきコーナー

作者「はいっ、ということでねー第3話。お送りしたわけですよ」

朱兎「おせーよ」

作者「お送りしたわけですけども」

朱兎「1日1話じゃなかったのかよ」

作者「えーっと」

朱兎「1日1話って言ってたよなあ？」

作者「ごめんなさい・・・orz」

朱兎「で？一体なにやってたわけよ？」

作者「えーっと、広島にいたり風邪ひいてたりストレス溜まったり？」

朱兎「広島ってアレだろ？東方だろ？」

作者「そうそう、アレアレ」

朱兎「なにしに行ったんだよ。お前東方とかわかんねーじゃん」

作者「だいじょーぶだいじょーぶ！シューティングはよくわかんないけど」

朱兎「だめじゃん……」

作者「かわいいは正義だ！まあいいじゃんキャラはわかるし」

朱兎「あーはいはい。で、実際どうなのよ」

作者「こっちが完結できたら考えるよ」

朱兎「そりゃそうだな。さて！この先どうなっていくのか！」

作者「それは作者にもわからない！」

朱兎・作者「それでは次回『二度あることは三度ある！』をお楽しみに！」

朱兎「結局＋αってなんだったんだ？」

作者「あ……ワスレテタ……」

朱兎「あーあ、死んだな……お前」

4話 二度あることは三度ある！いえ一度で十分です・・・（前書き）

気合入れて書いていきまっす！

こんなダメ作者ですが、読んで頂いている皆様のため？

まあ自己満足的なものも多々ありますが・・・（え

寝てるよりは書いてるほうがいいのでー

ちなみに書き溜めとかプロットとか作ったことはないので
遅くなったら申し訳ありません・・・orz

4話 二度あることは三度ある！いえ一度で十分です・・・

「大体朱兎は危機管理能力が乏しいのです！」

いやそんなこと言われても・・・

「そうじゃそうじゃ！なぜわらわをさっさと呼ばんのじゃ！」

いやいや、あなたを呼んだら大事どころじゃないですから！
つていうか最近どんどん若返るといいうか幼児退行してませんか？

「聞いているのですか！朱兎！」

「わかったから、もう勘弁してくれよアイリス・・・
流石に一時間以上正座で説教は厳しすぎるだろう・・・」

「いいえ！まだ甘い位です！」

「そうはいうけどもさー、結果的には原作キャラの2人も助けられたしさ」

「必要以上に自分の力を見せた上ですけどね」

「いや・・・まあ・・・うん」

「あそこで技を使う必要なんて無かったはずですよ！」

「だってさ、ムカツクじゃん？俺を狙うならまだしも、身動きの取れない女性を狙うんだぜ？」

「それでもです！朱兎の身体能力なら、ただ殴るだけでも見えなかったはずですよ。」

それを『リストリクション』と『ライティングプラズマ』まで使
って！」

「あーごめん……ついカッとなってやってしまった。今は反省
している」

「なんですか、その心の籠っていない言葉は！」

「だが後悔はしていない！」

「っ朱兎！」

「殺さなかったただけマシだと思ってくれよ……一瞬マジで切れ
かけたんだからさ」

「当たり前です！まったく、朱兎はいつもいつも心配ばかりかける
んですから！」

「アイリス」

「なんですか！私はいま怒ってr「心配してくれてありがとう」も
う……」

「これからも無茶はすると思うよ。でも止められないと思う」

「……なるべくでいいんです。一言教えてください。私が動くことで

軽減されることだったらいくらでも動きますから」

「うん。ありがとう。頼りにしてる」

「わ・わかればいいんですっ！」

「ふたりだけで楽しそうじゃなあ。わらわも話にいれぬかや」

「いや、楽しんでるわけじゃないから（ですから）！」

はい、ぶっちゃけるとこの間拉致られた時の説教です。本当にありがとうございました。

いやね？俺もやりすぎたかなーとは思うんだよ？でもさ、やっぱり許せない

事ってあるじゃん。縛られて身動きが取れない女性に対して銃口を向けるだけでも

許せないのにさ、それを撃つとかさ、もうね馬鹿なの？死ぬの？って思うわけ。

基本的には女性には優しくが俺のモットーなのですよ？

そりゃーキレもするってわけですよ。一般人に『スカーレットニードル』を

14発は流石にやりすぎだったかもしれないけどさ。それくらい怒ってたって

言うことなんだよね。ほら、某ドラゴンも跨いで通る魔導士の人も言ってたじゃん？

『悪人人権ありません』ってさ。だからって言うのもなんだけど、俺の中では

今回のことは許容範囲だと思うんだよね。アイリスには悪いけどさ。まあそんなこんなでそれからのはあの2人にも会うことも無く、毎日公園に散歩を

して過ごしていたわけですよ。もうすぐ小学生になる頃じゃね？とか思うようになってた頃ですよ。やってきました！

『孤独を受け入れてしまった高町なのはIN海鳴公園』イベントですよ！

まったくアレだねー。彼女の家族は何やってるんだろうねーほんと。母親は店で忙しいのはわかるよ。姉も店で忙しいんだろうさ。

んじゃ兄は？小さな妹が一人で苦しんでるのにも気付かないド阿呆な兄は

なにやってんのかねえ？さーて原作への本格介入いつてみますかー！

「ねえ君、どうしたの？」

「ふえ？・・・あ」

「こんなところで一人で泣いてるなんてさ、何かあったのかな？」

「・・・おとうさんが、おけがをして、びょういんにゆういんしてるの」

わほーい！なんつー素直な子や・・・普通いきなり見知らぬ他人に聞かれて

答えるもんかな？！ほっといたら誰かに連れて行かれるんじゃない？！

「そっかーじゃあ家族の人も大変だね」

「・・・うん。おかあさんも、おねえちゃんも、おみせがいそがしいの」

「うんうん、それで？」

「おにいちゃんも、ちょっとこわくて、なのははひとりで、へいきなの」

うん、アレだ。子供特有の支離滅裂ってやつだな。とりあえず翻訳
翻訳

「お兄ちゃんは何にか考えてて怖いの？」

「うん・・・なにかおこってるの」

「そっかーじゃあなのはちゃんは一人で公園に来たの？」

「・・・うん、なのははひとりで、へいきなの」

「じゃあさ、僕と一緒に遊ぼうか？」

「ふえ？おにいちゃん、なのはといっしょにあそんでくれるの？」

「うん、いいよ。それと、僕の名前は『しゅう』って呼んでね」

「!うん! しゅうおにいちゃんなの! なのははなのはなの」

「そういえば、なのはちゃんは何歳なのかな?」

「なのはは5さいなの。もうすぐしょうがつこうにいくの」

「そっかーだったら僕と同じ年だね。だったらおにいちゃんじゃないかな。」

しゅうって呼んでくれたらいいよ」

「にゃあ?! おないどしなの? じゃあ・・・しゅうくん・・・なの」

「そうだね。それでいいよ。じゃあ一緒に遊ぼうか。なのちゃん」

「うんっ♪」

素直に笑顔を見せてくれるのって可愛いわー・・・マジ萌える! いかん! まて、俺はロリじゃねえ俺はロリじゃねえ!

ってまてよ? 俺も5歳、なのはも5歳・・・ポクポクポク・・・チーン

いいんじゃないね? むしろバッチコイって感じ?

まあそんなこんなで、なぜか初っ端からフレンドリーになっちゃった訳だけでも

いろいろ話してるうちに家が喫茶店やってることとか

父親が瀕死の重症を負って、海鳴大学病院に入院していること

優しかった兄が過剰な鍛錬をしていて怖くて一緒にいられないこと等を聞き出せた。

にしても・・・なにやってんのさ、なのはの馬鹿兄貴は!

遺された家族を支えたい一心からの過剰な鍛錬ってことは知ってるけどもさ。

それで幼い妹の心にトラウマとか植えつけるようじゃダメ人間確定でしょ！

よし、これは超介入確定だな！俺が言ったところで聞きやしねーだろうから

さっさと父親を治療して魔王的SEKKYOUでもしてもらおうとするかね！

「ねえ、なのちゃん」

「にゃ？どうしたの？しゅくん」

「お父さんの怪我が治ったら嬉しいよね？」

「うん！嬉しいの！はやくお父さんに元気になってほしいの！」

「おーけーわかった。じゃあ明日にでもお見舞いにいってごらん？」

「ふえ？どうしてなの？」

「病院で一人でいたら、気持ちが暗くなっちゃって治りにくいと思うんだよね。」

「だから、なのちゃんがお見舞いにいって、お父さんに元気を分けてあげようよ」

「お父さんに元気を・・・うん！なのはお見舞いにいくの！」

「ちゃんとお母さんかお姉ちゃんと一緒に行ってもらわないとダメ

だよ？」

「大丈夫なの！なのはひとりでお見舞いに行けるの！」

「・・・そっか。でも気をつけていかないとダメだよ？」

「だいじょうぶなの！」

おーいえー、家族に放置されてた弊害ってヤツか・・・
つーかその大丈夫がめっちゃ心配なのは俺だけなんだろうか？
しゃーねえ、俺がなんとかするしかねえか！

ということで、やってきました海鳴大学病院。午後7時はまだ面会時間内だったようで

受付で部屋番号まで親切に教えてくれましたよ。にしても、瀕死の
っていう割には

ICUとかじゃないのな（笑） どんだけチートなんだよ御神の剣士
は！

さーてさて、さっさと治してなのはちゃんに笑顔を取り戻させてあげないとな！

あとダメ兄にもSEKKYOU（魔王的な意味で）をしてもらわんとね！

4話 二度あることは三度ある！いえ一度で十分です・・・（後書き）

作者「いやー参った参った」

朱兎「あ？何が参ったんだよ」

作者「うん、アレだ。結構短いんだ」

朱兎「はあ？」

作者「丁度区切りが良かったんで切ったんだけどもさ」

朱兎「前の話に比べて短かった・・・と」

作者「そういうこと！」

朱兎「それってお前の腕が悪いだけじゃね？」

作者「・・・・・・・・おーい＋αさーん」

朱兎「おい！無視すんじゃないやめえよ！」

なのは「しゅうくん怒ってるの？」

朱兎「な、なのちゃん！怒ってなんかないよ？」

（作者あとでぶっ飛ばす！）

作者「まあまあ、ふたりはそっちで遊んでいいからね？」

なのは「うん！ありがとうおじさん！」

作者「グハッ！！！！」

朱兎「……作者。さっきのはチャラにしてやるよ……」

作者「おじさん……おじさん……」

朱兎「まあ作者が現実逃避してる間に次回予告を！」

なのは「ねえねえしゅうくんあっちいかないの？」

朱兎「ちよつと待ってね？それでは次回『心に太陽あててるか？』を
ご期待しないでお待ちください！」

作者「ちよっ！頑張ってるから！」

朱兎「では！……じゃ、あっちにいこつか？なのちゃん」

なのは「うん！あっちで遊ぶの！」

5話 心に太陽当ててるか?え?この自己中ヤロウ! (前書き)

とりあえず、先におことわりを

ぶっちゃけ作者は原作を殆ど見ていません!

よって情報ソースはWIKI先生と他作者様がたのSSになっています。

つまり何がいたいかわかると、話し方が良くわかっていませ
ん!

コイツはこんな喋り方じゃねえ!とかこの言い回しはおかしくな
いか?

など、どんなことでもいいので指摘や感想をいただけると嬉しいで
す。

では、本編をドゾ

5話 心に太陽当ててるか？え？この自己中ヤロウ！

「どーもー、高町士郎さんの病室で間違いないですよねー？間違ってますんよねー？おきてますかー？」

うんよし無反応！全身包帯で点滴やらなにやらチューブがいっぱいですな！

まあなにはともあれ、話すのには邪魔だな。

よし、さっさと治して話をしていこう。

「えーっと、とりあえず会話が来りゃいいから・・・っと

適当に『ケアル』ってところかな？」

お、一瞬士郎さんの身体が光に包まれたな。これである程度は治ったかね？

にしても意識が戻ってないようだけど。・・・寝てるだけか？

「どもー、寝てますかー？起きませんかー？起きないと痛いですよー？」

・・・反応が無い、ただの屍しかばね・・・ってわきやないわな！

ちよっとゆすってみるか

ゆさゆさゆさゆさゆさゆさゆさ

「よっこいしょ、もしもーし。高町さーん。おきてくださーい」

「な・なんだ?!地震か?!」

「おー、起きましたか?」

「あ、ああ。って君は一体?」

「あーはじめまして。なのはちゃんの友人?の『橘^{たちはなしゅう}朱兎』と申します」

「こちらこそはじめまして。なのはというのは私の娘のなのはで間違いないのかな?」

「えーっと、喫茶翠屋の娘さんのなのはちゃんだったら間違いないですね」

「だったら間違いはないね。それで?なのはの友達が私に何のようなのかな?」

「えーっと、とりあえず俺がここにいる説明をしますと」

少年説明中……

とまあ、そういうことになってるわけですよ。で、高町さんには・

・
・
と他の家族の方と混ざるので士郎さんと呼ばせていただきますが、ぶっちゃけていうとですね。肉体言語でなのはちゃんのお兄さんに

SEKKYOUをしてもらいたい・・・と思ってるわけですよ」

「確かに今の話を聞いた限りだと、私が恭也に説教をするのはおかしくはないね」

「ノンノン、間違えないでくださいね？説教じゃなくてSEKKYOUです」

「・・・・・・・・なにか違いはあるのかな？」

「全然ちがいますよ？説教ってのは目下の者に対して、教え導くために言い聞かせることや、堅苦しい教訓をいうって事ですよね？」

対してSEKKYOUはアレです」

「アレ？」

「はい。『とりあえずぶっ飛ばす。話はそれからだ』ってヤツです」

「な、なるほど・・・」

「ということ何ですけども。身体が万全の状態でないと厳しいですよね？」

「まあ・・・それはそうだろうね」

「そこでコレです。てててててー『エリクサー』はい、コレを飲んでください」

「えーっと、とりあえずどこから取り出したのかを聞いてもいいか

な？」

「四次元的なナニカです。気にしたら負けですよ」

そういうながら王の財宝から1つのエリクサーを取り出し手渡した。
ゲートオブバビロン
さて、素直に飲んでくれるかな？ 飲んでもらわないと話が進めれないわけだけでも

「ささ、ぐぐーっとお飲みくださいな」

「えーっと、コレは一体何なのかな？」

「ぶっちゃけていうなら回復薬です。それも神の奇跡に近いくらいの

「！ それは・・・？」

「まあ飲んだらわかりますよ。ってことで飲んでください。毒じゃないですから」

「・・・・・・・・わかった」

おお、意外と素直に飲んでくれるな。っと、飲んだ瞬間士郎さんが光った！

っていうか光に包まれた？ 太陽拳じゃあるまいしデコが光ったわけでもないわなw

「これは・・・！」

「どうですか？ だるいとか身体の不調とかないですか？」

「全く無いよ。完全に絶好調ってところかな」

「ふむ。それは良かった。まあエリクサーですから当然って言えば当然ですけど」

「そう、それだ」

「はい？」

「エリクサーとはなんなんだい？」

「エリクサーとは、錬金術に於ける薬。飲めば不老不死となることができると伝えられる霊薬って言われてますね」

「不老不死?!」

「ああ、安心してください。これにはそんな機能はありません
せいぜいが死者さえも蘇えらせるとされる伝説級の秘薬って程度ですよ」

「な！ そんな貴重なものを！」

「ああ、普通の人には貴重ってだけで、俺はまだ200個程度持ってますから」

全然問題ないですよ？ 滅多に使わないし」

「し、しかし！」

「なんなら買ったとして支払い金額に換算してみますか？
軽く12桁は超えるでしょうけど」

「なっ！」

「まあ12桁超えるっていうか、ぶっちゃけていうと。今の時代では手に入らない

材料ばかりですからね。作ることが出来ないだけですよ」

「そ、そんな……」

「ああ、別名を『アクアウイタエ生命の水』とも言いますね」

あー、固まった。流石に固まるよなーそんな伝説の秘薬を飲んじゃ
ったんだもんなー

売っ払えば遊んで暮らせるどころの話じゃないからなー

まあそんなドウデモイイ事は置いといて……

「とりあえず、俺にとってはエリクサーよりもなのはちゃんの方が
大事だったってことですよ。あんな素直ないい子に我慢させてまで
必死なフリしてる自己中やロウが気に喰わなかったわけですしね」

「………そうか」

「ええ、そういうことです。ということでも気にしなくてもいいです
よ？」

コレも俺の自己満足ってやつですから」

「……………ありがとう」

「いえいえ、ではコレで俺は帰ります。今晚一晩はその格好のままここに泊まってください。明日、なのはちゃんがお見舞いに来るように」

なってますから。そのときにでも一緒に帰る様にしてあげるといいと思いますよ？」

「何から何まですまない……………」

「それでは、また会うことがあるときまで」

「ああ、いつでも店の方に来てくれ。私に出来る最高のもてなしをさせてもらうよ」

「そうですね、翠屋にはまだ行ったことがないですから。いずれまた」

そういつて病室を出てから、ふと一つ思った…………

あーあ、折角SEKKYUの現場が見れるかと思ってたのに自分でフラグを潰しちゃった。あー勿体ね…………

まあこれでなのはちゃんの笑顔が戻るってんなら安いもんだけどなー流石にもう一回病室に戻って現場を見せてくれとも言いつらいしなwま、アレだ。イベントを消化したから公園には行かなくて良くなっただけだが…………

小学校に入るまでにあと…………約半年ってとこか。

その間に宝具や魔法なんかも完璧に扱えるように修行でもしてるか

なー

っと、その前に母さんに言って私立聖祥大附属小学校に入れるようにしておかないとなあ

やるのが沢山あるのはいいんだが・・・ドコにイベントが転がってるか

わかんないのが痛いなあ・・・記憶は完璧なのに、もともと殆どまともに

見たことが無かったっていうのも原因だもんな。

まあとりあえず修行の旅に出かけますかねー！

5話 心に太陽当ててるか？え？この自己中ヤロウ！（後書き）

作者「ててててててー万能薬」

朱兎「・・・単に自分が欲しいものじゃねーの？」

作者「はい、そのとおりです・・・」

朱兎「バーカバーカ」

作者「よし、次はどんなフラグを立ててもらおうかあ？！」

朱兎「ちょ！おま！っていうか一つ質問なんだけどよ？」

作者「ん？なんだい？明智君」

朱兎「誰だよ。まあアレだ。なのはが孤独を受け入れてたのってさ
この作品では5歳くらいになってんじゃない？」

作者「うん。そうなってるね」

朱兎「なんで？」

作者「なにが、なんで？なのさ」

朱兎「いや、いろいろWIKI先生とか調べてたのは知ってるけどさ？」

作者「ああ、アレね。実は『小学1年生の時すずかにいたずらをし

て、

止めに入ってきたのはと大喧嘩を起こすが、この出来事をきっかけになのはやずかとは親友になった。』って書いてあったからさ、小学校に入る前に起きたイベントなんじゃないかなーとか思ったわけさ」

朱兎「なるほどねー無い知恵絞って考えてるわけだ？」

作者「悪かったな！でも矛盾は一応ない・・・と思うんだ」

朱兎「まあいいんじゃない？話がまとまりゃーさ」

作者「はい、ってことで今日はこの方！」

朱兎「をい！いきなりだな！」

士郎「やあ、橘君病院ではありがとう」

朱兎「あ、士郎さんだったんですか」

士郎「ちゃんと恭也にはSEKKYOUしておいたから安心してくれ」

作者「うはー・・・痙攣してるよ・・・アレ」

朱兎「さすが士郎さん！そこに痺れる！懂れる！」

士郎「いやいや。それにしてもなのはがお世話になったようだね」

朱兎「いえいえ、そんなことないですよ。凄く素直で可愛いですよ

ね」

士郎「ありがとう。ああ、そうそうお土産を持ってきたんだ」

朱兎「え？」

士郎「妻が作った新作ケーキとなのはが一緒に作ったクッキーだよ」

朱兎「おお！クッキーにケーキ！」

作者「おおおお！俺には俺には？！」

朱兎「ねーよ」

作者「ちょ！おま！」

士郎「まあまあ。ホールで3つ持ってきているから、一緒に食べる
といいよ」

作者「これは・・・シブースト・マンダリン・バナナ！」

朱兎「知っているのか！作者！」

作者「俺も見ただことしかないが・・・食べることが出来るなんて
！」

士郎「このクッキーもなのはが初めて作ったものだよ」

朱兎・作者「な、なんだってー！」

作者「これはアレだ！KYO様のところの京谷にも送ってみようじゃないか！」

朱兎「おいおい、新参者がいきなり送りつけていいのかよ」

作者「しらん！」

朱兎「しらんて……まあいいや（いいのか?!）」

作者「んじゃスキマ転送便で発送……と」

朱兎「あーあ、ほんとに送りやがったよ」

作者「よし、では次回『平凡……』をご期待ください！」

朱兎「あ！なんか纏めやがった！」

士郎「それではこの辺で」

朱兎・作者「なん……だと……！」

6話 平凡・・・・・・・・いい響きだ！

さて、高町士郎さんにエリクサーを飲ませて治療してからはや5ヶ月もう3月になっちゃいました。そう、来月には私立聖祥大附属小学校に

入学するというイベントが待っている・・・・はずだったんですよ。まあぶっちゃけると、母さんに任せてたら、ものの見事に忘れ去られてて

結局普通の公立学校になったってことなんだけどね。

いいんだよ？別にさ。3年のときに編入すればいいだけなんだからさ！

まあどの道学校には行かないといけないぞ。と、いいつつもいまだに修行の途中なわけで。実をいうと半年間1回も家には帰ってません！でも母さんは心配してません。なぜならば！影分身の術を使って、分身を家に

置いているからなのです！いやーこの術って滅茶苦茶優秀ね！

おかげで一気に戦闘能力が向上したよ！唐突だけでもあのセリフを言ってみたくなった俺はおかしくないと思う！

「アタイったらさいきょーね！」

「・・・・・・・・何言ってるんですか？」

「・・・・・・・・聞かなかったことにしてください」

「はぁ・・・・・・・・」

アレだね。きつと皆からバーカバーカって言われてるんだろうね！
まあ後悔はないけどさ！それにしても前から思ってたけども、本当に超チートだわな。

知ってる武器防具及び武術魔術能力がすべて使えるってんだからさ。
ああそうそう、プラズマメモリーの開発等だけど、オフアールが結構来たよ。

その中に『月村』と『バニングス』の名前もあったのにはちよつと驚いたけどね。

だから月村とバニングスの会社に派遣として登録（年齢的に非正規）してあるし、

2社ともから給料がもらえるから、1月に手取りで50万くらいになってる。

これだけあったら、母さんにも少しは楽をさせてあげられるんじゃないかな？

つーか、母さんが前にバイトしてたトコは、俺が迎えに行ったときに上司がセクハラしてやがったから、速攻辞めさせた。当然その上司にも

痛い目にあってもらったけどね（社会的に）

ん？方法？決定的瞬間を激写して親会社に送っただけだよ？

おかしいことはないんじゃないよ？

って・・・本格的に帰らないとヤバイな。入学式・・・明日じゃん？@@@；

さーて、入学式には・・・大人しく平凡を演じましょうかねえ・・・

「しゅーちゃんおきてー。今日は入学式だよー」

「いや、起きてるからね？眠そうなのは母さんでしょ？」

「そんなこと無いよー、ほらほらー準備準備ー」

「いや、準備もなにも。僕もう準備できてるんだけど？
母さんはまだ髪の毛のセットも終わってないでしょ」

さて、母さんの髪の毛のセットをして、洋服のコーディネートをし
ますか！

コレとコレをあわせて・・・ とするとコレはこっちの方が・
・
でもコレにしたら・・・ よし、この組み合わせ
がいいな！

「母さん、食事が終わったら此処に置いてある服を着てね」

「んー、しゅーちゃんの選ぶ服ってセンスいいよねー」

「いや、別にセンスとかどうでもいいし」

「でもでもー無いよりはあったほうがいいんだよー？」

「あー、まあそうかもね。ほらほら、早くしないと時間がなくなっ
ちゃうよ」

「あ、はい」

そういつて再び食事に戻る母さん。どう見ても女子高生なんだよなあ……

18のときに俺を産んでるから……今24?!この外見で?!
ありえん!

思わず若本ヴォイスで言っちゃうくらいありえん!……まあいいや

早くしないとマジで遅れる!

「母さん!冗談抜きに早くしないと……って、いつの間に準備終わったのさ」

「え〜?しゅーちゃんが「ありえん!」とか言ってるくらいに?」

「そっかーだったら早く教えようね〜?」

「んーなにか考え事してるみたいだったから〜」

ハア……もういいや、とりあえず急いで出発するか……

あっ！

というまに入学式とホームルーム（でいいのか？）が終わったけど・

このまま何事も無く日常が過ぎていけばいいなあ。っていうか3年のいつだっけ？

ジュエルシードが海鳴にばら撒かれるのって・・・むう、記憶に無いわけなんだが。

思いだせん・・・原作開始は何月なんだ？とりあえずはいつ頃に編入すればいいのか？

結局翠屋にも行けてないんだよなあ。まあのんびりと時期を待つとしましうかねえ・・・

ま、3年になってから適当な時期に編入すれば問題はないっしょー！

そういう風に考えていた時期がありました。

またか！と思うこともあるでしょう。ええ、そう。そうですよ。

気が付いたらPT事件が始まっていましたよ。なんで気付いたかって？

ユーノの念話が届いたからに決まってるじゃないですか。

え？なんで敬語なんだって？原作に乗っかる時期をスルーしちゃったのに

気付いて、必死こいて編入手続きをやってるからですよ！

今は編入試験の待ちj「橘 朱兎君だね？」っと準備できたかな？

「はい」

「では今から編入試験を行います」

「はい、お願いします」

「そんなに緊張しなくてもかまわないですよ。ほら、リラックスして」

「は、はい！」

まあ結論から言えば編入は簡単に出来たわけだ。試験も当然楽勝な感じで。

さて、どのクラスに編入になるのか。まあお約束が起きないように祈るくらいしか

俺には出来ないわけなんだけどね。さてさて、登校は明日からな訳だけでも

一体どうなることやら……

「うん！さすがしゅーちゃん。かつこいい〜！」

「そうですね、確かに朱兎に似合っていますね」

「あー……まあ、ありがとう」

「照れてるしゅーちゃん、かわいいー！」

「うむうむ！わらわも今のヌシは可愛いと思うのじゃよ」

「はいはい……」

びっくりです。何故にこういうことになってるんでしょうか？

いつの間にこの二人は母さんと仲良くなって、あまつさえ一緒に住む方向で

話が進んでいたのか。じっくり1時間くらい問い詰めたいところなんだけども

「ほれほれ、はよう行かぬと遅れるのではないかえ？」

「そうです。遅刻はいけませんよ」

「ソーデスネー」

「はい！しゅーちゃん。おべんとだよ」

「ありがと母さん。それじゃ、行ってくるよ」

「いってらっしゃい」

とりあえず……最初は職員室に行けばいいんだろうなあ。

下調べは3年前に終わってるから良いとして。さて、今日からは本格的に

原作に介入していくか！って……待て待て！俺ってばデバイス作ってねーんじゃない？！

まあ無くても魔法は使えるけどもさ！どうせなら俺が作る以上は超チートデバイスを作りたいうな！ぶっちゃけ普通のデバイスだと俺の魔力に耐えられるとは思えないしそれにしても、つくづく思うけど俺ってチートだよなー

「じゃあ、橘君。先生が声をかけたら入ってきてね？」

「わかりました」

おおう……。気が付いたら教室の前とか！いつの間に教師と合流してたんだ？！

まあ手間が省けていいんだけども！

「じゃあ入ってちょうだい」

「はい」

「彼が今日編入してきた橘君です。橘君自己紹介をよろしくね？」

「はい。〇〇小学校から編入してきました『橘 朱兎』です。よろしく願います」

「えーっと、橘君の席は……。バニングスさんの隣でいいわね。それじゃあ、あそこの席に座ってね」

「はい」

はい、アリサの隣ですね。ほんとうにありがとうございました。
っていうか、コレなんてエロゲ？ テンプレにもほどがあるだろ！

「はじめまして」

「アンタ・・・」

「どうかしましたか？」

「なんでもないわ」

「橘君は編入試験で満点を出すほど頭が良いから、みんなも頑張っ
てね？」

フイフイ。その情報はいわなくてもいいんじゃないかなあ？

ほらー、横の金髪さんとか超睨んでますからー！

っと、なのはちゃんと目が合ったぞ・・・と。軽く笑顔を返して
おくかな

おーー良い笑顔だこと。こりゃ休み時間になったら俺のトコに来る
こと

間違いなしだわなあ・・・つーことは？ 必然的に超睨んでくれて
る金髪さんも

来るってことだよなあ・・・？全く、いいのやら悪いのやら・・・
・
そんな事を考えてるうちに、休み時間っつーか昼休みなわけで・・・

「しゅうくんだよね?!」

「久しぶりだね、なのちゃん」

「やっぱりしゅうくんなのー!」

わーお、幻視なんだろうけどもさ。犬耳と尻尾が見えるよ・・・
そんな嬉しいのか?

「毎日公園に行ってたのに全然会えなくて寂しかったの!」

「ごめんね? ちょっといろいろあって行けなかったんだ」

「ううん! こうして会えたk「ちょっとなのは!」にゃあ?!」

「人の会話に割り込むのは関心しないよ?」

「いいのよ!なのは、あたしたちにも紹介しなさいよ」

「うん! えっとね。しゅうくんは、なのはのお父さんが入院してた
ときに

一緒に居て、慰めてくれたの!」

「わたしたちに会うまえの事なんだね」

「そうなの！しゅうくんはとっても優しいの！それにしゅうくんに会った次の日「はいストップ」ふえええ！？」

「まあ一応さっき自己紹介はすんだと思うけど。もう一回言っておくよ」

僕は『橘 朱兎』よろしく」

「なのははなのはなの！」

「いや、それはわかってるから」

「あたしたちの紹介をしなさいよ！」

「あ、そっか。えっとね、アリサちゃんとすずかちゃんなの」

「あたしがアリサ。『アリサ・バニングス』よ」

「私は『月村 すずか』です。よろしく願いしますね？」

「ああ、こちらこそよろしく」

「ねえねえしゅうくん」

「ん？どうしたの？」

「一緒にお弁当たべよ？」

「いいよ。どこで食べるの？」

「あたしたちはいつも屋上でたべてるわよ」

「じゃあみんなと一緒に屋上まで行こう？」

すずかの言葉に従うように4人で屋上に行くことになった。

うん、周りからの視線が痛い。ぶっちゃけ視線で人が殺せるなら今頃俺は惨殺死体になってるんじゃないか？

まあ結局は屋上でのんびりと弁当を食べたわけだけでも

なーんか雰囲気がおかしな感じ！アリスから不穏な気配ががが！
まあ今は飯を食うことだけを考えよう！そうしよう！すずかもこっちを見てるけどな！

6話 平凡・・・・・・・・いい響きだ！（後書き）

作者「やっと本日4回目の更新なわけだけでも！」

朱兎「まあなんだ。頑張ればできるんじゃない？」

作者「おうよ！俺頑張った！」

朱兎「いつもそれくらい頑張ればいいんじゃないの？」

作者「それが出来たら苦労はしていないっ！」

朱兎「それって自慢することじゃないわな」

作者「H A H A H A！」

朱兎「いや、何変な笑い方してんだよ」

作者「ててててーてーれーてってー」

朱兎「は？なんでいきなりFFのファンファーレ？」

作者「ん。お前さんのフラグ成立の音」

朱兎「ハア？！」

作者「この時点でまだ確定じゃないけども
なのは・すずか・アリサのフラグが1本立ちました！」

朱兎「ちよつとまって！」

作者「だが答えは聞いていない！」

朱兎「はいセンセイ！」

作者「ハイソコ！」

朱兎「フラグも何もまだなんもしてないよなあ？」

作者「甘い！当然のようにアリサは昔のことを
覚えてるに決まってるじゃマイカ！」

朱兎「・・・・・・・・マジ？」

作者「たうぜん！んでもってすずかも・・・・・・・・」

朱兎「いや、すずかにはマジで会った事すらないからな？！」

作者「姉の忍からイロイロ聞いているに決まってるじゃないかーw」

朱兎「なんだそのイイ笑顔は！」

作者「ケッ、リア充氏ね！」

朱兎「ちょ！おま！」

作者「では次回『記憶というものはなかなか・・・・・・・・』をお楽しみに！」

朱兎「をい！待てっ！」

作者「ではでは！」

7話 記憶というものはなかなか・・・いいから消してください！（前書き）

はい！1日に5話目のUPです！

いやー筆が進むってこういうことをいうんですかね？

キャラが動く動くw

でも書き分けが上手くできてないかもしれない・・・

文才の無さに、全俺が泣いた！

誰か文才を分けてください！（切実

7話 記憶というものはなかなか・・・いいから消してください！

「あの・・・」

「ん？ なにかな月村さん？」

「あ、私のことはすずかでいいですよ」

「了解、僕のこと朱兎でいいよ」

「はい、じゃあ朱兎君ですね」

「うん、改めてよろしくすずか」

そう言って挨拶していると、いい加減じれたのか強烈な突っ込みが！

「ちょっと！」

「やれやれ、食事のときはもう少し静に出来ないのかね？」

「そ、そうね・・・じゃないわよ！」

「全く、騒がしいものだな」

「アンタ、あのときいたやつね！」

「さて、どのときかな？」

「とぼけるな！あたしとすずかのお姉さんが攫われた時よ！」

「あ、私もそれを聞こうと思ったんです」

「ふむ……とりあえず周りに迷惑だから、少し声を抑えたまえ」

「グッ、わかったわよ。これでいいんでしょ！」

「変わってないようにしか聞こえんのだがな……」

「まあまあ、アリサちゃんも朱兎君も落ち着いて……」

「あたしは落ち着いてるわよすずか！」

「ねえねえしゅうくん。攫われた時って、なにかあったの？」

「ふう……あの時か。僕も「あの時は俺って言ってたでしょうが」やれやれ……」

それから少しの間アリサと忍嬢が誘拐されていた時の話をしていた。まあ正直に俺も一緒に拉致られて、俺がキレて誘拐犯を半殺しにした程度のことだったけどな。

「あの時のあんたの攻撃が全く見えなかったのよ！」

「それは目の錯覚ではないかね？」

「私のお姉ちゃんも見えなかったって言っていましたよ？」

「ふむ……忍嬢もか」

「アンタ……覚えてたのね」

「覚えていなかったら、この話をここでしているのがおかしいと思うのだが？」

「……いいわ。続きを話さないよ」

「続きといわれてもな。あの時は怒りが頂点に達してキレていただけだ」

「キレてたって。それであんなことが出来るわけないでしょうが！」

「やれやれ……何をいえば納得するのかね？」

「その喋り方もムカツクのよ！」

「朱兎君、私もその喋り方はどうかとおもう……」

「しゅうくん、ちょっと怖いの」

「はぁ……ちょっと硬い喋り方になっちゃってたかな
怖がらせちゃってたらごめんね？なのちゃん」

「大丈夫なの！しゅうくんはしゅうくんなの！」

やれやれ・・・ちよつとアーチャーの喋り方を真似しただけじゃないか。
一体なにが怖いってんだか・・・俺としてはカッコイイと思ってただけども・・・

「それで？他に聞きたいことは？」

「別にないわ」

「私もないですね。あ、放課後に私の家にきてくれますか？」

「ん？なにかあるのかな？」

「お姉ちゃんも朱兎君に会いたがってたから」

「なるほど。了解した」

「じゃあじゃあ！明日はなのはのおうちにきてもらうの！」

「はいはい。どの道士郎さんにも挨拶に行かないといけなかったからね」

「ふえ？お父さんのこと知ってるの？」

「もちろん知ってるよ」

「しゅうくんは何でもしってるの」

「まあ、なのちゃんの事くらいならね」

「ふええ?!」

「アンタ……なのはのなんなのよ」

「そうだなあ……幼馴染兼親友ってところかな？」

「それだけにはみえないけど!」

「まあまあ、アリサちゃんも朱兎君も落ち着いて落ち着いて?」

「ぼそぼそ……（しゅくんなら恋人って言ってくれてもいいの……）」

「ん?なのちゃんにか言った?」

「にゃあ!な、なんでもないの!」

「そう?ならいいけど」

「すずか、コイツって鈍感なのね」

「うーん、私の口からはなんとも言えないんだけど……」

「?」

「にゃはは／＼／／」

全く意味がわからん@@;

まあとりあえず、疑われるのは回避できたかな？
さて、もうそろそろ昼休みも終わる頃だろう。
教室に戻るかな……

「さて、そろそろ教室に戻ろうか」

「そうね。そろそろ時間ね」

「にゃ！しゅうくんもアリサちゃんも待ってなの！」

「なのはちゃん、置いていたりしないから大丈夫だよ？」

「すずかは優しいんだな」

「えっ？そ、そんなことないよ……／＼／＼／」

なんだ？目を逸らされたんだけど……なにかおかしいことでも言ったか？

まあとりあえずは、どうやって原作に介入するか……だな。

流石にすぐにバレるのもあんまり嬉しくないからなあ……
まず肉体年齢を変化させて、『ゴールドクロス黄金聖衣』を着てたら気付かれねえ
だろ。

たぶん……だけだな。うん。よし、その方向で考えておこう！

んでもって学校が終わってから、すずかの家に来たわけだけでも・
・
なんでアリサとなのはが居るんだ？二人とも一旦家に帰ったのか着替えてるし。
俺なんて帰る暇も無かったから制服のままなのによ！

「ひさしぶりね、朱兎君」

「・・・そうですね。お久しぶりです忍嬢」

「あら。私のことは忍でいいわよ？」

「後ろに居る恋人がおっかないのでお断りしておきますよ」

「あら、あなただったら大丈夫なんじゃない？」

「その質問には黙秘させていただきます」

・
・
・

「クスクス」 「ははは」

「なかなかノリがいいじゃない」

「忍さんには叶いませんよ」

「それで、お前は一体何者なんだ」

「あら恭也。そんなに急に聞くのは失礼ってものじゃないの？」

「いえいえ、別にかまいませんよ。それに、何者と聞かれても俺としては『橘 朱兎』個人である。としか答えられませんし」

「んーそういえば君が開発したプラズマメモリーだっけ？今うちの製品に

結構使わせてもらってるみたいだけど」

「ええ、月村とバニングスの両社からオフアーをいただいていたのでシステムを改善した物の設計図^{レシレ}を送っておきましたから」

「アレを更に改善するなんて・・・結局どれくらいになったの？あの時は3ペタって言ってたよね？」

「アレですか。そうですね・・・最終的には安全面を考えると5ペタが限界でしたね」

「・・・それでも十分すぎるほどすごいわよ？」

「今の科学技術でも、いずれはたどり着けたと思いますけどね」

「それでも最低10年はかかったと思うわ。ううんもっとかかったかも」

「ははは、そう言ってもらえると研究者冥利に尽きるというものですね」

まあそういつて歓談してたわけなんだけどね。ピーンと来たわけだ。

あのニュータイプだっけ？ガンダムのパイロットが敵を察知したみたいなの

キュピーン！とかって感じかな。ってことは・・・だ。

アレじゃね？フェイトとなのはの初邂逅ってやつじゃね？

たしか・・・うん。キケンは無かったな。ならいいや。話も面白いし！

「ところで橘君」

「なんですか？高町さん」

「忍から聞いたんだが、ずいぶん強いそうだな」

「そうですね、幼い妹に我慢をさせてまで自分の世界に浸ってた自己中よりは強いと思いますよ？」

「っ貴様！」

実は、このなのはの兄は大っ嫌いなんだよねー俺

「恭也！朱兎君もあんまり挑発しないで……ね？」

「すみません、大人気なかったですね。僕も少し頭に血が上ってたみたいです」

「……少々手合わせを願おうか！」

「恭也！」

「残念ですけど、今日はお断りしますよ。ああ、そういえば明日は士郎さんに

挨拶をしてお宅へ伺うことになってますから」

「だったらその時にだな！」

「恭也落ち着いて！まったくもう。朱兎君ももう少し穏便にできないかなあ」

「まああの時になのはちゃんを慰めていた者としましては、思うところがある」

「イロイロあるってことですよ」

「っ！お前が！」

「おや？御礼を言われこそすれ、睨まれる筋合いは無いはずですけどね？」

「やれやれ……頭に血が上りやすいというかなんというか……」

シスコンならシスコンらしくしっかり妹の面倒を見ていればいいものを・・・

うん、やっぱりムカツクわ。っと、魔力の気配が2個消えたって事は・・・

フェイトとアルフが転移したってことだろうな。さて、そろそろ俺もすずかとアリサに声をかけてから帰るとするかな。

「では、今日はこの辺でおいとまさせていただきますよ」

「あ、ごめんなさいね？すずか達とも話をしたかったでしょ？」

「いえ、今日の目的は忍さんと話をするのでしたから」

「ありがと。じゃ、また来てちょうだいね！」

「はい、また寄らせていただきますね」

さて、すずか達のところに移動して・・・と

お！丁度なのはと・・・淫獣が帰って来たところだな。

「や、おかえりなのちゃん」

「にゃ！しゅうちゃん、ただいまなの！」

「どこに行ってたのよ、なのは！」

「アリサはもう少し声のボリュームを下げような？」

「うっさいわねえ」

「あ、朱兎君はお姉ちゃんとのお話は終わったんですか？」

「うん、終わったよ。あーそれから、敬語はやめような？　すずか」

「あ、でも……」

「同級生だろ？　それに……」

「それに？」

「こうして家に呼んでもらえたってことは、友達ってことじゃないのか？」

「あ……／＼／＼／」

「アンタ……」

「ん？　なにか言ったか？　アリサ」

「別に！」

「????　まあいいけど。で、俺は友達じゃダメかな？」

「ううん！　そんなことないよ！」

「よかった。それじゃあこれからは友達ってことで普通に話してくれよな？」

「うん！よろしくね朱兎君！」

「ちょっと！あたしはどうなるのよ！」

「は？どうなるって・・・どうしたいんだよ？」

「こっちが聞いてんのよ！」

「はぁ・・・アリサも友達でいいのか？」

「・・・いいわ、別にどうこうするつもりはないけど！」

「まあ、それでいいさ」

「これでみんな友達なの！明日も一緒におべんと食べるの！」

「りょーかい。さて、それじゃ俺は帰るよ」

「え？朱兎君、もう帰っちゃうの？」

「残念ながら早めに帰らないと母さんが心配なんでね」

「・・・母親が心配してるの？」

「残念。母親に心配されるんじゃないで、母親が心配なんだよ」

「はぁ？」

「ま、いずれわかるさ。じゃーな」

「うん！しゅうちゃんまた明日なの！」

「うん、なのちゃん。すずかもまた明日ね。あとアリサも」

「あたしはついでか！」

「また明日ね。朱兎君」

「ははは。また明日な、アリサ」

「さっさと帰りなさいよ！・・・・・・バカ／＼／＼／」

やれやれ。さっさと帰って明日のプランを立てますかねえ・・・・・・
ぜってーボコボコにしてやる！

7話 記憶というものはなかなか……いいから消してください！（後書き）

作者「調子に乗って一気に7話目まで書いてしまった！」

朱兎「やれやれ……もうちょっとその情熱を他のことにも使えよ」

作者「ごめん無理！」

朱兎「お前……ほんっとヴァカだな」

作者「なんだとー！」

朱兎「お、『魔法少女リリカルなのは』転生した主人公は最強の設定を使う」

の作者のk y o様からとちおとめ（イチゴ）のジャムが届いてるぞ」

作者「ヲイ！無視すんなよ！」

朱兎「トーストに塗って喰ってみるか……」

作者「ひょい。パクッ」

朱兎「あ！てめー！」

作者「なにコレ！マジ旨い！」

朱兎「お、マジか？どれどれ……うめえ！」

作者「これは是非とも御礼をせねば！」

朱兎「そうだな！つて、いまなんもねーじゃねーか」

作者「む……困ったな。どうしよう？」

朱兎「自分でなにか作ればいいんじゃないのか？」

作者「……………それもそうだな」

朱兎「でも、お前って料理できんのか？」

作者「フツ。何を隠そう俺は料理も趣味なのさ！」

朱兎「そーなのかー」

作者「そうなのだよ！」

朱兎「で？何を送るんだ？」

作者「超力作な肉がとろとろに蕩けるくらいのビーフシチューとか
どうだろう？」

朱兎「へー。また頑張ったなあ」

作者「こいつあうめえぜえ？」

朱兎「どれどれ……………うめえ！」

作者「だろ？得意料理の一つだからな！」

朱兎「んじゃついでに俺の盾でも一緒に送るか？」

作者「ん？盾？」

朱兎「そろ、万難排す戦女神の盾！」
アイギス

作者「ちょ！いきなりなんつーもんを出すんだよ！」

朱兎「コレはマジでちょっとやそつとじゃ壊れないからな！
創世神の攻撃だって防げるぜ！」

作者「またチートな装備を・・・まあいいや。ではでは
次回『認めたくないものだな』をお楽しみに！」

朱兎「これマジうめー！」

作者「ちょ！全部喰うなよ?!」

8話 認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものを（前書き）

さてさて8話です。

今回は戦闘描写があるんですが・・・

自分はそういうのを書いたことがないので

もの凄く読みづらいか、表現がおかしいと思います。

生暖かい目でみまもってもらえると嬉しい・・・のかな？

8話 認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものを

さて、今日は学校が終わったのならのは家に行って恭也をフルボッコにするんだったな。

どんな攻撃がいいか・・・格闘技にするか剣技にするか・・・まあとりあえず候補を出してみようじゃないか。

1つ目・御庭番式小太刀二刀流

これは言わずとも知れた『るろうに剣心』の登場人物四乃森蒼紫しのもりあおしの使う流派で、同じく小太刀二刀流を使う恭也にはかなり有効だと思われる。

プライドもへし折れるから一石二鳥だしな！回天剣舞・六連とかだったら

『神速』を使われる以外なら対応できるだろう。

2つ目・飛天御剣流

これも同じく『るろうに剣心』で出てきた、主人公の人斬り抜刀斎こと

ひむらけんしん緋村剣心の使う流派だな。「剣の速さ」「身のこなしの速さ」

「相手の動きの先を読む速さ」にかけては右に出るものはそうそう無いと思われる。

こっちだったら『神速』を使われても対応することが可能かもしれない・・・

3つ目・雲体風身十仙術＋α

これは龍狼伝で主に仙人が使う業だな。たしか習得には死の危険性が多々ある

はすだけど、俺はチート能力で最初から副作用無しで使えるから無問題……と。

五体を意思のままに操る術で腕力や視力などの身体能力が桁外れに上昇するから、

同時に他の格闘術と混ぜたら瞬殺できるかも知れないな。

4つ目・格ゲーの技

手から炎とか余裕だから草薙流古武術とかもありではある。

見た目が派手だから、パフォーマンスにはもってこいだしな。

元々俺がゲーマーだから技もきっちり覚えてるし！こっちの世界にはKOFシリーズが無いことももの凄く不満なんだけどな！

5つ目・黄金聖闘士の技

ゴールドセイント

流石に殺しちゃうまずいから積尸気冥界波とかは使えないけどさ。

それでも素手で年下の人間にフルボッコにされたらプライドがへし折れる

どこの話じゃないわな？士郎さんも驚くだろうけど。

恭也マジ涙目とかありえるw 神速使おうがどうしようが

『ライトニングプラズマ』で光速拳の絨毯爆撃をやっちゃえば
近寄ることすらできないだろうしな！リストリクションでもいいしw

さて、ドレにしよう・・・これはいつそのことアレか？全部か？俺直々にSEKKYOUをかましてやれって天啓か？流石に士郎さんもいるだろうし

なのはやすずかとアリサも見学くらいはするだろうから・・・瞬殺はつまんないから、じわじわといたぶって・・・だ。最初に挑発も忘れちゃ

いけないよな！コレもかなりムカツクのにしてないとダメだよなあ？限界まで挑発して徹底的にフルボッコにしてやったら、少しは考え方も

変わるかもしれんし。まあその前に周りが引くかもしれないけどなあ。

だが！俺は自重しん「朱兎、さっきから雰囲気が悪いですよ？」ナンダッテ？

「ん？なにかあったか？」

「いえ、なぜか雰囲気っていうか、朱兎の周りの空気っていうかが妙に黒いっていうか。暗い？っていうか」

「H A H A H A！気のせいだよ気のせい！」

「むう・・・わらわも先ほどの黒いと思ったんじゃないの」

「二人とも気にしすぎだって！ただ、明日翠屋に言っても「シュークリーム！」はい？」

「わらわにもしゅーくりーむと言うのを買ってたもれ！」

「おかあさんもー！」

「お前らはガキにたかってんじゃねー！母さんもお金は渡してるでしょうが！」

「でもでも、しゅーちゃんったらおかあさんがお店に入ろうとしたら

いっつも止めるじゃない？」

「あのさあ……母さんが入ろうとする店は大体がいかかわしい店だろうが！」

「だいいち、客引きに誘われたからってほいほい付いていこうとするのも

おかしいと思おうよ！？そもそも、子持ちで、子供と一緒に買い物に来てるのに

大人のおもちゃの店とか、風俗店とかにスカウトとかされるのもおかしいから！」

「えー？でも、難しいことは無いし、テレビに出られるってー」

「ああ出られるね！アダルトビデオにさ！」

「うー、アイリスちゃん。しゅーちゃんが怒るのー」

「えっと……それは私もいかなものかと思うんですけど……」

「照子さーん」

「ほれほれ。二人ともそう苛めるでないわえ」

「照姉はなんでそう、母さんに甘いかなあ」

「わらわが甘いのではないわ、汝が厳しすぎるのじゃよ」

「そんなこと無いって……」

「それで、結局何故に翠屋へ行くことになったのじゃ？」

「ああ、エリクサーを飲ませてからの士郎さんの状態も知りたいし、なのはに誘われたからね。後は恭也をフルボッコにするためかな」

「お主……最後のが一番の目的じゃろう？」

「なにをおっさるやら〜♪」

「これは絶対に最後のが目的ですね……」

「一つだけ忠告しておくのじゃが……」

「ん？なに？」

「殺すなでないぞえ？」

「だーいじょーぶだって！士郎さんもいるし、なのはたちも見てるんだからさ！」

「しゅーちゃんしゅーちゃん！お母さんはアップルパイがいーな〜」

「はいはい。なるべく忘れないようにするからさ」

「母親は大事なんじゃなあ」

「たうぜん！」

「まあ母親を大事にすることは良いことですからね」

「ま、俺はそろそろ学校に行って来るよ」

「気をつけるのじゃぞ？」

「これはお弁当です」

「さーんきゅっ！んじゃ、行ってくるぜい！」

さてさて、今日の放課後が楽しみだぜい！

にしても、マジでどうするか・・・1番にするか4番にするか・・・

いっそのこと全部ってのもありだよなあ？ま、フルボッコなのは決定ってことで！

それにしても、小学生の一日ってマジであつという間なんだなあ
今から昼飯で、その後は軽く2時間授業があつてからもう終わりだ
ろ？

やっぱ、早いなあ・・・

「しゅうちゃん、今日の放課後はなのはのおうちに来るの！」

「そうだね、昨日からそう言ってたからね」

「もちろんあたしたちも行くわよ」

「うん、なのはちゃんのお家のケーキって凄く美味しいから楽しみだね♪」

「ふむ、すずかは甘いものが好きなんだね」

「えっ?! ど、どうしたの急に?!」

「いや、ほんとうに楽しそうに笑うからさ」

「そ、そんなことないよ・・・／／／／」

「アンタって誑しよね」

「は? 何いってんのさ急に?」

「無自覚っていうのが性質が悪いわね!」

「アリサ・・・とりあえず急に叫ぶのは周りに迷惑だなぁに、おまえ自身が痛い子だと思われるぞ?」

「うっさい! あんたのせいでしょうが!」

「アリサちゃん落ち着いて・・・」

「にやあくしゅちゃんもアリサちゃんもケンカしちゃダメなの!」

「俺はケンカする気は全くないんだけどなあ・・・」

今日も今日とて理不尽です……
さ、放課後になったわけだけでも！楽しみすぎるぜ！

「しゅうちゃん、こっちなの！」

「ほらほら、走らなくてもちゃんと付いていくからさ」

「っていうかあんた達も、あたしの車にのればいいじゃない」

「子供の頃から運動してなかったら、将来はデブ確定だな……」

「……あんた、覚悟は出来てるんでしょうね」

「覚悟もなにも事実を述べたまででだぜ？」

「アリサちゃんと私は歩いて帰るのが禁止されてるの、
今までに何度か誘拐されてるから」

「あーなるほどね……俺との出会いも誘拐だったもんな。
でも今日は俺と一緒にいるんだから大丈夫だって」

「うん、大丈夫だとはおもうんだけどね？一応きまりだから」

「大人の事情ってヤツなのよ。アンタにはわかんないんじゃない？」

「へーへー、そうですねー」

やっぱアレだな。誘拐癖が付いちゃってるんだな。
もう少し成長したら・・・無理だな。余計に可能性が増えそうだ。
何とかして誘拐フラグは叩き負ってやりたいんだけどなあ・・・

「気にしなくてもいいよ？もう慣れちゃったから」

「そうよ。アンタが気にしたってどうしようもないんだから！」

「まあ・・・そうだな」

現状ではどうすることも出来ないよな・・・

ま、未来はどうかかわからないけど、どうにかできるように
何かを作るってのも一つの手ではあるよな！

それにしても作るとしたら、スタンドアローンタイプの護衛用にするべきか

携帯型の護身用にするべきか。それとも自身の身体能力向上補佐用にして

逃げられるようにするべきか？いやいや、やっぱりここはユニズ「
とうちゃーく」はい？

「え？」

「なのはのおうちに到着したの！」

「あれ？いつの間に？」

「朱兎君がなにか考え事をしてる間にだよ？」

「急に黙ってブツブツ言い出したからあせったわよ！」

「あーすまん。俺ってば考え込んだら周りのことが見えなくなるんだわ」

「そうみたいだね。気をつけないと危ないよ？」

「心配してくれてありがと、すずか」

「ど、どういたしまして……／＼／＼／」

いいつつ微笑んだら目を逸らされた……orz
嫌われたか？流石にこれで嫌われてたらマジで凹むぞ俺。
まあいいや……さて、なのはに続いて翠屋に入るとしますかね

「ただいまうなの！」

「おかえり、なのは。久しぶりだね、橘君」

「ええ、久しぶりですね士郎さん」

「今日は恭也と手合わせをするって聞いたんだけど」

「そうですね。やっぱりちょっと個人的にイラついたもので」

「はは、あまり苛めないでやってくれよ？」

「まあ善処しますよ」

「みんなもいらっしゃい。ゆっくりして行ってね」

「俺は士郎さんと道場の方に用事があって行くからさ、お前らはケ
ーキでも

食べてろよな。あ、あとお土産に……」

「ああ、包んでおくよ。何が何個いるかな？」

「シュークリームを7個とアップルパイを4個、それから……
モンブランとガトーショコラを3個ずつお願いします」

「わかった。用意しておくよ」

「あ、お会計を先にお願ひできますか？」

「ははは、大丈夫だよ。お土産に持って帰るといい」

「ダメですよ。こういうのはキッチリしておかないと」

「わかった。すまないね（苦笑）」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！あんまりにも自然だったから
話に割り込めなかったけど、道場に行くってどうということよ！」

「ん？ああ、なのはの兄の恭也って人と少し手合わせをすることにな
っててね」

「あれ？お父さん。その子供と恭ちゃんが組み手をするの？」

「ああ、丁度いい機会だ。美由希も一緒に見学しておくといい」

「だったらあのちゃんにすずかとアリサも見てたらいよいよたぶん退屈だと思うけどさ」

「しゅうちゃん！お兄ちゃんとケンカするの？！」

「いやいや、ケンカじゃないんだよ？なのちゃん」

一方的にフルボッコなだけだよ？

「さて、道場の方に移動しようか」

「そうですね。ではお願いします」

「恭也はすでに準備をして待っているはずだからね」

「そうですか。ああ、そういえばアレから身体の具合とかどうですか？」

「全く問題はないよ。あの薬の効き目は本当に凄いね」

「まあ、普通では手に入りませんけどね。ラッキーくらいに思ってたらいいですよ」

「ははは、本当にありがとう」

「いえいえ」

さて、道場に着いたわけだが……なんでど真ん中で座ってるわけ？

そこは端の方にすわって待ってるとかするもんなんじゃないの？
やっぱこれはフルボッコ決定だな！

「恭也。わざわざ来てもらったんだから挨拶をしなさい」

「かまいませんよ。気にしてませんから」

「だが、礼儀としてだね」

「永久不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術 高町恭也だ」

「へー、名乗っちゃうんですか。わかりました。こちらも遠慮は要らないって

ことですね？それでは今回は無手の技で相手をしてあげます。

そうそう、士郎さん。こういう技も使いますがかまいませんね？」

そう言って手から炎を出す

「その技は……！」

「大丈夫ですよ。ちゃんと手加減しますから。たぶん」

「貴様……！」

「……二人とも開始線へ」

「行くぞ！」

「草薙流古武術 橘朱兎 推して参る」

さて、まずは能力^{スキル}…雲体風身及び答えを出す者発動
さてどう来るか……ま、様子見なんてしなくてもいいけど
相手の出方を見えますかね。

「で？こないんですか？」

「はあっ！」

奥義之歩法『神速』

奥義之式『虎乱』…二刀で放つ連撃技

「おっと！いきなり奥義ですか！ま、いいですけどね！」

九百拾式・鶴摘み…利き腕は相手の手足を掴められるよう手を開き
対の肩口に添え、

屈み込むように

対の腕は拳を握るという「さばき」の型。前に

両腕を構え、この時に相手の攻撃を受けると「

外式・虎伏せ」か

「外式・龍射り」のいずれかを決める、いわゆる「当て身投げ」属性の技

朱兎の場合、固定の技ではなくどの技にもつなげることが可能

そういいながら恭也の木刀を九百拾式・鶴摘みで受け捌く。当て身投げだから
そのまま他の技につなげても良かったけれども、こういう風に攻めて来るのか
興味があったからそのまま追撃をしないことにした。

「この程度ですか？」

「黙れ！っ食らえ！」

奥義之六『薙旋』.. 抜刀術からの四連続の斬り

「はっ！ 抜刀術を木刀の二刀流でやったって当たるもんかよ！」

四百式拾七式・轢鉄.. その場で上半身を捻っての炎のボディブロー

よし、まともに入った！こっからは遠慮はいらないよな！いくぜえ！

「互角に戦えてると思ってるだろ？はっ！そろそろ本気でいくぜ！」

「くっ！はあぁっ！」

ガガガッ！

ガシィッ！

ドカッ！

ドスッ！

ガンッ！

おし、今のでガードが弾けたな！

「てめえの顔も見飽きたぜ・・・食らえ！」

俺のお気に入りの格ゲーコンボ！

百拾五式・毒咬み

四百壺式・罪詠み

百拾四式・荒咬み

百貳拾八式・九傷

百貳拾七式・八錆

四百貳拾七式・轢鉄

七拾五式・改

雲体風身のおかげでドコでもキャンセル可能な超チートコンボだぜ！
これぞずっと俺のターン！w　そしてそしてーいくぜえ大技！！！！

裏百八式・大蛇薙！

「喰らいー！！！！やg「そこまで！！！！」　っち！」

流石にこれ以上はまずいと思ったのか士郎さんが止めに入った。まあこれ以上
やってたら死合いになっちまうわな。ま、ずっと俺のターンだったわけだけどさ。
それにしてもいいタイミングで士郎さんも止めてくれたな。あと数秒遅かったら
確実に大蛇薙が当たってたしさ。

「どうだ？ 上には上が居るってことがわかっただろ」

「まったく・・・もう少し手加減してくれてもよかったんじゃないかい？ 朱兎君」

「残念ながら居の中の蛙には、少し痛い目にあってもらおうとおもってたので」

「やれやれ・・・恭也にはいい薬かもしれないが。美由希、彼の戦いはどうだった？」

「えっと・・・」

「大丈夫ですよ。死なない程度には手加減しましたから」

「それって手加減って言わないんじゃないんじゃ・・・」

「ああ、あと起きたら伝えといてください」

「え？なんて？」

「『あんたじゃ燃えねえな』って」

「！」

「はっきり言って、俺はまだ全力の1割も出してませんから」

「確かに最初に『今回は無手の技で』って言っていたね」

「ええ、ぶっちゃけて言えば小太刀二刀流も普通に使えますし」

「それは……」

「無手で十分だと判断したから使いませんでしたけどね」

「……そうか。出来れば今度は私と手合わさ「お断りします」
何故だい？」

「際限がないからですよ。土郎さんの次は美由希さんでしょうし、
気が付いたらまた彼も挑んでくるでしょうし」

「まあ……それは否定できないね」（苦笑）

「ですからお断りします」

「わかった。ところで道場の端で呆然としている3人のフォローは
君に任せるからね？」

「は？って、あ！」

「私は恭也を運ぶから、では朱兎君今日はお疲れ様」

「あ、ちよっ！」

って、さっさと行っちゃもうし！この場は俺もさっさと

帰るにk「ちよっと！」わほーい 遅かったかー

この場の收拾とかどうやって着けりゃいいんだよ・・・全く
士郎さん・・・恨みますよ！とりあえず、3人からは質問攻めな
んだろうなあ

まあ、多少はスッキリしたし頑張って機嫌を取りますかねー！

8話 認めたくないものだな、若さゆえの過ちというものを（後書き）

作者「やっと戦闘描写終わったー！」

朱兎「……アレって戦闘描写っていうのか？」

作者「しょうがないじゃん！戦闘描写自体を書いたことが無いんだから！」

朱兎「あっそ」

作者「軽っ！」

朱兎「他にどんな反応しろっていうんだよ」

作者「いや、だってアレじゃん？難しいじゃん？」

朱兎「まあ、そうだろうな」

作者「そうなんだよ！」

朱兎「で、言い訳……と」

作者「それは言わないお約束というやつですよ！」

朱兎「はいはい、そーですねー」

作者「このフラグメーカーが……」

朱兎「はあ？ そんなの立てた覚えはないんだけど？」

作者「知らぬは己ばかりなりってなあ」

朱兎「てめえ・・・燃すぞ？」

作者「だが断る！」

朱兎「ん？ なんか凄い音が近づいてる気がするんだけど？」

作者「・・・あ、k y o様のところから・・・！」

朱兎「え？ 何逃げてるんだよ」

作者「天地乖離エヌマ・エリシュす開闢の星が・・・」

朱兎「な！ 間に合え！」

作者「おー！ アイギスで上に逸らすとか・・・考えたなあ」

朱兎「死ぬかと思ったわ！」

作者「まあ死ななかったんだからいいじゃん」

朱兎「そういう問題か！ 誰だ全く！」

作者「あー、京谷のところのフィオネかららしいぞ？」

朱兎「む・・・女の子なら・・・反撃はできんな」

作者「まあねー」

朱兎「京谷さんも大変そうだなあ……万能薬とエリクサーを送っておう」

作者「シャルルの料理とかも食べてるっぽいから、それはアリかもね」

朱兎「これでよし……と」

作者「さてその間に、ではでは次回『分の悪い……』をお楽しみに！」

朱兎「あっ！ずりいぞてめえ！」

作者「それでは」

9話 分の悪い賭けは嫌いじゃない！でも悪すぎるのは勘弁な（前書き）

とりあえず1話UPの作者です。

今日は後日確実に見直さないといけないかも・・・
あと2・3日更新できないかもです。

え？なぜ？ それはですね。作者は現在39℃の熱があつたりする
んですねえ

仕事も休めないので体力が限界に近いかも？なのですよ？
それでも自重しないのが作者クオリティ！ってことで第9話UPで
す！

0時を超えてしまったー！がっかりだ！（自分に）

9話 分の悪い賭けは嫌いじゃない！でも悪すぎるのは勘弁な

「それで、さっきのは何だったのよ！」

えーなんといえますかですね・・・

「しゅうくんの手から火がでてたの・・・」

うん、まあそういう技なんで・・・

「明らかに人間離れた動きだったよね？」

まあ・・・ソウデスネー

「「「いったい何がどうなってるの（いるの）（るのよ）！？」」」

いやー、まあどうなってるかって聞かれてもね？

俺としてはそういう技で、そういう武術だからとしか言えない訳ですよ。

それに、俺のことばかり聞いてるけども、どう考えても相手の最初の行動とか（奥義之歩法『神速』）もおかしいとは思わないんでしょうか。いえ、思わないっていうか・・・ね。

アレだよ？古流武術をずっと練習してきたからって言ったので納得して
くれるのかな？俺だって雲体風身がなかったら反応出来なかったと思うしさ。

「黙ってたってわかんないのよ！ちゃんと説明しなさいよね！」

「えー、何といいますかー、誠に遺憾なのですがー」

「難しい言葉を使って誤魔化そうとしてもだめだよ？」

「いやー、誤魔化そうとしてるわけじゃないんですけどね？」

「しゅうくんかつこよかったの！」

「あ、なのちゃん、怖くなかった？」

「うん！大丈夫なの！かつこよかったの！」

素直すぎる眼差しが痛いです……自分の兄をフルボッコにされたのに

相手を怖がらないとかさ。俺だから……とか自惚れたいけどもそれは流石に言い過ぎだよな。

「ちょっと話はまだ終わってないのよ！」

「ああはいはい……どうどうどう。落ちつけ落ちつけ」

「アンタが原因でしょうが！」

おおぅ……アリサの後ろに炎が見える……草薙流でもないのに……

これがアレか?! 『バーニング・アリサ』ってy

「変なこと考えてるんじゃないでしょうね」

「いいえ！ 考えてません！」

「だったらいいんだけど……ほら、さっさと白状しなさいよ」

「いや、そんなこと言われてもだな……」

「それとも、言えない事情でもあったりするのかな？」

「そういうわけでもないんだけどさ……」

とりあえず……子供の頃からずっと鍛錬を繰り返している。

手から出た炎は家系だから真似するのは無理。

人間離れた動きも鍛錬の賜物ってことでしぶしぶながら納得してもらった。

まあアリサは絶対に信じてないだろうけどな。

さーて、とりあえずでも納得してくれたんだったら帰ってもいいよな？

「さて、それじゃあ今日は帰るよ」

「ふええ！？しゅうくんもう帰っちゃうの？！」

「あんまり遅くなってもご迷惑だろうからね」

「そんなことはないよ？良かったら夕食を食べて帰るといい」

「……………いつの間に出てきたんだこの人は。」

人が説明で大わらわなときには助け舟すら出さなかったのにさ。話が終わったとたんに出てくるとかタイピングよすぎだろ！アレだな？高町士郎！貴様見ていたな！だが此処は断らせ

「しゅうくんも一緒にごはん食べるの」

「私たちまでいつもすいません」

「アンタはなにポケットとしてるのよ！さっさと行くわよ！」

「…………あるえ？いつの間に全員お世話になることになってるんだ？」

っていうか俺は流石に家に帰らないとm「ああ、君の家には連絡をしておいたからね」

ハア？なにやってんのさ？！でもそれだったらアイリスか照姉がなんとか話を

つけてくれてるだろ？だい

「ご迷惑をおかけしますが、よろしく願いします。と言われたよ？」

をいをい・・・その喋り方ならアイリスだな・・・アイツは帰ったらシメてやる！

それにしても思考にタイミングよく答えを返すなんて読心術でも使えんのか？

「残念ながら読心術はつかえないね」

「・・・だったら何故にそんなナイスタイミングで答えを返せるんですか」

「いやいや、いまのは君の表情に全部出ていたからね」

「表情は上手く隠せてたとおもうんですが・・・？」

「そこは経験と勘かな」

っ怖！なにこの人！勘で考えが読まれるとかやば過ぎる！

まあそもそも、普通の相手だったら俺に気付かれずに声をかけるとか出来るわけがないんだけどな！

Side 士郎

それにしても本当に驚かされる。

恭也との組み手の時にも思ったんだが、あれは普通の武術じゃない。言うならば……そう御神真刀流のような対人戦を基本にしたものではなく

人間以外の怪異を相手にするように想定された武術だった。

それに『草薙流古武術』と言っていたが、草薙ということは3種の神器の

一つの『草薙の剣』のことではないだろうか？だとすれば仮想敵は『八岐大蛇』

になるはずだ……一体彼は何者なんだろう……

しかし今考えてどうできる問題ではないか……

幸い彼もなのはを嫌ってはいないようだし交流を深めていけばいいだろう。

そしてまた恭也・美由希や私とも組み手をしてもらえるように話してみるのも

いいかも知れない。彼との組み手はとても勉強になるだろうから。さて、そのためにも少し手を回させてもらおうかな？

カチャツ プルルルル……プルルルル……

「はい」

「あ、もしもし。橘朱兎君のお宅ですか？」

「……ええ、そうですが」

「私は高町なのはの父親の高町士郎と申します。いつも娘がお世話になってます」

「あ、いえ、こちらこそお世話になってます。

それで、朱兎がなにかしたんですか？」

「いえ、少し遅くなったので夕食と一緒に食べてもらおうと思いついて。

その旨お伝えしようと、ご連絡を差し上げた次第です」

「そうですか……しかし、ご迷惑ではありませんか？」

「いえいえ！娘も喜ぶでしょうし、迷惑なんて少しもありませんよ」

「では、ご迷惑をおかけしますがよろしく願います」

「こちらこそ急にこんな電話をおかけして申し訳ありません」

「いえ、それでは失礼いたします」

「はい、失礼します」

よし、これで彼の家族の了承は得た。あとは彼にもこの話をするだけだね。

「さて、それじゃあ今日は帰るよ」

「ふええ！？しゅうちゃんもう帰っちゃうの？！」

「あんまり遅くなってもご迷惑だろうからね」

おっと、丁度話が終わったようだ。

「そんなことはないよ？良かったら夕食を食べて帰るといい」

おや、少し驚いているようだね。私もまだまだ現役でいけるということかな。

上手く話を持って行って、また組み手をしてもらえるように頼まないとね。

Side 士郎 Side Out

結果的に言うと、なのはの家での食事はとても美味しかった。

さすが桃子さんと言いか言いようが無いね！それにしても相変わらずなのはの肩には淫獣がいたんだが・・・この前のフェイトとの初邂逅は

スルーしたけど、今度はたしか街中で巨大な樹が暴れたはず。上手く誘導してさっさと封印させるか、発動前に俺が手を出して

原作の流れを変えるか・・・まあこの場合は変えたほうがいいとは思うんだよな

まあ、どちらにしても介入することに違いは無い訳だから・・・ばれない様に上手くやらないといけないぞ・・・と。

にしても・・・だ・・・士郎さんは絶対にまた組み手をさせたがってるよな？

今回は俺もイラついてたからフルボッコにしたけども、普通のとときにあそこまで一方的には・・・するかもしれないな。

それに美由希さん相手にあそこまでやるわけにも行かないだろうし。やるとしたら・・・また恭也を相手にするときくらいだろ。

士郎さんのときは飛天御剣流を使ってみてもいいし。

あ、そういえば美由希さんも刀だったか？だったら飛天御剣流がいいだろうな。

もし次に恭也とやることがあれば御庭番式小太刀二刀流を使ってみよう。

雲体風身の反応速度で回天剣舞・六連とかやってみるのもアリだしな。

さて土産も持ったし、さっさと家にかえりますかねー！

・・・アイリスはぜってーシメる！

9話 分の悪い賭けは嫌いじゃない！でも悪すぎるのは勘弁な（後書き）

作者・朱兎 「あとかきのコーナー！」

作者 「まずは感謝を！春と僕様から初の感想をいただきました！」

朱兎 「おーって、え？今まで感想なかったのか？」

作者 「はい！1個も感想はありませんでした！」

朱兎 「そーなのかー」

作者 「しかもお褒めの言葉を頂くとか、かなりやる気が出てきます
！」

朱兎 「それは嬉しいな！」

作者・朱兎 「本当にありがとうございます！」

作者 「さてさて朱兎君」

朱兎 「ん？なんだよ」

作者 「この作品なんだけどもさ」

朱兎 「・・・ああ」

作者 「なんと累計がPV120,000にユニーク12,000を
突破したのだよ！」

朱兎「はぁ?! マジでか!」

作者「まじまじ!こんなに沢山見てもらえて、ぽかぁ本当に嬉しいよ」

朱兎「お気に入り登録も180件を超えたんだろ?」

作者「そのたうり!これはアレだね!頑張らないといけないよね!」

朱兎「まぁ・・・そうかもしれんが。とりあえず寝とけ」

作者「だが断る!」

朱兎「お前マジで39℃の熱があんだろうが!」

作者「薬飲んでるから大丈夫!」

朱兎「そーですか・・・まぁお前がいいならいいんだけどな」

作者「まだ逝ける!」

朱兎「いや!逝くなよ!」

作者「H A H A H A!」

朱兎「はぁ・・・もういいさ、で?次回はどうするんだ?」

作者「どうするとは?」

朱兎「いや、どんな話になるのかな・・・と」

作者「さあ？」

朱兎「考えてねえのかよ！」

作者「ないよ？今までのものノリと勢いで書いてきただけだし？」

朱兎「あー・・・もういいや・・・とりあえず俺のデバイスを
さっさと作ってくれ」

作者「自分で作れば？」

朱兎「・・・そうする」

作者「それでは次回『デバイスってさ・・・』をご期待ください
！」

朱兎「ほんとに期待していいもんなのか・・・」

10話 デバイスって……質量保存の法則とかガン無視だよな？（前書き）

はい、ってことで作者です。時系列を把握していなかったせいで話の順番が入れ替わりました。

ってことで次のUPには時系列的にはフェイトとなのはの初邂逅である4話の前にあった話になります。

気にせずに読んでくれると嬉しいですよ？

10話 デバイスって・・・質量保存の法則とかガン無視だよな？

うゝむ・・・デバイスかあ・・・という風なものがいいか・

材質は？性能は？効果は？突き詰めていくと際限がないからなあ・

たしか素材は『王の財宝』ゲートオブバビロンの中にオリハルコン・日緋色金ヒビイロカネ・ミスリルとかのレアメタル・・・貴重の方のレアじゃなくて稀少の方のレアが

大量にあったよな？たしか日緋色金ヒビイロカネで作ったものは魔力融和性が結構高くて魔法のスムーズな発動に有利かもしれない・・・

それに永久不変で絶対にさびない性質をもつて言うくらいだから加工したら

かなりのものができるだろう。見た目は太陽のように赤く表面が揺らめいて

見えるから大剣なんか加工したらもの凄くかっこ良さそうだ。

オリハルコンはダイヤモンドより硬いのはいいけど、魔力無効化の能力が

あったはずだ。だとすると武器や防具にするにはいいかも知れないがデバイスとして魔法補助に使うのはどうか・・・ってことになる。

ただしコレは『聖衣』クロスの修復にも使えるため、強度だけは他の金属を確実に凌駕するだろう。まあ加工自体難しいだろうけども。

ミスリルはたしか魔法銀って書いたよな？常に魔力を帯びた金属で硬くて軽量という素敵な性質を持ってるはずだ。でも特殊効果があるっていうのは聞いたことがないな・・・でもそれ自体が魔力を持

ってるってことは、
魔法防御的には結構いい線いくかもしれないな……

さてどうしよう……。材質的にはどれをが使ってもいいが……。いいんだが……。待機時の形状と展開時の形状、それにインテリジェンスにするかストレージかも決めないといけない。もしインテリジェンスにするんだったらAIの性格や声まで決めないといけないのか……。うーむ……。めんどくさいなあ……
かといってストレージにするのも味気ないし……

「これ朱兎、いったいなにをうんうん唸っておるのかえ？」

「朱兎五月蠅いですよ？」

「あー……。そろそろデバイスを作ろうかと思ってな」

「?……。その、でばいすというのはなんなのじゃ？」

「あー、この世界の魔法を使うための触媒……。ってやつかな」

「それで、そのデバイスを作るのに悩んでるんですか？」

「そうなんだよ……。俺の力ってさ、普通の人間とは比べものにならないじゃん？だからって言うのもなんだけどさ、柔なもの

作っちゃうと壊しそうです。だから材質から迷ってるんだよね」

「武器につかうのならヒビイロカネ緋色金がよいぞえ？」

「うーん……」

本当にどうしようかなあ……いきなりユニゾンデバイスとかは……

やめとこう！いろんな意味で危険なキガスル！

っていうか、マジでどうすりゃいいんだ！だれか教えてくれー！

ってことで・・・だ、ちょっと相談してみようと思う。
相談相手？そんなの当然忍さんに決まってるじゃないか。

っていうか他に誰に相談しろってんだよ。なのはか？淫獣か？
どっちもありえないだろ・・・大体まだ俺が魔法が使えることすら
教えてないんだぜ？いきなりデバイス関連の相談とかするのは
おかしいだろ・・・それに、あの二人に相談したとしてもいい意
見が

出てくるようには思えないんだよな。とりあえずすずかの家に
いくとしようか。

「ってことですすずかの家の前にいるわけだが・・・」

「いきなり何をいいたすのよアンタは」

「何故に俺はアリサにつかまっているんでしょうか？」

「はあ？あたしが丁度すずかの家に来たときに
アンタが門の前にいたからでしょ！」

「えーと、俺は忍さんに用事があって来たんだけど・・・」

「それがどうしたのよ」

「いや、とりあえず手を離してもらえないかなー・・・と」

「いやよ」

「なんでさ!？」

「今からずかと買い物に行くからに決まってるでしょ」

「ちよっ!俺関係ないよね!？」

「何よ、かawaii乙女に荷物を持たせようっていうの？」

「その理論もおかしいですよね!？」

「いいから行くのよ!」

「ちよっと待てって、俺はY「アリサちゃんお待たせ」よう、すずか」

「あ、朱兎君」

「すずか!買い物にはコイツもつれていくわよ」

「だから俺は忍さんに用事があるんだってば」

「あれ?お姉ちゃんは恭也さんに会いに
なのはちゃんの家に行ってるけど・・・」

「なん・・・だと・・・!？」

「決まりね!さっさと買い物に行くわよ!早く車に乗りなさい!」

「車があるなら俺はいらねーよな！」

「レディの誘いを断るなんてことが許されるわけがないでしょ！」

あー・・・すずかに助けをもとめて・・・無理か・・・

目を逸らさなくてもいいじゃんかよ・・・しかし結局今日は無理かねえ

さっさとデバイスも作っちゃみたいんだけどなあ・・・

で！だ。なぜに女の買い物って言うものはあんなに長いんだ？

しかもあんな実用性のなさそうな「ちょっと朱兎」服が滅茶苦茶高いしさ！

それにあんな服だったら俺でも作れそうなんだけどなー

なんであんなに高いのかねえ・・・わからんなあ・・・「朱兎君？」

それにしてもやっと買い物も終わりか・・・結局俺は荷物もちだったなあ。特にファッション「朱兎ってば！」には興味もないしさ。アクセは

ちょっと興味があるけども、どっちかといえば買うより創るほうが好きだし、性に合ってる「なにか考え事なのかな」からな。

それにしてもデバイスどうしよう・・・

「ちょっと！」

「ねえ朱兎君？」

「ちょっと！アンタ聞いてんの！？」

「・・・・・・は？あ、何？」

「どうしたの朱兎君？なにか考え事？」

「あー・・・・・・なんつーかちょっとね」

「さっきから声をかけてるのに無視ってのはいい度胸じゃない！」

「え？さっきから？」

「えっとね？ちょっと前からだけど、何回か声をかけてたんだよ？」

「はい？えっと・・・・・・マジで？」

「うん」

「覚悟は出来てるんでしょね！」

「あー、それは正直にすまん」

「っな！」

「ちょっと考え事があったてな？その事で忍さんにも相談しようと思ってたんだわ。まあそのためにすずかの家に行ってたわけだしな」

「何を悩んでるのよ」

「あー、んー、なんていえば良いのかなあ」

「私たちにも少しは頼ってくれたら嬉しいな」

「あー、んじゃ聞くが。たとえば電子辞書みたいなものを持つとして、

辞書としての役割以外なしの純粹な道具としてのものと、

本来の機能以外に判断力と行動力を持たせる事で単独で

検索とか他の機能も追加してあるもの、

あとは、最初から電子辞書みたいな形のあるものじゃなくて、

ノエルさんみたいな感じの人に私生活のサポートを

してもらうか・・・なんだけどな？」

「選択肢は3つからなの？」

「っていうかノエルみたい人って何よ！」

「いや、うちって母親しかいないからさ、俺がいない間が心配でね」

「へー、父親は？」

「さあ？」

「は？何よその返事は」

「俺が生まれる前から居なかったっぽいからしらねえんだわ」

「あ・・・」

「なーに気にすんなって。元々俺が気にしてないんだからさ!」

あー……なんか嫌な空気になっちゃったなあ……参った……

とりあえず、なんとか雰囲気を変えないと!

「ま!それはイインダヨー!」

「そ、そう……」

「GREENダヨー!」

「はあ? 急になにを言い出すのよ」

「いやいやいや、さっきの質問の答えが欲しいわけだよ」

「さっきの質問っていうと、電子辞書っていうの?」

「そ!俺にとっては大問題でさー」

「そんなの簡単じゃない」

「そうかー?」

「家に置いておきたいわけじゃないんだったら、判断力と行動力があるほうが

いいんじゃないかなあ?」

「そうね、あたしもそう思うわ」

「ふむ・・・そうしてみようか」

「なに？そんなことで悩んだの？」

「いや、俺的には結構難問でさ」

「じゃあ難問が解けてよかったね」

「おう！さんきゅな！すずか、アリサ」

おっし！速攻帰ってデバイスを創ることにするぜ！

素材は・・・アレとアレにしよう！っていうか寧ろ複合で合金にすれば

無問題じゃん！いいぜー、面白くなってきたー！

徹底的にチートなデバイスを創ってやんよー！

結論……恐ろしいものを創ってしまった……

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！

『俺は創ったデバイスと一緒に魔法を練習していたんだが

気がついたら周りに全く物がなくなっていた！』

な……何を言っているのかわからねーと思うが、

俺も何がどうなったのかわからなかった……

頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとか、

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

自分が使う魔法を勝手に数百倍に増幅するなんて

一体どんなバケモノデバイスだよ……チートすぎるぜ……

だが……コレで勝つる！ガンガン介入していくぜ！

P.
S.
なぜかデバイスの声は若本ヴォイスでした・・・
O
r
Z

10話 デバイスって・・・質量保存の法則とかガン無視だよな？（後書き）

作者・朱兎「はーいあとがきのコーナーになりましたー」

作者「++幽鬼++様、感想まことにありがとうございます！」

朱兎「お！また感想もらえたのか！」

作者「そうなんだよー」

朱兎「少しずつでも増えていったら嬉しいよな」

作者「だよねー！超やる気でするよね！」

朱兎「空回りしなければいいけどな」

作者「・・・イインダヨー！」

朱兎「よくねえよ！」

作者「まあ冗談はおいといて」

朱兎「時系列間違いつて？」

作者「うん、ぶっちゃけいうとき。7話でフェイトとなのはの初邂逅って

いっちゃったんだけどさ」

朱兎「言ってたな」

作者「実は11話として書いてた話がさ、時系列的にはアレの前にあった

はずなんだよね……」

朱兎「あー……まあソコはどうしようもないんじゃないか？」

作者「指摘があったら7話の方を弄って時系列を戻すつもり」

朱兎「一応対策法は考えてるのな？」

作者「うん、実際あの二人に邂逅のことも軽く触れてるだけだからさ」

朱兎「ふむ……まだ修正可能な範囲内か」

作者「そういうこと」

朱兎「ならいいか。ところでさ」

作者「うん？」

朱兎「またPVとユニーク増えたんだって？」

作者「そうなんだよ！この前9話を上げたときには

PV120,000にユニーク12,000だったのがさ！

PV150,000にユニーク15,000を超えたのだよ

！」

朱兎「おー！すっげえな！」

作者「もうあれだね！見てくれている方たち到大感謝だね！」

朱兎「そうだな！そのためにもさっさと次の話を書けよな！」

作者「おうよ！ってことで次回『サッカー……』をお楽しみに
！」

朱兎「俺ももつと全開でいくぜえ！」

11話 サッカー・・・作家アツ・・・危険だ！（前書き）

ということで、実は10話の前に完成していた話だったりします。

予告で『デバイス・・・』とか書いていたのにサッカーってW
ってことで急遽10話を書き直していたので時間がかかっていま
した。

11話 サッカー……作家アツ……危険だ！

「そういうことだから、今度の日曜日にサッカーをやろう」

「はあ？」

朱兎です。今日も今日とて翠屋に來ています。ところでこの、いきなり

話を進めようとするダメ人間をどうにかしてもらえませんか？

僕はいま店にきたばかりなので話がさっぱり見えません。

とりあえず、いったい何を急にのたまうのか聞いてみることにしようか。

「いきなりなんなんですか？ 士朗さん」

「うん。実をいうとね、私はサッカーチームの監督をしているんだよ」

「はあ……それで？」

「次の日曜日に試合があるんだ」

「……………それが俺と何の関係が？」

「いやー丁度メンバーに欠員が出てしまっただけ？」

「……………つまり？」

「朱兎君、試合に出てみないかい？」

「それって拒否権はあるんですか？」

「そうだね・・・拒否したいかな？」

「そうですね、できればb「おーいなのは、朱兎君が明日の試合に出
てくれるそうだ」

拒否権ないですよね!？」

「しゅうくん試合でるの？」

「・・・士朗さん」

「なにかな？」

「こういうのは選択肢って言いませんよね？」

「いやいや、そういうことは気にしたら負けだよ」

「しゅうくん！なのはも応援にいくよ！」

「あー・・・まあ適当にやらせてもらいますよ」

「それじゃあ、日曜日の朝に河川敷にね」

「了解です・・・はあ、また厄介ごとが・・・」

「なに、子供の試合だから、朱兎君なら楽勝だよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それって挑戦ですか？」

「ははは、どうかな」

「いいでしょう！その挑戦受けて立つ！」

「よし。だったら明日の試合でハットトリックを決められたら
ケーキをホールであげるってのではどうかな？」

「はっ！ハットトリックどころか倍の6点入れて見せますよ！」

「よし、それじゃあ日曜日は楽しみにしているよ」

これは日曜までに必殺技を開発しないといけないな！
やっぱりあの技がいいかな・・・・・・・・それともあっちか・・・・・・・・？

「ちょっとアンタ、さっきから何一人でブツブツいつてるのよ」

「ん？ちょっと日曜日のことを・・・・・・・・な」

「私たちも応援にいくからね？」

「お？『私たち』ってことはなのちゃん以外に二人もくるのか？」

「そうよ。悪い？」

「いや、悪いなんて言ってないだろーが・・・・・・・・」

「しゅうくん、なのはもいっぱい応援するからね？」

「りょーかい！だったら、なのちゃんのために頑張るよ」

「ふええ！？しゅ、しゅうくん……／＼／＼／」

「アンタ……」

「今回ののは凄く直球なんだね……」

「ん？二人も一緒に応援してくれるんだろ？だったら応援には答え
ないとな。

だから、ちゃんと勝つよ」

「っ！！……／＼／＼／」

「朱兎君、不意打ちはひどいよ……／＼／＼／」

「？不意打ち……？」

んー？意味がわからんのだが……なんで3人とも真っ赤なん
だ？

ただ応援してくれるんだから頑張って勝てるようにするって言った
だけだろ？

それに、俺なら頑張らなくても余裕なところを、頑張って必殺技を
覚える

んだから絶対に負けは無いんだけどな？とりあえず必殺技の候補は
何個か

浮かんだから、あとはどこかのグラウンドかなにかで1度試してみないといけないな。

「さて、そういうことだから今日はもう帰るよ」

「え．．．っと帰るって、今来たばかりだよ？」

「少しでも練習しないとな！」

「アンタ．．．6点入れるって本気なの？」

「当たり前だ！俺は売られたケンカは10年ローンでも買う男だぜ！」

「しゅうくんがんばってね！」

「おう！じゃ、また明日学校でね！」

おっしゃー！まだこの時間なら学校も開いてるだろ！

ボールを借りて練習をしないと！あとは．．．あの技も練習して．．．

そういえば、アレをやったら驚くかもしれないぞ？．．．イイかもな．．．w

それじゃー、思い立ったが吉日って言うし、今から特訓だー！

と、いうことで日曜日になりましたよ・・・と。え？練習は？
そんな地味なのよりはさっさと試合を見たいっしょ？それに練習内
容は

秘密だしな！と・・・お？アレってジュエルシードじゃね？
そういえばサッカーの試合ってイベントの直後にあの少年とマネー
ジャー？

の女の子が一緒に居るときに発動するんじゃないか？

・・・めんどくせーな。だけでも今回は先に見つけちゃった
からなー

えーい、しゃーねえ！

「へー、綺麗な石だな」

「！な、なんだお前！」

「ん？俺？今日の試合に翠屋JFCの監督の士郎さんに拉致られたんだけども」

「監督が……」

「まあいいじゃん。それより綺麗な石だな」

「ま、まあな」

「俺さー、そういう綺麗な石を集めてるんだよな」

「へ、へー」

「つてことでさ、くれない？」

「はあ？つて、そんなこと急に言われてもさ……」

ふむ……明らかにキョドった視線の方向にはマネージャー……
……と

「あそこにいるマネージャーにあげようとか？」

「！な、何言ってたんだよお前！」

「あーはいはい、騒がない騒がない。でどうよ？ いまならこっちのネックレスと交換でもいいぜ？」

「え？・・・本気か？」

「当然だろ？ 石集めるの趣味なんだわ」

「・・・変な趣味だな」

「悪かったな・・・（俺だってそんな変な趣味ねーよ）」

「そのネックレスと交換してくれるのか？」

「おう、結構綺麗だろ？ 知り合いが作ってるんだわ。

一応ちゃんとした銀だからさ」

「いいのか？」

「いっていいって、無理いって譲ってもらうんだしさ！」

「わかった。さんきゅ！」

「おうよ。ま、あの女の子と仲良くやんなよ？」

「うっせー！」

さーて、発動前に手に入っちゃいましたよ？ ジュエルシード・・・
明らかに原作ブレイクだわなw まぁ街が壊れるのは俺としても
迷惑だから、あのイベントは潰して正解だろうけどもさ。

相手のチームの名前は・・・なにになに？桜台JFC・・・とどこもかしこもJFC付けるだけかいっ！もうちょっとなんかさーこうあるじゃん？ひねろうよ？なんかカタカナの名前とか付けてみてもさー

そこんとこd「よし、翠屋JFCは集まってくれー」あんたはもうちょっと

空気を読もうよ？！

「よし、今回の試合に助っ人として参加してくれるメンバーを紹介するぞー！橘 朱兎君だ！みんな、仲良くな！」

「「「「「「「はいっ！」「」「」「」「」

「えーっと、橘 朱兎です。よろしくお願いします」

「がんばろうぜ！」「ポジションはどこかな？」「何年生？」「学校は？」

ざわざわ・・・ざわざわ・・・

とりあえず・・・うるせえ・・・士郎さんも静めるとかしろよな・・・チラッと・・・

「よし、それじゃあポジションはディフェンスでいいだろう」

「なっ！」

「ん？朱兎君どうかしたのかな？」

「いえ、なんでもないです（謀ったな士郎さん!）」

「それじゃ、よろしく頼むよ（コレくらいのハンはもらおうよ?）」

「わかりました・・・」

「よしみんな、試合時間まで軽くアップしておこうか」

はいx10

やれやれ・・・マジでやってくれるぜ・・・だが、コレでこそ面白い!

こういう状況で6点叩き込んだらヒーロー間違いなしだぜ!
お、そうだ・・・

「士郎さん」

「ん?どうかしたかい朱兎君」

「3点+3アシストでもかまいませんか?」

「問題はないけど・・・まさかやる気かい?」

「当たり前じゃないですか。それとも逃げますか?」

「・・・なかなか言うじゃないか。いいよ、その話受けよう」

「OKです。それでは3点+3アシストってことで」

よし、話はついた……あとは

「おい」

「ん？あ、さっきの……」

「え？お前しってんの？」

「ああ、さっきちょっとね」

「そういえばさっき監督が助っ人とかなんとか」

「そそ、橘朱兎っていうんだわ」

「それで？なにかようなのか？」

「ああそうそう、ゴール前のDFは俺一人でいいから
前線に上がっちゃってくれよ」

「俺はキーパーなんだけど？」

「ありゃ？」

「一人だけユニフォームが違うだろ？」

「あー、そういえば……なんかのファッションかと思ってたわ」

「それはちょっとおかしいんじゃないか？」

「まあいいや・・・じゃあアンタのポジションは？」

「俺？俺はフォワードだけど」

「相手チームの攻撃で、ゴール前に攻め込んできたときに
カウンターでロングパスをするから、敵陣ゴール前に居てくれよ」

「なに？どういうことだよ？」

「だから、相手チームが攻めて来たボールを奪って、あんたが
いる敵陣に

ロングパスを送るから、そのままシュートしてくれってこと」

「・・・本気か？」

「大本気！」

「そんなことできるのかよ」

「出来るんじゃない。やるんだ」

「・・・まあいいや。わかった、相手の攻撃のときに敵ゴール前
にいたらいいんだな？」

「そういうこと。ま、よろしくたのまあ」

「期待しないでまってるよ」

「へいへい、んじゃまた試合で」

よし、仕込みはOKだな。これで勝つる！

軽く準備運動でもしておきな・・・もう始まりそうだし。
っと、集合か。さーてどう料理してやろうかなあ！

まずは相手チームからの攻撃か、なかなか早いパス回しだな
他のディフェンスが追いつけてねえ・・・どうよそれ・・・
っと、俺の前に来やがったか・・・甘い俺を抜けるなどと思
うのがなあ！

チラッ・・・

よし、ちゃんと指定のポジションをキープしてるな！
丁度いいから練習した技をパスに使ってみるか！

「甘い、甘すぎる！チョコパンなんかよりも！
いくぜ、イーグルショット！」

ふ・・・流石俺。いくら鋭い低空ライナーとはいえ相手チームの
メンバーの

間をすり抜けるようにしてゴール前のあいつのところまで届いたぜ！
おっと、ナイスシュート！ほぼ1対1だから当然かw
フッフ、高町士郎よ！誰に勝負を挑んだか、後悔させてやるぜー！

「アイツ・・・結構凄いわね」

「やっぱりしゅうくんは凄いの！」

「朱兎君がんばってー！」

「「すずか（ちゃん）ずるい！」」

応援席でなにやってんだか・・・ま、ファンサービスってやつだよな

軽く手でも振っときますか

「あ、聞こえてたみたいだね」

「にやあ！なのはも応援するもん！」

「朱兎！アンタもゴール決めなさいよね！」

ディフェンダーにゴールを望むとかどんだけー@@；

まあやるけどな？さーて・・・次はどの技を使うかな。

つーかいくら相手ボールだからってまたゴール前まで来られるとか油断しすぎじゃね？ふむ・・・ちよつと自分でゴール前まで持つて行ってみるかな。

「いっけー!」

「……甘めえよ」

シュートされたボールをあつさりとカット、小学生のキック力じゃあコレくらいが
限界か……。ま、直接蹴るわけじゃないから仕方ないか。

「な!止められた?!」

「みんな戻れー!」

まあそうあせらなくてもさっきみたいなパスはしねえよ……。と、ちよつと伝説を試してみようじゃねーの……

「と、止めろー!」

3人……

「はああああ!」

6人……。おっと、手を使うのは反則なんじゃねえか?まあ当たらないけどよ

「くっ、潰せー!」

10人・・・おいおい、潰せとか穏やかじゃねえなあ・・・

「止める！」

止めたいのはわかるが、キーパーがゴールエリアから出るのはいただけないぜ？

つか、気付いたら俺の前には誰もいねーんじゃない？お？あっさり伝説達成か？

たしか自軍のゴール前から相手チーム全員を（キーパー含む）ドリブルで抜いて

シュートするんだっけ？「ゴール・トゥ・ゴール」とかいったよな？まあいいや、あとは軽く蹴っとけば入るだろ。死亡フラグ？そんなの関係ねえw

「すごいすごい！朱兎君かっこいいよ！」

「しゅうくん！しゅうくん！」

「その調子でもっと点を入れなさいよ！」

やーれやれ・・・アシストしてもシュートしても結局騒ぐのかよ@@;

ま、嫌いじゃないけどな！軽く手を振りながら笑顔でも見せときゃいいかな？

「あう・・・／／／／」

「にゃ／／／／」

「絶対狙ってるでしょアイツ……／／／／／」

お？ 静かになったな。それにしても応援席が結構埋まってるのには驚いたな。

ああ、応援席っていつでもベンチと河川敷の土手だけだなw
ていうか所詮ガキの遊びとか思ってたけど、結構有名だったのか？
にしてもこれで1点＋1アシスト……先は長そうだなあ

うん、まあ結論からいうと6－0で勝ったわけだ。

ちゃんと3点＋3アシスト達成したぜ！これでケーキがホールでも
らえる♪

しかもちゃんと必殺技を2回つかったんだぜ？ えっとな、相手ゴール
前まで攻めてる

のを追いかけてって、相手がカットして蹴ったのを直後に直接蹴りこむ『反動蹴速迅砲』と

コーナーキックの時にパスをもらい、相手のゴールの上空に蹴って、そこから急降下する『夢想封印』を使ったんだ。あれ？これって『ドライブシュート』じゃね？

まあいいやW全員かなりビビってたからな！さてさてジュエルシードも手に入ったし、

こりゃ本格介入決定だわな！

11話 サッカー……作家アツ……危険だ！（後書き）

作者・朱兎「あとがき？なにそれおいしいの？のコーナー」

作者「時系列とかの間違いは、やっぱないほうがいいね」

朱兎「そりゃあなあ……」

作者「今度からはキッチリ調べとくよ」

朱兎「そうだなー」

作者「どうしたんだよ、なんか凹んでるっぽいけど」

朱兎「デバイスが……」

作者「デバイスが？」

朱兎「若本さんなんだ……」

作者「……は？」

朱兎「だからな？」

???「固定概念だな。別の方法を試してみろ」

朱兎「そうそう、そんな風に文句言われるんだよ」

作者「は、はあ……」

朱兎「んでな？最近携帯とリンクさせてメールとかも
受けられるようにしたんだけどさ」

????「メールだぞ・・・豚あ」

作者「宝月さん！」

朱兎「はあ！？っていうかいつの間に！」

作者「すげえな・・・普通のインテリジェントデバイスじゃない
だろ」

朱兎「まあチートはチートだよ」

????「実にくだらん」

作者「へ？」

朱兎「にやろう・・・てめえいい加減いうこと聞けよ！」

作者「まあ・・・放置しておこう・・・ということぞ！」

次回『絶対？』をお楽しみに！」

朱兎「あ！てめ！」

????「ぶうるああああ！」

12話 絶対？安易に使っていいセリフじゃねーんだぜ？（前書き）

はい、作者です！

今日も今日とて読んで頂いてまことにありがとうございます！

ちょっと短いかも知れませんが、生暖かく見守っていただけると自分は狂喜乱舞します！

感想もいつでもバッチコイなので、良かったらお願いします！

12話 絶対？安易に使っていいセリフじゃねーんだぜ？

「なあ……コレ……どうしたらいいと思う？」

「なんです？」

「いや……朝起きたらさ。枕元に『パッチ』って書いたディスプレイと

『デバイス用！ちゃんと使うこと！ゼウス』って書いた紙がさ……」

「捨てていいですよ？」

「は？あ、いや……」

「寧ろ捨てましょう！」

「……お前の父親だったよな？」

「気のせいですよ？」

「……そか」

「ええ、そういうことですから、きつとろくでもないものですので早く捨ててください」

「あ……実はもう使っちゃってるんだわ……」

「なっ！急いで解除を！」

「この程度の更新、迅速に出来なくてどおおおするっ!!」

「なん……だと……」

「ああ……やはりろくでもないものを……」

「貴様には私の力が必要なようだぬああ！」

「うるせえ！っ！かお前はなんなんだよ！」

「うわたしはあ！か・み・の・デヴァイスであゝる！」

よし！初期化しよう！そうしよう！っていうかこんなの持って闘うとか

ぜってー無理だから！

「ぬあゝにか不穏なことを考えているようだぬああああ！」

「……お前って何が出来るんだよ」

「いよく聞け小僧。我輩わぁありとあらゆる魔法の増幅とおう、我輩を装備している者に特殊な力を付与することが出来るのどうあぁあぁあ！」

「……増幅ってどれくらいだよ」

「なぁに、たかだか数百倍程度にすぎぬあああい」

「どんだけチートだよ……俺そんな設定付けてねえだろ？」

「言っただぞござおう！我輩わぁ、か・み・の・デヴァイスなのどうあぁぁ！」

「……そ、そうか。って、答えになってないだろ！」

「ぶるうあぁあぁあぁあ！」

「やかましい！」

「朱兎……速やかに破壊することをオススメします」

「まぁ、とりあえず誰も居ないところで封時結界を貼って最弱魔法を試してみようぜ？」

「最弱って……一体何をするつもりですか？」

「ん？あぁ、FFのファイア程度で十分だろ？」

「まぁ……それくらいなら大丈夫ですね。大きなゴミ袋を包める程度の大きさの炎ですから」

「だろ？んじゃまずはテレポートで……町外れの採掘場にも行ってっ」と

「さてよ？ドラ○ンボールの瞬間移動の方がいきがするぞ？」

「あっちは武術の延長線上っぽかったし出来るだろ……だぶん

たしかイメージが大事だって・・・あ、こうやるのか。
よし、移動！

っていかコレマジで便利すぎだな！誰にも教えられないけどさ
まず、気の使い方から教えないといけないから時間が滅茶苦茶か
るし

・・・ぶっちゃけめんどい！

「んじゃあ一応この街を覆えるくらいの結界を作って・・・と」

「魔法っていうのは便利ですね。それにしても念の入用がすごいで
す・・・」

「なにが起こるかわかんないからな・・・」

「そうですね・・・あ、もうそのくらいでいいんじゃないですか
？」

「ん、そっか。んじゃいくぜー」

「はい。一応私たちの周りにも耐火結界を張っておきますね」

「よろー。んじゃ『ファイあ「ぞおうふくどうあああああああ
は？」』」

ドグオオオオオオオオオオオンンンンンン！！！！！！！

「・・・・・・・・へ？」

「・・・・・・・・今のは・・・・・・・・」

「どうだああ」

「とりあえず・・・・・・・・」

「あ・・・・ああ・・・・・・・・」

「結界を張っておいて正解でしたね・・・・・・・・」

「あ・・・・ありえねえ・・・・・・・・」

「固定概念だな・・・・・・・・ありえない事などありえないのどうあああ
あ！」

「ふざけんなあ！てめえ一体どれくらい増幅しやがった！？
大きなゴミ袋を包める程度の大きさの炎のはずだろうが！
なんで東京ドームまるまる3個分くらいが完全な焼け野原に
なってんだよ！封時結界の中じゃなかったら大事だろうが！！！」

「！
」
「気にするぬあああ！たかだか数百倍程度であゝるううううう！
」

よし、コイツは封印決定だな。危なすぎて使えやしねえ・・・・・・・・
にしてもどこかにしまい込んででも勝手に出て競うだからな・・・・・・・・

とりあえず、全員に（母さんには特にきつく）絶対に触らないように
いわないと。そうしないとコイツが勝手に使用者登録をしてしま
いそうだ。

っーことは、新しいデバイスを作らないといけないじゃないか・・・
・！

今度こそは完全に自分の意思で作ってやるからな！許さねえぞゼウ
ス！

ふう・・・あのデバイス騒動からいろいろあったけど・・・
今は無事に？いや、何故かアリサ・すずか・高町家に連れられて？
違った、拉致られて・・・だ。そう拉致られて温泉に来てるんだ。
温泉イベント自体は問題ないんだが、何故に俺は捕獲されてるんだ？
元々介入する予定だから逃げやしないっていうのにさ。それに
何度も『逃げない』『大人しくする』って言ったのに、ずっと
袖をつかまれてたせいで、微妙に服が伸びてるし・・・俺はそん
なに

信用できないのか？っーか信用する気がねえのか？

「しゅうくん！一緒にいきましょう！」

「あー……入り口までなー」

「まだ8歳なんだからこっちに一緒に入ってもいいのよ？」

「いやいやいやいやいや！それは無いですから！」

「そうだなー行ってきた」土郎さんは黙っててくれ！」おおっと嫌われちゃったかな？」

「嫌うとか言う前に、アンタも止めろや！」

「はっはっは。冗談だよ冗談！」

「真顔で冗談なんか言ってんじゃねえよ！」

「アンタ……土郎さんとえらく仲がいいのね」

「この前の道場から、何度もなのはちゃんの家に通ってるの？」

「ハア！？すずかもアリサも何を言ってるのかなあ！？」

「でも土郎さんも朱兎君も楽しそうだよね？」

「すずか、バカはほつといてさっさと部屋にいきましょう！」

「ちょ！アリサてめえ！」

言うだけ言ってさっさと行きやがった！にやろう・・・
にしてもユーノのヤロウはなのはの肩に乗ったままだった。
つーことはやっぱりあのまま風呂にも行くって事だよな？
よし、やっぱアイツは淫獣でまちがいねえ！
・・・とりあえず、さっさと部屋に荷物を運ぶか。それから
まずは風呂だな！温泉は昔から好きだったんだよなー！

「くっはあゝ、温泉サイコー！」

「ははっ、本当に好きなんだなあ」

「そりゃもう！」

温泉が嫌いな日本人とか、そうそういないだろうなあ・・・
っと女湯の方にも来たみたいだな。声を聞いているだけでも
ユーノがあっちに居るのがわかるな。あの淫獣め・・・
それにしても、この温泉でだったよな？なのはとフェイトの
2回目の邂逅って。さーて・・・どうやって介入してやろうかな？

P・S・デバイスは新しく作り直すことにしました！

12話 絶対？安易に使っていいセリフじゃねーんだぜ？（後書き）

作者・朱兎「あとかきのコーナー」

作者「はいっ！って言うことで今回も御礼から！ユニコーン様

十まっち十様、ソロモン72厨様、まことにありがとうございます！
ございました！」

朱兎「ん？もしかして……」

作者「そのもしかしてだ！感想を頂いたのだよ！」

朱兎「おおー！俺からも、本当にありがとうございます！」

作者「感想がもらえるっていうのは、本当に嬉しいことなんだね」

朱兎「前に書いたオリジナル物では感想ほとんどなかったもんな」

作者「は、ははは……」

朱兎「あ……そうそう！っていうかデバイスなんだけどな？」

作者「ん？ああ、この前言ってたアレ？」

朱兎「そそ、アレだけどさ。封印確定だな」

作者「ふーん、今度はまともなものを作れよ？」

朱兎「当たり前だ！材料が勿体無いからな！」

作者「ちゃんと考えてつくらないとなー」

朱兎「ゼウスのヤロウ・・・」

作者「おおっと！こんな時間だ！早くしろって！」

朱兎「あ、ああ、っそうだな」

作者「それでは！次回『今度こそ！』をお楽しみに！」

朱兎「短くてすみません！ではでは！」

13話 今度こそ! . . . 今度こそ幸せになりたいなあ (遠い目 (前書き))

はい、作者です。

自分がどういう方向性で行きたいのかがちよつとわからなくなり始めてます。

とりあえず、好意≠LOVEのつもりです。 . . . まだ。うん。
では13話をお楽しみください。

13話 今度こそ！・・・・・・今度こそ幸せになりたいなあ（遠い目

ということで、温泉から出たわけなんだが・・・・・・目の前っていうか出たトコで

なのは達に絡んでる長身の女性がいた・・・・まあアルフだな。

あーたぶん念話でなんか言ったんだろうなー、なのはが怖がってら・

・

ふむ、んじゃうちの（？）なのはを怖がらせてくれた御礼でもかるーくやっとく

ことにしようかな。っと、話終わったのかな？こっちにアルフが歩いてくるぞ

「やれやれ・・・・あんまり彼女を怖がらせないで頂きたいんだけどね」

「あんたもあのおちびちゃんのお仲間かい」

「まあそんなもんかなー」

「そうかい、あんたも邪魔するってんならっ！？」

話の途中で俺が闘気を叩き付けたもんだから驚いてんぜw

にしてもほんの少し開放しただけなのにそこまで驚くもんかね？

（本人は気付いていないが闘気・仙気・殺気を纏めてぶつけられたら常人ならばショックで気絶ですめばいい方である）

「まあ忠告はしておくさ？あんまりはしゃいでると、痛い目みるってね」

「あんた……」

「ま、お前さんの主にヨロシク。いずれ会うことになるだろうけどさ」

「！……ふんっ！」

おーおー、早い早い。にしてももうちょっと感情のコントロールをしたほうがいいんじゃないのかねえ。さてと……なのは達のフォローでもしますかー

「おーい」

「あ、朱兎君」

「アンタ！どこ行ってたのよ！」

「はあ？お前らと一緒に温泉に入ってたんだが？」

「いなかったじゃない！」

「おまえなあ……男湯にいたに決まってんじゃないか。見てわかんねえか？」

「あ、そういえば男湯の方から来たね」

「それならそうと、早くいいなさいよ！」

「言う前に文句言われてたと思うのは俺だけかよ・・・っと。で？
なのちゃんは

どうしたの？なんかちよつと暗い感じがするけど？」

「変な女にイチャモン付けられたのよ！昼真っから酔っ払ってんじやないのー！？

気分わるっ！」

「まあまあ・・・くつろぎ空間だし、いろんな人がいるよ・・・

」

「ふむ・・・それでなのちゃんが沈んでるってわけか」

「ううん、そんなことないけど・・・」

「ま、気にしないことだよ。いろんな人もいるし、お酒だって飲ん
でたかも

しれないしね。それに・・・」

「それに？」

「なのちゃんは笑顔のほうが似合うよ？」

「にゃあああ！？しゅ、しゅくん・・・急にそんなこと言うなんて
反則だよお／＼／／／」

「はっはっは！ほらほら、もうすぐ夕食だろ？早くいこう？」

「そうね！なのはもさっさと忘れたほうがいいわよ」

「ねえねえ朱兎君」

「ん？どうしたすずか？」

「どうかな？」

「ん？・・・・・・ああ、風呂上りで浴衣っていうのは艶っぽい
っていう感じでいいね」

「そ、そうかな？」

「おう、かわいいよ」

「あう・・・・・・ありがとう・・・／／／／」

「っと、当然アリサもなのちゃんもかわいいからね？それに、なの
ちゃんが

髪を下ろしてるのも久しぶりに見られたしさ」

アリサに噛み付かれる前にけん制しておく、流石に今の状態だったら
夕飯に間に合わなくなるからな。それにしても・・・まあ今夜な
んだろうなあ

どんな格好で出て行くか・・・急遽作ったストレージデバイスは
持ってきてるけど

まだ実用テストもしてないからな。ま、なんとかなる・・・じゃ

なくてなんとかする
けどな。さーて飯だ飯だー！

結論。確かに旨かった・・・でも3人に食べさせられるのは羞恥
プレイっていうか

拷問だと思うわけですよ。途中から忍さんと桃子さんまで乱入する
し、

恭也は睨んでくるし、美由希さんとノエルさんとファリンはなんか
生暖かい

目でみてるし！っていうか引率っつか保護者なんだから士郎さん
は止めろよ！

とまあ、なんやかんやで夕食も終わり・・・大人チーム以外は寝
る時間なわけで

俺もさっさと寝たふりをした影分身を残して森で準備中なんだわ
たしか俺の記憶がたしかならば・・・そろそろジュエルシードが
発動するはずだし？

んでもってなのはとフェイトの戦いも速攻終わったはずだからな
さて・・・俺ってばれると困るから、見た目は変化の術で二十歳
くらいになればいい

として、装備はどうするか・・・装備装備、デバイスは急遽作っ
たストレージがあるから

魔法のサポートはどうにかなるけども、ばれないようにって事が重
要なんだよな

・・・とすればアレなんか最適だよな？ふむ・・・よし、ア
レを装備して行くか！

ドシュウウウウウ！！！！

おおっとー！また来たぜーあの感覚！キュピーン！ってやつだな
これは発動したって事なんだろうなあ・・・ふむ、大きな魔力の
塊の近くに

2つの気配、これがアルフとフェイトだろう。で、向こうから走っ
てきてるのが

なのは・・・と、まあなのは封印には間に合わんわな。となる
といつも通り

o☆h a☆n a☆s h iになるんだろうなあ。でも確か最初の戦い
はなのは

の負けだったはずだ。んで、ジュエルシードを1個＋1個で2個持
っていかれる

んだったよな？・・・よし、そこで介入を・・・っと戦闘開始
っぽいな！

どうやらアルフとユーのはさっさと退場したらしい。なのはとフェ
イトしか

いないな。よし、状況を見てからタイミングを計って突入しますか！

『Thunder smasher』

『divine buster』

「レイジングハート、お願い！」

『All right』

はー．．．．にしてもやっぱアレだね。魔法じゃないね魔砲少女だよね．．．．
どう考えても砲撃合戦だもんな。．．．あれの中に突っ込むのかー
．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．めんど

『scythe slash』

「んう．．．．あああっ！」

つと今だ！

ガキイイイイイイイインンンン！！！！！

「なっ！」

「やれやれ、殺す気かね？」

「．．．．あなたは」

「なに、少々おせっかいを焼きにきた者さ」

「．．．．．．．．バルディッシュ」

『yes, sir. Photon lance. get set.』

「やめておきたまえ。君の攻撃が通じないのは、今で十分わかっただろう」

『Fire』

「やれやれ・・・クリスタルウォール！」

「っ！」

「残念だが、今の君の攻撃では壊すことは出来ない。今日は諦めて帰るといい」

「フェイトー！」

「アルフ・・・」

『put out』

「レイジングハート！？」

「負けたというのをわかっているのだろう。潔いデバイスだな」

「帰ろう・・・アルフ」

「でもジュエルシードが！」

「残念だがコレは私が預かっておこう」

「……あなたもジュエルシードを!？」

「なに、騒動の要因を放置しておくほど寛容ではないのでね。さて、これ以上

争う気配もないようだな。では私はここで失礼するでしょう」

「つまちな!」

「……いい、帰ろう……アルフ」

「待って!」

「……出来るなら、私達の前にもう現れないで。もし次があったら

今度は止められないかもしれない……」

「名前……あなたの名前は?」

「……フェイト……フェイト・テストロッサ」

「あ……あたしは!」

「行ってしまったな」

「あ、さっきはありがとうございました!」

「なに、気にすることはない」

「あの、ジュエルシード……」

「残念だが、コレをいま返すわけにはいかない」

「っそんな!」

「案ずる事はないさ。悪用しようというのではないからな」

「それでも! 危険な物なんです!」

「ふむ……だがそのような心配をしている暇はあるのかね?」

「ふえ?」

「そら、結界も張っていないものだから、旅館の方に明かりが多くなってきたようだが」

「にゃああ!?!」

「ふ……それではな」

「あっ!」

さて、瞬動で旅館とは逆方向に來たはいいが……

流星にこの格好は目立つよなあ。ん? 今の格好がどんなのかって? そんなの簡単だよ。今は牡羊座の聖衣を着てるのさ、きっちり頭までね。

太陽のエネルギーが蓄積されているってだけあって無駄に輝いてるもんだから目立つ目立つ! さっさと装備をはずして『ゲートオブバビロン王の財宝』に収納

しないと・・・っていうか早く帰らないと俺の貴重が睡眠時間が
ー！急げー！ー！！！！

13話 今度こそ!・・・・・・今度こそ幸せになりたいなあ(遠い目(後書き))

作者・朱兎 「あとがきという名の座談会」

作者 「まずは感謝を。幻想の庭師様、感想ありがとうございます!」

朱兎 「作者ともども、とてもやる気になっております!」

作者 「ともどもっていうか頑張ってるのって・・・・」

朱兎 「あゝ?俺だって頑張ってたんだよ!」

作者 「こっちのほうが頑張ってるに決まってるじゃん!」

朱兎 「まあそんなどうでもいいことは置いといて」

作者 「ちょwおまw」

朱兎 「結局、今デバイスを作成してるわけだけどさ」

作者 「うん」

朱兎 「なんか面白い機能ってない?」

作者 「おもしろい・・・・ねえ」

朱兎 「前のあのデバイスっぽいのはナシな!」

作者 「はいはい・・・・じゃあアレだ」

朱兎「ドレだよ」

作者「アンケートをやってみよう」

朱兎「はあ？またいきなりだな」

作者「こんな機能があったら面白いっていう機能を応募してもらおう」

朱兎「ふむ・・・んじゃ声は女性で性格は温和なんだけど芯が強いって感じで」

作者「ふむふむ、その上で付けて欲しい機能を応募してもらえばいい！」

朱兎「なるほど・・・ってことで明日3／1の午前0時までの受付にしようか」

作者「よしよし、そういうことで、もし良ければ投稿しちゃってください！」

朱兎「よろしくお願いします！」

作者「それでは次回『黒だよ』にご期待ください！」

朱兎「あれ？午前0時ってことは2／28の夜中じゃねえの？@@;」

14話 黒だよ・・・てめえのタイミングは真っ黒なんだよお！（前書き）

はい今日の2回目です。

あと1回はいけるかな？無理かな？

さてさて、1回目のUPから2回目のUPまでに

すでにアンケートの回答が2件寄せられています！

ありがとうございますね。感謝感激です！

それでは14話どうぞ！

14話 黒だよ……てめえのタイミングは真っ黒なんだよお！

この間の温泉から帰ってから、アリサとなのはがケンカをした。

同時期にフェイトとやりあってお互いにデバイスがイカレタっぽい。それにしてもこの時期には介入したらまずいからな……

この頃の経験がフェイト・なのはの両名の成長に繋がる。かといって放置

し続けるのもまずい。まあ危険なときは手を出すという方向で構えておこう

とまあ考えてはいたんだ。あのKYが乱入するまではな！

「…………ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「…………うん。夕べみたいな事になったら、私のレイジングハートも

フェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だもんね」

「……………だけど、譲れないから」

『Device form』

「わたしは……フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど」

『Device mode』

「私が勝ったら・・・ただの甘ったれた子じゃないとわかってもらえたら！」

おはなし・・・聞いてくれる？」

「・・・っ」

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ

詳しい事情を聞かせてもらおうか」

ないわー・・・

流石に俺もジュエルシードを封印せずに戦闘継続ってのはヤバイと思うんだけどさ

かといってあのタイミングで乱入とかないわー・・・どう考えてもKYだろ・・・

明らかに待ちしてましたよーみたいなタイミングじゃねーか！

っとアルフも無茶すんなあ・・・いくら捕まりたくないからってさあの弾道じゃあ一歩間違えたらフェイトにも当たってただろ・・・それにしても、フェイトもあきらめねえな、どうにかしてジュエルシードを

回収しようと・・・って！あのKYヤロウ！フェイトを撃つ気か！？

この俺のプライドにかけて！やらせはせん、やらせはせん、やらせはせんぞーっ！

「ああっ！フェイトちゃん！」

「『熾天覆う七つの円環』ロー・ファイアス・・・やれやれ、君も無茶をするな」

「あ、あなたは・・・」

「安心したまえ。今は敵ではないよ。さて・・・と、ジュエルシード封印！」

「あ・・・」

「まったく、戦闘をするのならばしっかりと封印を施しておくことだ
また暴走することになる」

「・・・ごめん」

「なに、怒っているわけではないよ。少々S「何者だ！」まったく・・・」

「そのロストログアを渡すんだ！」

「残念だが断らせていただくこう」

「なんだとっ！」

「さあ、今のうちに引くといい」

「でも……」

「大丈夫だ。私はあの程度の者にやられるほど弱くはないよ。
それに、やられるわけにもいかないからね」

「え……っと……」

「ありがとう……と言えばいいさ」

「あ、ありがとう……」

「どうしたしまして。さ、早く行きなさい」

「ん……」

やれやれ、大人しく引いてくれたか。それにしても、ありがとうと言った時は

少し赤くなっていてえらく可愛かった……さーて、それにしてもこいつあ

どうしようもないくらいKYなヤツだな……

「君は一体何者だ！」

「お前に名乗る名はない！」

「なっ！」

「か弱き乙女に問答無用で攻撃を直撃させようという輩に敬意を払うことなど

できませんと言っているのだよ」

「貴様っ！」

「さて、私も退散させてもらおう」

「っ！逃がすかつ！」

「フ……『サイズ・オブ・クロノス時空統べる大神の大鎌』やれやれ……面倒なことでだな」

あーしんど……さて、この宝具の効果で時間を止めてさっさと逃げますかねえ

これでなのは4個・フェイトが3個・俺が2個……か、なんとか大きな事件

などにはならないように誘導はできているけど……もう少しうまくやらないと

いけないな。それにしても……今の時間だと淫獣がなのはに変化をといて

見せている位かな。帰って来たときのなのはの反応が面白そうだ。っと、

俺までKYになっちまうか……そいつは困るな。

あ………そういえばあのイベントがあったってことは、なのはが今夜アースラに
行くんじゃないか？やれやれ………少しだけ手を貸してやるかな・
・・

「それじゃ、お母さん。いってきます！」

「いってらっしゃい。頑張ってね！」

「うん！」

「それじゃ、急ごうユーノ君！」

「うん！なのは！」

「やれやれ………こんな時間にドコへ行くことやら………」

「ふええ！？ってしゅうくん！？」

「こんばんわ、なのちゃん。夜のお散歩かい？」

「え、えーつとね！ちよつと行かないといけないの！」

「そっか、それじゃあ途中まで一緒に行こうか」

「にゃ、にゃあ？」

「こんな時間だからね、流石に一人で行かせる訳にはいかないよ」

「だ、だいじょうぶだよ!」

「だーめ。それにここで別れたら士郎さんたちに言っちゃうよ?」

「にゃあ!??ず、するいよお!」

「だからね? ほら、どこまでかはわからないけど、一緒に行こう?」

「うん・・・しゅうくん」

「ん? 何かな?」

「ありがと・・・」

「どういたしまして」

さて、他愛ない話をしながら海鳴公園まで来たわけだけど、ここでKYと

合流するってことかな? んじゃ軽く淫獣に釘を刺しときますかね・・・

「ここでいいのかな?」

「うん。ここでだいじょうぶ!」

「そっか、でも危なくなったら僕の携帯にすぐに電話してね?」

「うん！ありがとう！」

「それじゃ、僕は帰るよ。あ、そういえばこいつってフェレットだっけ？」

「うん、そうだよ。ユーノ君っていうの」

「そっか、男の子なんだね。大人しいんだなあ

（てめえなのはに危ないことをさせたらぶっ潰すからな）」

「きゅ！きゅー！（ひ、ひいい！）」

まあこんだけ脅しといたら多少は自重すんだろ。っていうかしなかったら

マジでぶっ潰す。さて、今度は目の前の海でなのはとフェイトが激突する

んだったよな。本格的に介入を……って何回も同じこと言うてするような気も

するが……とりあえずフェイトに合計9個になるようにジュエルシードを

渡して、その上で雷が直撃しないように護ればいいだろう。フェイトにも

親の愛情ってやつをちゃんと教えてやりたいしな……それじゃ、次も

頑張りますかねー！

14話 黒だよ……てめえのタイミングは真っ黒なんだよお！（後書き）

『サイズ・オブ・クロノス時空統べる大神の大鎌』

対世界宝具…ランクEX レンジ999 最大補足1～∞

xp?vo? (クロノス)とは時間そのものを指し示す。またギリシア神話の

大神ゼウスの父であったという。その武器である大鎌はクロノスの力の象徴

であり、その真名を開放すれば時空を手足のように操ることが出来るようになる。

作者・朱兎の座談会コーナー！

作者「はい！やってきましたあとがきです」

朱兎「今回は聞いたことが無いような宝具が出てきたな！」

作者「うん、まあ、あれだ」

朱兎「なんだよ？」

作者「私の妄想だ！っていうか創造？創作？」

朱兎「……効果が鬼だけだな」

作者「ふ……お前のチートは終わらんぞお！」

朱兎「やかましい！っていうか俺ジュエルシードの封印できたのな」

作者「は？何を当たり前なことをいってんのさ」

朱兎「だってデバイスないじゃん？」

作者「デバイスとは、魔導師が魔法の使用の補助として用いる機械である」

朱兎「何だよ急に」

作者「お前の能力なんだっけ？」

朱兎「あんま覚えてない……」

作者「あとでキャラシートでも作るわ……」

朱兎「わりい……」

作者「とりあえず、漫画・アニメ・ゲーム・小説の武術・魔術・技術使用可能

ってのがあるわけよ」

朱兎「うんうん」

作者「つまり、リリなの魔法もいけるわけだ」

朱兎「なんで？」

作者「この魔術ってのの範疇は『魔力を使用して起こすアクション』全般なわけだ」

朱兎「……………つまり？」

作者「Fateの固有結界も、ネギまの大魔法も、果ては魔力の塊のような

魔眼すらも使用可能ってことだよ」

朱兎「……………チートすぎねえ？」

作者「何をいまさらw」

朱兎「先生……………自分が怖いです……………」

作者「はっはっは！さて次回『海』をお楽しみに！」

朱兎「魔術がこれなら武術や技術は……………」

15話 海………といえぱやっぱアレだろう！（前書き）

本日3話目でっす。やっぱり原作があるものの二次を書くのはとても難しいです。でも完結まで頑張っていけますのでできれば応援していただけると嬉しいです。

15話 海……といえぱやっぱアレだろう！

「……………アルカス・クルタス・エイギアス……………煌めきたる天神よ

今導きのもと降りきたれ バルエル・ザルエル・ブラウゼル
撃つは雷 響くは轟雷 アルカス・クルタス・エイギアス……………
……………！！！」

「……………フェイト」

まったく……………この間も無茶をすと思ったけど、本当に無茶ばかり

する子だね……………フェイトってさ。あの魔法は範囲魔法だから結構魔力を

消耗するだろうから、強制発動させたジュエルシードを封印しきれるかどうか

かなり際どいところだと思うんだけどね。たしか原作ではなのはと一緒に

封印したんだったな。と、いうことはもう暫くこのまま様子見をしたほうが

よさそうだな……………

「行くよ、バルディッシュ……………がんばろう」

そして大魔法発動ってわけか・・・ふむふむ、確かにこの規模なら一般人にとっては対処の仕様も無いんだろうな。でもなのはが耐えられる

ってことはランクS以上なら耐えられるって事になるよな？あれ？俺なら

余裕じゃね？ということはこのまま魔法に突っ込んでも大丈夫ってことか・・・

でも流石に痛そうだからやめておこう！っと、丁度なのはが来たぞ！んじゃ、俺も出る用意をしておきましょうかねえ・・・

「フェイトの・・・邪魔をするなー！」

「違う！僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」

「ユーノくん！」

「っああ・・・」

「まずはジュエルシールドを停止させないと、まずいことになる！・・・だから今は、封印のサポートを！」

「フェイトちゃん！手伝って、ジュエルシールドを止めよう！」

『Power charge・・・？』

『Supply complete！』

「ふたりできっちりはんぶんこ！そしてふたりでせーの、で一気に

封印！

「ディバイン」

「サンダアア――」

レイジー！
「バスターアアアア！」

あゝあ．．．無茶しやがって．．．でもま、これで封印完了だ
ろ．．．？
．．．なに！？

「そんな！6個は封印できたはずなのに！」

「ふえ・フエイトオオ!!!」

馬鹿な！なんで封印が完了してないんだ！1・2・3・・・7個だとお！？

ジュエルシードは21個じゃねえのかよ！クソツ！間に合え！！！！

「な、7個!? そんな馬鹿な! 僕が発掘したのは21個だったはず

だ！」

「どういふことなんだい！？」

「わからない・・・でも！なのはー！」

「邪魔だ！どけ淫獣！」

「っえ！？」

「フェイト！なのは！俺の後ろに！」

「ふええ！？だ、誰！？」

「あ、あなたは・・・」

「話は後だ！いっくぜえ！ここは海！おあつらえ向きなんだ！
でかいのぶつけてやんぜえ！」

はっはー！デカイ魔力をぶつけてやったらいいんだから問題ねえだ
ろうが！

「来やがれリヴァイアサン！！！！いっつけやあ！！
『大海嘯』^{だいかいしょう}！」

その力ある言葉と共に俺の背後の空間が裂け、そこから異形の巨大
な生物が

その身体を乗り出した。それと共にその空間から大量の水が津波と
なって

ジュエルシードに殺到した。ただの水だったら押し流されてしまう
だろうが

これは召喚魔法によるものなので、どっちかといえは魔力の塊みた
いなものだ。

つまりどうなったかという、目の前の嵐ごと押しつぶし蹂躪しつ
くし、そして

完全に沈黙した7つのジュエルシードが浮いていたのだった。

「おし、なんとかあったか」

「さ、さっきのは……」

「えーっと、えーっと！」

「いい加減落ち着こうか？なのちゃん」

「ふええ！？しゅ・しゅうくん！？」

「やれやれ……折角いままですうまく隠せてたと思ってたんだけど
ね」

「しゅうくんも魔法使いだったの！？」

「フエイト」

「あなたは……誰？」

「まったく……この間も言ったと思うが、無茶のしすぎだぞ」

「あ……この間の？」

「そういうことだ。あまり無茶をするな」

ガガガアアアアアアアンン！！！！

「つああ！かあさん！」

「やらせるもんかよ！『万難排す戦女神の盾』！」
ファイギス

「しゅうくん！フェイトちゃん！」

「甘めえんだよ！この程度で俺を落とせるとでも思ってたのか！」

「すごい……母さんの魔法を防ぐなんて……」

「この程度どうってことはない。さ、執務官が来る前に今は戻ったほうがいい」

「あ、ジュエルシールドが……」

「残念だが、言い訳用に4個は回収させてもらうさ」

「じゃあ……」

「俺は4個しか見てないからな。なのちゃんは何個あったか覚えて

る？」

「ふええ！？えっと・・・4個かな！」

「本当ならば俺の持っているのも渡せばいいのかも知れないが・・・」

「ダメなの・・・？」

「君のお母さんに渡してしまうと大変なことになるってわかってるんだ」

「わかった・・・アルフ！」

「フェイト！」

「次は闘うことが無ければいいな」

「・・・うん」

「フェイトちゃん！また「フェイト！急ごう！」あう・・・」

「ん・・・」

そう軽く頷いてアルフと共に飛び去っていった。つと、そこに現れるKY君

さて、俺もさっさと逃げるかな。

「それじゃなのちゃん。また後でね」

「にゃ、しゅくん!？」

「なっ! 待て!」

そういい残して、俺も虚空瞬動でその場を離れる。待てといわれて誰が待つかよ!

それにしてもこの後はアリサがアルフを拾うんだったよな? 軽く手回しとこうか

フェイトが持っていたジュエルシールドは合計8個。あれじゃ次元震をうまく起こす

のは難しいだろう。うまくいっても虚数空間に落ちることが出来るか出来ないかの

瀬戸際ってとこだとは思う。そのまま次元震が怒らなければいいが、起こったら

どうにかして手を出すべきだろう。フェイトの哀しみもすこしは減らせるかもしれん

さて、どうするべきか……プレシアを生かすか放置するか。だがアリシアは可哀想では

ある。しかしプレシアがフェイトにやっていた仕打ちを見逃すわけにも行かない。

まあ最後の選択は本人にさせよう。今はどうやってフェイトを救うかを考えよう!

15話 海……といえぱやっぱアレだろう！（後書き）

作者・朱兎 「あとがきっぽいコーナー」

作者 「まずはいつも通り御礼を！風鳴様！ありがとうございます」

朱兎 「目から汗ですか……」

作者 「ほら！いろんなネタを突っ込んでるからさ！」

朱兎 「お前と年代が近いかも知れないってこと？」

作者 「そうともいう……」

朱兎 「でも、いろんな人が見てくれて嬉しうな！」

作者 「おう！ということで！今回は召喚魔法を使ってみました！」

朱兎 「いきなりリヴァイアサンかよ」

作者 「だって海じゃん？」

朱兎 「管理局も見てたんだぜ？」

作者 「度肝を抜いてやったんじゃんw」

朱兎 「目を付けられるだろうが……」

作者 「虚空瞬動でもドラ○ンボールの瞬間移動

でも簡単に逃げられるだろう？」

朱兎「・・・・・・・・・・そういえばそうか」

作者「そうそう！（なのはからは逃げられないけどな）」

朱兎「うーむ、で、プレシアはどうするんだ？」

作者「悩み中」

朱兎「何を？」

作者「最初は助けるつもりだったんだけどさ」

朱兎「ふんふん」

作者「あまりにも壊れすぎててフェイトが可哀想でね」

朱兎「あー、まあアレはなあ」

作者「まあ明日には決めるよ」

朱兎「りょーかい」

作者「ではでは！次回『わんこ？』をお楽しみに！」

朱兎「難しい問題だよなあ・・・・・・・・」

16話 わんこ? いや狼? …… わんこでFAで! (前書き)

はい、ということで16話です。

業務連絡ってわけでもないですけど、もしうちの主人公の
朱兎を自作品で利用したいという方がおられましたら、

一言にでも書いておいていただけたら全然使ってもらっちゃって
問題ないのでこき使っちゃってくださいな。

16話 わんこ? いや狼? …… わんこでFAで!

あの場合から脱出してから1日たった。つまりは翌日ってことだわな
結局俺は今悩んでるわけだ。ん? 何をつて? プレシアを助けるかど
うか

に決まってるじゃん。よく考えたら、俺が記憶してる限りだと、原
作の

プレシアは結構な感じで壊れてたわけだ。しかもかなりので割合で
フェイトを

虐待してるしな。さてここで問題なのは……ぶっちゃけプレシ
アを助ける

意味はあるのか? ってことだ。俺の中ではフェイトとアリシアは

フェイトⅡ助けたい

アリシアⅡ可哀想だし、できれば何とかしたい

こんな感じなわけだ。じゃあプレシアは?

プレシアⅡ……どうでもいい

つまりは無駄な労力は割きたくないぞ……。と。今頃アルフがな
のは達に

フェイトを助けるように言ってるんだらうけど……。俺はどうし
よう……

ぶっちゃけ、アリシアだけ助けりゃいいんじゃない? とか思うんだけ
ども

「朱兎、顔が悪いですよ」

「ちょ、おま！」

「ああ、間違えました」

「何と間違えたのかな!？」

「悪そうな表情をしていますよ？」

「いや、俺に聞かれてもわかんねえから!？」

「はあ……それにしても何を考え込んでいるんですか？」

「んー? ああ、ちょっと悩んでさ」

「どんなことです？」

「実は……」

それから考えていたことをアイリスに話してみた。すると。怒られた。

なんでさ? どうにも、彼女曰く救える手立てがあるのに放置するのは良くないとの事。……かといってすぐに手を出してたらおかしくなる

と思うのは俺だけか?

「それに」

「ん？なにさ？」

「そこまで壊れているのは少しおかしいような気がします」

「なにが？」

「わかりませんか？」

「壊れてるのは娘が死んで、生き返らせるためにだろ？」

「怨霊や魔族・魔具などの影響もあるかもしれませんよ？」

「はい？」

「可能性としては無きにしも非ずです」

ふむ……。でももしそうだったら……。その外的要因を取り除けばおとなしくなるかもしれない……。が、もし自発的なものだったら逆にどうしようもないわけだ
まあどっちにしろ、一度会ってみないことにはどうしようもないわな。

とりあえず場所は……。この間ジュエルシードを渡したときにくつつけた

発信機が旨く起動……。するわけないよねー。次元の狭間だっけ？流石に

電波がとどかねーか。フェイトの気を探して……。お？いた！なんか変な感じが

するけど、明らかに地球上じゃないっつーことはプレシアのところに居る

んだと思う・・・たぶん。意識して更に集中したら・・・うん、よし。はつきり

感じるぞ！これなら飛べる！

「おし、んじゃちょっと行って見るわ」

「私も行きます」

「いやいや、いきなり戦闘とかになったらこまるじゃん？」

「魔族や怨霊だった場合、朱兎一人で対応できるんですか？」

「んーまあ努力と根性で？」

「馬鹿ですか？」

「ひでえ！」

「もういいですから、さっさと行きましょう」

「はいはいわかりましたよ！んじゃしっかり掴まってるよ？」

んーじゃ、転移・・・っと！到着したらうまく話ができりゃいいんだけどなあ

なんか嫌な予感もするけども・・・男は度胸！ってな～

「あなた達何者？どこから入ったのかしら？」

「わほーい、目の前とかないわー」

「やっぱり朱兎は馬鹿なんですね」

「ひどくない！？やっぱりってなにさ！」

「言葉通りです」

「やっぱりひでえ！？」

「無視するのなら、そのまま消えなさい！」

「ちょー！いきなり魔法とか！」

よ！っほ！つと！コレくらい避けられないようじゃあ幻想郷ではや
っていけねえぜ！

まあ、行ったことはないけどな！なんか余裕かm「朱兎、壁になっ
てください」

はい！？っていきなり引っ張って壁にするとかマジ勘弁！

「のあああああ！」

「死になさい！」

「無理矢理壁にするとか、マジでひでえ！　つかこれじゃ避けられねえじゃん！」

「朱兎なら大丈夫です」

「ちょ！　くっそ！　『万難排す戦女神の盾』ファイギス」

「！それは！」

「さすがですね。全くの無傷です」

「あーもう、不幸だー！」

「それでも叫ばねーとやってらんねーつつーの！　ってかなによあの腕輪……」

「えらく禍々しいオーラを発してくれてるじゃないの！」

「朱兎……」

「あー、あの腕輪だよな？」

「ええ、やはり魔族のようですね」

「あ、やっぱり？　でもルーやんさんはもっと清浄な？　感じだったんだけど」

「世界が違うからでしょう。この世界の魔族は人に仇なす存在のようです」

「・・・・・・・・めんどくさ」

「それでも、見てしまった以上は助けるのですよね？」

「・・・・・・・・まーな」

「それでこそ私の朱兎です」

「へーへ、まあさっさとやっちまいますかねえ」

そういうながら『万難排す戦女神の盾』^{アイギス}を『王の財宝』^{ゲートオブバビロン}に戻す。
やーっぱ警戒感バリバリだよなー・・・・・・・・

「その盾は・・・・・・・・あの時に私の魔法を防いだものね」

「あの時・・・・・・・・？あゝフェイトを庇った時のこと？だったらYes
だぜー」

「私の邪魔をしに来たということね・・・・・・・・」

「あー、まあ話をs「消えなさい！」最後まで聞けよなあ・・・・・・・・」

また魔法を使おうとしてきたところへ一言『動くな』って言うて見る。

ん、動きが止まった。いや、流石に『言霊』ことだまって便利だわな、
さてさてー腕輪を引っこ抜きますかー……。おんや？ よっ……。
んっ！……。はっ！
……。あるえ？ なんだこれ？ うごかねえよ？

「朱兎、何をやっているんですか？」

「んあ？ この腕輪を引っこ抜こうと思ってさ」

「……。宿主に寄生しているようですから抜けないと思いますよ
？」

「え？ そうなの？」

「はい、まず浄化をかけてから実体化した魔族を倒さないといけな
いかと」

「あ、マジで？」

「ええ」

「もっと早く教えてくれると嬉しかったかな」

「すみません。何をやりたいたいのかがわからなかったもので」

「さいですか……」

「それでは私が浄化をかけますので、実体化した魔族を倒してくだ
さい」

「へ？浄化したら終わるんじゃないの？」

「いいえ、さっきも倒さないといけないと言いましたよ」

「そーなのかー」

「では行きます」

「あいよー」

そう言ってなんかブツブツいつてるアイリス・・・んじゃ俺は・・・あ、そうだ

この間京谷さんから乖離剣エアをもらったんだったよな。よしよし、試し撃ちを

してみるかな！コレで一気に攻撃力があがるぜ！

「・・・浄化の光を！」

「うおつまぶしっ！」

『キサマラ・・・ナニモノダ』

「ひゃっはー、わかりやすいくらいにわかりやすい！」

「ですね・・・気持ち悪いです」

『モウスコシデ、コノオンナヲアヤツツテ、アノニンギョウノココ

ロヲコワセタモノヲ』

あゝ？こいつ今なんつった？

「・・・・・・・・・・・・・・・・おい、今なんつった」

『ナンドト？』

「今なんつったっていったんだよ！」

『ククク、ニンギョウヲコワストイッタノヨ』

ぷっちーん・・・・・・・・コレは切れちゃってもいいトコだよな？

「おーけーおーけー、よくわかった」

『ソノマエニキサマヲクルワセテヤロウ！』

「無理だな」

『ナニ？』

「てめえじゃ役者不足だっつたんだよ」

『クカカカカ！ホザクカ！』

たったひとつの

シンプルな答えだ……てめえは俺を怒らせた!!!」

やっぱ乖離剣エアはすげえ……魔族だろうが1撃かよ……
コレはそうそう使えないな
危険すぎる……にしてもでっかい穴があいたわな……

「……これは……!あなたは!」

「いよう、お目覚めかい?」

さーてプレシアも目が覚めたみたいだし、尋問……もとい選択を
させますかね……

きっちりといいほうを選んでくれることを祈りながら……やる
としますかー!

16話 わんこ? いや狼? …… わんこでFAで! (後書き)

作者・朱兎 「あとがきっぽいもののコーナー」

作者 「と、いうことで! 超嬉しかったんですよ!」

朱兎 「初っ端からテンションたけーな……」

作者 「おうよ! なんと! 自分がなのはSSを書くきっかけになった

魔法少女リリカルなのは ー転生した主人公は最強の設定を使うー

の作者であるk y o様から感想を頂いたのだ!」

朱兎 「ちょ、マジかよ!」

作者 「マジっす!」

作者・朱兎 「k y o様、感想ありがとうございます! 今後とも精進いたします!」

作者 「だから今回は乖離剣エアを使ってみたわけだ」

朱兎 「京谷さんからのお土産だったよな」

作者 「うん、でも個人で次元震を起こしちゃうのはどうかと思うんだw」

朱兎 「さすがに連発は厳しいな……」

作者「あ、それとそろそろお前のデバイスを出すから」

朱兎「お！やっとか！」

作者「ちゃんと月光閃火様と幻想の庭師様に感謝しろよ？」

朱兎「当然だな！素晴らしいデバイス案を送っていただいたからな」

作者「本当に、皆様の感想が作者の心の栄養となっておりますゆえに！」

朱兎「まあそれでも脳内では他のSSのプロットつーかストーリーを作ってるんだろ？」

作者「それは言わない約束よ？」

朱兎「バーカバーカ」

作者「いいじゃんいいじゃん！創作意欲がさ！なんかさ！」

朱兎「そんな暇があるんだったら、こっちを完結させやがれ！」

作者「うん、それもそうだね」

朱兎「……………大人しいのがキモチワルイ」

作者「ひでえ！？ってことで次回『心』をお楽しみに！」

朱兎「次回も、やあってやるぜ！」

17話 心……移ろいやすく濁り易いもの。ゆえに磨こう己の業で（前書き

今回はプレシアサイドの物語です。

矛盾が無いように書けたらいいんですけども、本編ではありえない事なので

やっぱり難しいです。自分は愛媛なので映画もやってませんし……

・
誰か助言などをぷりーず！

P・S・相変わらず自分のSSの書き方は

ログイン↓次話投稿↓直接書く↓投稿……以上！変えたほうがいいのだろうか……

17話 心……移ろいやすく濁り易いもの。ゆえに磨ごう己の業で

Side プレシア

私は研究者だった。自他共に認める程に優秀であった私は、いつしか上層部からの命令で安全基準を遥かに超える、危険な研究を強要されるようになっていた。あの日もそうだった。

「ねえねえお母さん」

「どうしたのアリシア？」

「今日はお母さんのお仕事を見に行ってもいい？」

「もう……いつも危ないからダメって言うてるでしょう？」

「えー、でもお母さんがいるから大丈夫だよ」

「……しょうがないわねえ」

「やったー！お母さん大好きー！」

いつもとは少し違うやり取り。そこから何かがおかしかったのかも知れない。

それでも当時の私は気付かずに、いつも通りに研究所に出社していた。

そして・・・その日は運命のあの日・・・研究対象だった高圧縮魔導炉の暴走の日だった。

事故が起こった時・・・私はまさかアリシアが巻き込まれているなんて思いもしなかった。

しかし私を待っていたのは・・・私の無事を喜ぶ声と、アリシアの行方不明を告げる声だった。

私は探した。あの時の私は半狂乱になっていたと思う。自らの身体に傷が付くこと

など気にしなかった。そんな事を気にしている暇はなかったのだ。

ただ・・・ただアリシアを

探していた。そして、私を迎えたのは・・・

すでに冷たくなっていた、最愛の娘、アリシアの亡骸だった・・・

私は暫く何も出来なかった・・・仕事も・・・生きていくことさえも・・・

当時の私は、献身的に仕えてくれた使い魔のリニスが居なければ、すぐに死んでいただろう。

それくらい生きる氣力を失っていたのだ。リニスは元々アリシアの飼っていた山猫を

素体としていた。主である私を本当の家族のように支えてくれていた。それでも、茫然自失

状態の私には収入があるわけでもなく。事実、それまでの貯蓄を半分ほどは切り崩して

生活していたのだと思う。そんな時に、私の元に舞い込んできたのがF計画こと

『プロジェクトF・A・T・E』……「使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生の研究」である。

この時の私は『アリシアのクローンを作り上げる』事を目的として参加をした。

研究が軌道に乗り、いくつものよい報告が上がってくるようになった頃だった。

私は、自分の部屋で一つの腕輪を見つけたのだ。それは以前研究していた高圧縮魔導炉の

レプリカともいえるもので、以前発見されたロストログアであった。この腕輪は持ち主の

魔力を圧縮し、大気中から吸収した魔力と混合させ、装着者の魔導士ランクまで引き上げる

というものだった。そのテストデータは凄まじく、Cランクの魔導師が装着後には

Aランクとなり、本来ならば使用できないはずの魔法まで発動できてしまえるというものだった。

そのロストログアを私は……アリシアを発見したときに同時に発見していた。

本来ならば管理局に返還しなければならなかったのだと思う。しかし、そのときの私は少しでもアリシアとのつながりを失いたくなかったのである。そして、私のランクは条件付SS・・・この腕輪を使用すればオーバーSSSにも匹敵するはずだった。

それほどの魔力があれば『死者蘇生の研究』を成功させることが出来るかもしれない。

そう考えた私は、迷い無くその腕輪を装着した・・・

それから私は・・・

傀儡になった・・・

しかし、それでも私には記憶がある。フェイトに辛く当たっていた記憶

アリシアを生き返らせるために、周りの意見を無視して研究を繰り返していた記憶

そして・・・リニスを邪魔者扱いして契約を解除した記憶・・・

それは信じたくない記憶たちだった。ずっと、なにかの映像を見ているような
感覚でまどろんでいるようだった。その頃には、『私』は病魔に冒され先は長くない
ということにも気付いていた。でも、映像を見せられている私にはどうしようもなかった。
何度もこんなまどろみから抜け出そう、抗おうとした。しかし、私には打ち破ることが
出来なかった。そしていつしか……己の死を願うようになっていた……

そんな状態の私に希望が見えた。私の魔法からフェイトを護った少年が居るのだ。

どうにかして彼にフェイトを……娘を託したい……私はこのまま悪役でもいいから
フェイトだけは幸せになってほしい……そんな願いが届いたのだろうか。

彼が……今私の前に立っている……一緒に居る女性がなにかの魔法を使ったようだ。

目が眩み身体の自由が利かなくなる。そして、その場に私が倒れる。
……感覚がある！

信じられなかった……いままで、どんなに抗おうとも、一切の感覚すらなかった私が
こうして身体の感覚を取り戻し、倒れたときの痛みだが、身体の自由を感じることが
できたのだ。

「ひゃっはー、わかりやすいくらいにわかりやすい！」

「ですね……気持ち悪いです」

『モウスコシデ、コノオンナヲアヤツツテ、アノニンギョウノコロヲコワセタモノヲ』

「……………おい、今なんつった」

『ナンド？』

「今なんつったっていったんだよ！」

『ククク、ニンギョウヲコワストイッタノヨ』

会話がしつかりと聞こえる。空気の振動を感じる……………私は……………生きている……………！

さあ、目を開こう！いま起こっていることをしつかりと自らの瞳で見届けよう！

「おいおい……………試すってのは傷にもならねえ撫でることを言うのか？」

これは、私に出来る母としての最後の愛情だから・・・こんな母親
でごめんなさいねフェイト・・・

17話 心……移ろいやすく濁り易いもの。ゆえに磨ごう己の業で（後書き）

作者・朱兎「あーとーがーきー……コーナー！」

作者「と、いうことで今回はプレシアさんのお話でした」

朱兎「……あー、まあなんだ……」

作者「うん……自分で書いてて可哀想になってきちゃってさ」

朱兎「とりあえず病氣って治せるんだよね？」

作者「エリクサーなら余裕なんじゃない？」

朱兎「……まああれだ。とりあえずそういうことで」

作者「そうだな、うまくやっちゃってくれ」

朱兎「りょーかい。んじゃ俺はあっちに……」

作者「あー、まった！」

朱兎「はい？なんだよ」

作者「御礼が終わってないだろ？」

朱兎「は？え？」

作者「またまたk y o様からの感想が！」

朱兎「マジか！？すっげー！」

作者「うん、超嬉しいです」

朱兎「ほんとに嬉しいよな！」

作者「お前をラウンズに引き込むかってさw」

朱兎「お？マジで？いいじゃんたのしそうだしさ」

作者「個人的には、お前が迷惑かけそうなキガスル」

朱兎「なんだとてめえ！」

作者「まあ、冗談は置いといて。k y o様！こんなヤツでよかったら
ご自由にこき使ってやっちゃってください！」

朱兎「こんなヤツですみません・・・あれ？なんで俺が謝るの？」

作者「では次回『逃げ』をお楽しみに！」

朱兎「今回は暗いだけの話ですいませんでしたー！」

18話 逃げてんじゃねえ……やれるだけやってこい！フォローは俺がして

はい、ってことで本当は昨日のうちに上げたかった18話です。

はつきり言って作者はシリアスが苦手です！（ドーン

やっぱりハッピーエンドがいいし、楽しいのがいいじゃないですか。
笑いってのはいいものですよ。ではでは18話をどうぞ

18話 逃げてんじゃねえ……やれるだけやってこい！フォローは俺がして

さて、眼が覚めたプレシアの第一印象は……あれ？結構普通？
やっぱさっきまでの壊れた感じは、あの腕輪のせいだったのか……

・
それにしても魔族を装身具にするとか、マジ信じらんねえ……
まあいいや、とりあえずは考えていた選択肢を言ってみるかな。

「さーて、アンタがプレシア・テストロッサだな？」

「……ええ」

「いろいろ聞きたいことがあるんだが……答えてもらえるか？」

「いいわ……でもその前に一つお願いがあるのだけれど……」

「あ？なんだよ」

「フェイトのことをお願いできないかしら」

「ハア？なに言ってるのさ急に！？」

「私はもう長くないわ……今の私に出来ることは、私が悪役になっても」

フェイトを……私の娘を信頼でk「待った」え？」

「アンタ……いまフェイトを娘つつったよな」

「ええ、フェイトは私の娘よ」

「確かお前さんは、フェイトに人形と言ってなかったか？」

「そうね・・・言っていた記憶はあるわ・・・」

「記憶・・・っつゝ事は、つまりあれもさっきのヤツのせいだったって事か」

「言い訳でしかないけれど、私の意志ではないわ・・・」

「ふむ・・・」

なるほどね・・・それだったら俺個人としても助けることに依存はないな。

って事は・・・だ・・・「私の言ったとおりだったでしょう？」
アイリスか・・・

「やはり魔族に操られていましたね」

「ま、結果的には・・・な」

「ごめんなさいね・・・すべては私のミスが招いた事よ・・・」

「ふーん、それで？」

「え？・・・それは・・・」

「別に俺は謝ってもらいたいわけじゃねえし？ つつーかどうでもいいんだよ」

「！そんな・・・」

「俺が此処に來たのは、アンタに選択肢を与えるためだ。俺からアンタに提示する選択肢は

いまんとこ3つ。いいか、よく聞けよ？

1つ・これは名を変えてフェイトとは関わらないようにどこか違う世界でくらすということ

コレの利点は、管理局には一切報告する必要が無いということだ

2つ・完全に悪役になりきってフェイトを突き放し、自分から離れた後にどこか別の場所で

病気に耐えながら生活するというもの。これはフェイトに最後まで冷たく振舞わないと

いけないのが今のアンタだったら厳しいだろう

3つ・全てを関係者に告白して、己の罪を償い、その後にフェイトとも一緒に暮らす

これの利点は罪を償えば、負われる心配も無いから気兼ねなく普通に生活できるってこと

まあ、この3つだな」

「私は・・・」

「ま、ドレを選んでもアンタの勝手だ。好きにしたらいいさ」

さて……ドレを選ぶのかねえ……一応救済策を考えてはいるけども、1と3を選んだ場合はどうしようもないからな。1を選んだらフェイトとは関わらないって言うてるけど、実際は関われない……が正解だし？3を選んだとしても結局は病気のせいで長くは無いからな……
ただし、2を選んだ場合のみ俺が助けるつもりではある。此処までの感情を取り戻して今までの行動を悔いているんだ、多少の救済はあってもいいしな。その場合のみアリシアも何とかするつもりだ。

「……フェイトには」

「ん？決まったのか？」

「ええ、考えてみたら選択肢はないものね。私はもう長くない、だって私から離れたほうがフェイトにとっていい結果になるわ」

「はいダウト」

「……どういふこと？」

「アンタさー何勝手に人の感情とか決めてるわけ？フェイトがそう望んだのか？」

「それは・・・」

「アンタのそれはな、自己満足って言うんだよ！」

「っそれでも私は！」

「生きてるか？」

「・・・・・・・・・・え？」

「この先も、例え辛い結果になっても生きたいか？」

「あたりまえじゃない！いままで散々フェイトには辛い思いをさせてきたのよ！少しでも

長く一緒にいたいと思うのが当たり前でしょう！」

「まあそうだな」

「だったら！」

「だが、さっきまでのアンタなら拘らなかつただろうよ」

「・・・・・・・・・・そうね、とても後悔しているわ」

「ま、後悔したところで自分の力じゃどうしようもなかつただろうけどな！」

「私は無力だったわ・・・」

「さて、その上で聞くが。どの選択肢を選ぶ？」

「いまさら優しくしてもすぐに別れの時が来る……そうしたらあの子は

余計に悲しむことになるわ……」

「ふむ……で？」

「私は2つ目の選択肢を選ぶわ」

「へー、なんでさ？」

「私の寿命は、もってあと数ヶ月……いいえ、この後に大規模な魔法を使えば

あと数日くらいに縮むでしょう……一度希望を持たせて、またすぐに別れることに

なったら、フェイトをもっと苦しめることになる……」

「だから完全に悪役を演じてフェイトの前から消えようってのか？」

「ええ、そうよ」

「ひでえ母親だなあ」

「っ！私だっはずっと一緒にいたい！に決まってるでしょう！やっ自分を取り戻せたのに

それなのに、娘を抱きしめることさえ出来ないのよ！」

「で、少しでもフェイトの傷が少ないようにする……ってことか」

「他にどうしろというの！ずっと無茶な研究を繰り返してきたおか

げで身体ももう

ぼろぼろで血を吐くこともあるわ！この身体でも時間切れまでは一緒に居られる、

それでもその後はまた一人にさせてしまおうでしょう！それなのに！
「…………ゴホゴフツ！」

あゝあ…………興奮して一気に喋るから血を吐いちゃってまあ…………
・まあアレだ、とりあえずは

考え方がおかしい。なんでこういうやからは人に頼るって事をしらんかね？どう考えても

目の前に居る相手は、自分の想像の範囲外の力を持ってるって事くらいはわかるだろうに。

まあ俺のことなんだけどな？ま、その辺は言わなくてもいいことだけどさ。とりあえず…………

ここでケリをつけねえとな！俺は神じゃねえからすべて上手く行かせる自信なんてない。

それでもやる時はやるさ！こいつあなかなか難しい仕事になりそうだぜ！それに…………

（ちゃんと撮ってるんだろ？ディーヴァ）

（当然ですマスター。マスターとアイリスが魔族を浄化するところからしつかりと

録画済みです）

あ、紹介するのが遅れたな。コイツは俺のデバイスの（デヴァイスじゃねーぜ!？）

ディーヴァ、一応女神って意味の名前なんだわ。待機状態はヘッドホンで、今も首に

かけてるってとこ。なかなか高性能でさーしかも性格もかわいいのよ! んでな? k

（マスター!ちゃんとプレシアとの話を進めてください!）

（はっはっは、照れるな照れるな）

（この映像・・・消しますよ?）

（ごめんなさい!）

時々怖いです。まあそれは置いて、どちらにしてももうすぐフェイトが通信を

送ってくるはずだ。その時にどういう対応するか・・・つまりは最終決戦ってヤツか・・・

「フェイトが負けたようね・・・」

「お、終わったか。それで? どうするんだ?」

「私は悪役なの。それ以上でもそれ以下でもないわ」

「じゃあ」

「ええ、干渉してジュエルシードを回収するわ」

「言っとくけど、やっても無駄だぜ？」

「そうでしょうね・・・私だってアルハザードが無いことくらいはわかってるわ」

「どうしても悪役としてフェイトの枷を無くすつもりか？」

「それ以外にあの子のために出来ることがないのよ・・・」

「まったく・・・よっぽどのアホかヴァカだな」

「魔族から開放してくれたことには礼を言うわ。でも早く此処から出て行ったほうがいいわね」

「管理局が来る・・・か？」

「ええそうよ。フェイトをお願い」

「やれやれ・・・」

そういうと魔法を使い始めたプレシア。あゝあ、ありやそうとう生命力を消費してんぜ？

つとあのまるっこいヤツで向こうの映像が見えてるってことか！気付かなかったw

まーたイイ感じにフェイトに魔法をブチ当ててるしよ・・・つか、もしかしてあそこで

ジュエルシードを転送したのってわざとじゃねーの？管理局にバラすために・・・とか？

「なあ、いまジュエルシードを転送したのってわざとだろ？」

「・・・そうね」

「辛そうだな」

「ゴホッゴホッゴフ！！・・・次元魔法で・・・もう身体が持たないわ・・・」

「ん、管理局が乗り込んできそうだな」

「早く帰りなさい。貴方まで犯罪者になるわよ」

「へっ。管理局ごときにつかまるような間抜けじゃねえよ」

「・・・フェイトをお願いね」

「ばーか、当然だっつーの」

「フェイト・・・こんな母親でごめんなさいね・・・」

「んじゃ俺は消えるぜえ」

「ええ、開放してくれてありがとう」

「じゃーな」

さーてこっからが忙しくなりそうだな。上手いことやらねえと完全に犯罪者って事になっちまうからな。ま、この映像があれば情状酌量の余地はあるってみなされるとは思うけども・・・相手が管理局だからなあ。いまいち信用できねえんだよな。

ま、とりあえずフエイトのところにも行きますかね！

18話 逃げてんじゃねえ……やれるだけやってこい！フォローは俺がして

作者・朱兎「あ！……とがきのコーナー！」

作者「すんませんっしたー！」

朱兎「い、いきなりどうしたんだよ？」

作者「いやーなんていうかさ、シリアスが苦手で上手くかけなくてさ」

朱兎「それはお前が未熟だからだろ」

作者「そうとも言う！」

朱兎「そうとしかいわねえよ！」

作者「何はともあれなのは対フェイト。それからVSプレシアの大舞台が

整った……のかな？」

朱兎「まだだろ……で、結局どうやって助けるんだ？」

作者「ふっふっふ……」

朱兎「お、ちゃんと考えてるって……」

作者「考えとるわけがなからーがあ！」

朱兎「ダメじゃん！」

作者「ダメもなにもなあ、俺はサクッとプレシアを説得して
アリシアも生き返らせようと考えてたのにさ！なんで
お前は説得が上手く出来てないんだよ！」

朱兎「は？俺のせいだよ！」

作者「お前のせいだ！」

朱兎「ふっざけんな！てめえの未熟を人のせいにすんじゃない！」

作者「まあいいや」

朱兎「をい！」

作者「ということで次回『死』をお楽しみに？」

朱兎「今回は短くてスイマセンでした！」

19話 死・・・ふざけんな！アンタにやまだはええんだよ！（前書き）

ということでは19話です。

早くシリアスルートから抜け出たい作者です。

笑いが・・・笑いが足りない！

無理矢理笑いを入れたくなる今日この頃です・・・ではどうぞ

19話 死・・・ふざけんな！アンタにゃまだはええんだよ！

「私のアリシアに・・・近寄らないで！」

「撃てー！」

「うるさい・・・」

「危ない！」

ゴガガアアアアンシン！！

「ぐうああああああ！」

「アリ・・・シア・・・」

おーっと瞬間移動の時にバニシュをかけといてよかったー！なんだよ、出た先がフェイトの

後ろって！ここってアースラの中じゃねえか！って、丁度プレシアがフェイトに話かける

ところか・・・さてどうなることやら・・・

「もうだめね・・・時間が無いわ・・・たった8個のロストロギアではアルハザードにたどり

着けるかはわからないけど。でも、もういいわ。終わりにする。

この子を亡くしてからの

暗鬱な時間を……この子の身代わりの人形を娘扱いするのも・

……聞いていて？

貴方のことよフェイト？せっかくアリシアの記憶をあげたのに、
そっくりなのは見た目だけ

役立たずでちっとも使えない。私のお人形」

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘『アリシア・テストアロツ
サ』を亡くしているの。

彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を超え
る人造生命の生成そして

死者蘇生の秘術。フェイトって名前は、当時彼女の研究に付けら
れた開発コードなの」

「「よく調べたわねえ、そうよ、その通り……だけどダメね、
ちっとも上手く行かなかった……」

作り物の命は、所詮作り物……失ったものの代わりにはならな
いわ……アリシアはもっと

優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままもいったけど、
私の言うことをとてもよく

聞いてくれた……」

「……やめて……」

「「アリシアは……いつでも私に優しくかった……フェイト、や
っぱり貴方はアリシアの偽者よ。」

折角あげたアリシアの記憶もあなたじゃダメだった……」

「やめて……やめてよ！」

「「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形・
・・・・だから貴方は
もういないわ・・・・どこへなりと・・・消えなさい!」」

「お願い! もうやめて!」

「「ふふふふ、いい事を教えてあげるわフェイト。貴方を作り出してからずーっとね

私は貴方が、大嫌いだったのよ!」」

おーおー、また激しい悪役だなあおい。さっきの会話が無かったら、俺でも騙されてる

ところだわ・・・・にしても、こいつはちーとやべえな。流石にこのままの心理状況で戦闘になったら、完全に敵対になっちゃう。・・・・どーすっかなあ・・・・にしても役者だねえまったく

「「私たちの旅を邪魔されたくないの・・・・私たちは旅立つの、忘れられた都アルハザードへ!」」

「まさかっ!」

「この力で旅立って・・・取り戻すのよ！全てを！！！」

「はいそこまで『サイズ・オブ・クロノス時空統べる大神の大鎌』っと、この艦以外の時間
間は

止めさせてもらったぜえ」

「っな！何者だ！」

「やーれやれ、大変なことになってんじやねえの。なあなのちゃん
？」

「ふええ！？しゅうくん！？」

「ご名答！」

さてさて、こっから蝶介入といきますかねえ！

「一体どうやって此処まで入ってこれたんだ！」

「はあ？こんなの楽勝でしょ」

「待ちなさいクロノ。それで、貴方は何者ですか？」

「おっと、申し送れましたね。自分は私立聖祥大附属小学校3年の
橘朱兎というものです。

朱兎とでも呼んでください。リンディ・ハラオウン艦長？」

「っ！私を知っているようですね」

「そりゃあさっきから後ろで見えていましたからね？」

「ばかな！艦内に侵入者の反応はなかった！」

「クロノ！・・・それで、どのような用件なんですか？」

「いやいや、ちょっとそこで茫然自失状態のお嬢さんに用があらましてね？」

「しゅうちゃん・・・フェイトちゃんのお母さんが！」

「大丈夫だよなのちゃん？あれは彼女の本音じゃないからね」

「どういふことかしら？」

「まあちよつといろいろあるんですよ」

「私たちには教えてもらえないのかしら？」

「んー、教えてもいいんですけどね？そのKY君が・・・」

「誰がKYだ！」

「クロノ！まったく・・・いいわ、私がすべての責任を取ります。だから知っている事を

教えてもらえないかしら」

「んーま、いいでしょ。とりあえず、さっきのプレシアの態度は演技ですよ」

「なにを根拠にそんな事をいつてんだい！」

「黙れ犬、邪魔だ」

「きつさまー！」

「『黙れ、そして動くな』わざわざ俺の手を煩わせるな」

「しゅうくん！演技って・・・どうということなの？」

おっと、俺の『言霊』でピクリとも動けなくなったアルフは無視で
すかw

さすが未来の魔王・・・そこに痺れる憧れる！ってなwまあいいけど

307

「ま、先に言っておくと、プレシアの寿命は持って後数日」

「っ！そんな！母さん！」

「こらこら、先走るなっつーの。ちゃんと話は最後まで聞こうな？」

「あ・・・ごめん・・・」

「さてお立会い。ここに俺のデバイスがあるわけだが、この中にプレシアとの会話記録がある。」

「見たいかな？」

「頼んだら見せてもらえるのかしら？」

「それなりの対価を払ってもらいますけどね？」

「しゅうくん！」

「ごめんねなのちゃん。これは絶対に必要なんだ」

「貴方の言う対価とは・・・一体なに？」

「なーに、簡単ですよ。『プレシア及びフェイトの減刑』を対価にして欲しいんです」

「それは・・・」

「そんなことが出来るわけがないだろう！」

「うるせえな・・・お前もその犬同様に固まってみるか？KYやロウ」

「きさm「わかりました」艦長！」

「私に出来る限りの便宜を図ることを約束します」

「へえ・・・話がわかる相手ってのは好きだよ」

「では、詳しく教えてもらえるんですね？」

「いいよ。んじゃ映せディーヴァ」

『了解しました。マスター』

そこから俺とプレシアの会話の上映会が始まったわけだが、なんつか恥ずかしいね！

っていうか最初の魔族との戦いの乖離剣エアを使ったあたりで周りから結構見られてる

きがするのは気のせいじゃないよな？そりゃ個人で次元震を起こしたのはアレかもしれない

けんどもよ？たまには気兼ねなく大技をぶっ放したくなるじゃん？え？無い？

H A H A H A！キンスンナって……さて続き続き……

……あーまあこうなることはわかってたけどさ？

なんでフェイトだけじゃなくてなのはやリンディさんまで泣いてるわけ？

んで？そのKY君と淫獣はどうするつもりなのかね？

「さて、これで俺とプレシアの話は最後まで見せたわけだけど」

「君が個人で次元震を起こした事実については後で聞かせてもらおう」

「やなこった。で、だ。こっからどうしたいフェイト？」

「わたしは……母さんを助けたい！」

「ま、そういうだろうとは思ってたけどな？なのちゃんは？」

「もちろんフェイトちゃんのお母さんを助ける！！！」

「そんなに力まずにさあ・・・あーあー、わかったから・・・で？
リンディさんはどうします？」

「プレシアは・・・次元震を起こしてどうするつもりなのかしら」
「悪役として、次元の狭間に消滅して幕を引くつもりなんじゃねえ
の？」

「っ！そんなのは認められません！」

「ここで俺が介入するなんて思ってないだろうしさ？そもそもこう
やって時間を止めないと

話をする暇すらなかったわけだし」

「それも気になるところだけど、今はそれどころじゃないわね」

「さっすがリンディさん、しっかり状況を把握して最善を尽くそう
とするなんて

素晴らしいね！そこに痺れる憧れる！かもしれない？」

「それで・・・あなたも手を貸してくれるのかしら？」

「俺？俺はプレシアが2番目の選択肢を選んだ時から介入するつもり
だぜ？」

「なら・・・あなたにもプレシアの確保をお願いしてもいいかしら？」

「愚問だな。リンディさんに頼まれなくても、そこで俺のことを捨てられた子犬のような

目で見ている2人の少女を裏切れるわけがなからうて」

「だったら！」

「つてことで俺はひとまず先にプレシアのところに行って来るわ」

「待って！お願い、わたしも連れて行って！」

「フエイトちゃん！」

「じゃあねえな・・・ま、そのKY君となのちゃんは後から合流しなよ『解除』っと」

さして、犬っころがほえ始める前にさっさと行きますかねーっとその前に

「あ、リンディさん」

「なにかしら？」

「マジで減刑等よろしくお願いしますよ？出来ないとか言ったら、俺が管理局を潰しに行きますんで」

「それは・・・脅し？」

「いんや？事実を述べてるだけですよ？」

「出来る限りはやってみるわ。あの映像を見た以上は私にも出来る
ことがあるはずですよ」

「ま、頼みますわ。んじゃー行くかーしっかり掴まってるよーフェ
イト？」

「ん・・・」

おお・・・一生懸命に抱きついちゃって・・・可愛いじゃない
か！

まあそれは置いといて・・・さーとさっさと行ってさっさと助
けますかねえ！

リンディさんには話を通したし、これで回復させりゃーちゃんと親
子として生活できるだろ？

アリシアも復活させてやれば仲の良い姉妹ってことで幸せになれる
かもしれねえしな！

あ、でもある意味フラグ潰しちやっただけども、フェイトって管
理局に入るよな？

入らなかつたら原作が！本筋は改変しないように動いてたのに！な
んてこったー！絶望した！

19話 死・・・ふざけんな！アンタにやまだはええんだよ！（後書き）

作者・朱兎 「あとがき？ つぽいコーナー」

作者 「ひゃっほー！」

朱兎 「うお！ どうしたいきなり！」

作者 「感想が！ 感想が！」

朱兎 「感想がどうしたんだよ？」

作者 「秋風様から感想がー！ー！」

朱兎 「まじか！？ すげえ！」

作者 「作者的にはk y o様と秋風様のSSをリスペクトしてるからな！」

朱兎 「だよな、更新があったら速攻読んでもんな？」

作者 「あたぼうよ！ もう速攻だぜ！」

朱兎 「自分のSSを書いてる途中でも読んでもんな？」

作者 「H A H A H A！」

朱兎 「笑うところか？」

作者「そのほかにも十十幽鬼十十様とユニコーン様からも感想を頂いてるのだ!」

朱兎「こんな拙いSSに・・・」

作者「みなさま、本当にありがとうございます!」

朱兎「それにしても本格的に介入する気になったんだな」

作者「んむ、情状酌量の余地は十分にあると思うんだよ」

朱兎「だよな。ってことで俺は京谷さんのところにラウンズとして使ってもらえるように話にいつてくるわ」

作者「おー? あんまり迷惑かけんなよ?」

朱兎「わーってるよ。んじゃいくぜー」

作者「ちよっと待った」

朱兎「ん? なんだよ」

作者「これ、愛媛県産のみかん10kgもってけ」

朱兎「あいよー」

作者「んじゃよろしく言っというてな」

朱兎「おうよ! んじゃ行ってくるわ!」

作者「朱兎が居なくなつたところで！ それでは次回
『神』をお楽しみに！」

天照「わらわの出番がないのじゃ・・・」

20話 神？あんなどアホウに祈ったって無駄だっつーの！（前書き）

はい！ってことで滑り込みセーフな20話です！

・・・まだ0時超えてないよね？

ここからは本格改変になって行きます・・・が

うまく書けるかわからないので生暖かい目で見てくださいね？

それでは20話をドゾ！

20話 神？あんなどアホウに祈ったって無駄だったの！

「プレシア・テストロッサ」

「っ！？」

「終わりですよ。次元震は私が抑えています。駆動部はじき封印、貴方の元には執務官が向かっています……忘れられし都アルハザード

そしてそこに眠る秘術は存在するかすら曖昧な、ただの伝説です！」

「っ！違うわ……アルハザードへの道は、次元の狭間にある！時間と空間が砕かれた時

その狭間に滑落していく輝き、道は……確かにそこにあるの……」

「クスッ……ずいぶんと分の悪い賭けだわ……あなたはそこに行つて、体なにをするの？失った時間と、犯した過ちを取り戻すの？」

「そうよ……私は取り戻す……私とアリシアの……過去と未来を！」

取り戻すの……こんなはずじゃなかった……世界の全てを！」

「世界はいつだって……こんなはずじゃないことばかりだよ！ずっと昔から……いつだって、誰だってそうなんだ！こんなはずじゃない

現実から・・・逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ
だけど、自分の勝手な哀しみに、無関係な人間まで巻き込んでい
い権利は

「どこの誰にもありはしない！」

やーれやれ・・・流石にこの名ゼリフは言わせてやろうかねえ・・・
結構前から俺は到着していたんだけどな？なのはとフェイトのフラ
グを
潰すのもアレだから、フェイトの案内で先になんかもの凄く消えそ
うな
小さな魔力を探しに行ってたわけなんだけど。んで、フェイトだ
けを
先に行かせて、プレシアの近くで待機してたわけだ。さて、上
手く
話を誘導できるもんかね？たぶん無理だとは思うんだけどなあ・・・
・

「ゴホッゴフエ・・・」

「！母さん・・・」

「・・・なにをしにきたの・・・消えなさい・・・もう
貴方に用は無いわ」

「あなたに言いたい事があって来ました」

「・・・・・・・・」

「わたしは・・・・わたしは、『アリシア・テストロッサ』じゃありません。

あなたが作った、ただの人形なのかもしれません・・・・・・
どわたしは

『フェイト・テストロッサ』は、あなたに産み出してもらって、
育ててもらったあなたの娘です！」

「クッ・フフフ・・アハハハハハハ・・・・・だから何？今更貴
方を娘と思えと言うの？」

いやいやいや、アンタ普通に娘って思ってるでしょうが！残念！
っかー突っ込めてえ！このシリアス空間をぶち壊してえ！

「あなたが、それを望むなら・・・・それを望むなら・・・・わたしは、世界中の誰からも

どんな出来事からも、あなたを護る。わたしが、あなたの娘だからじゃない！

あなたが、わたしの母さんだから！」

アレだね！いい子だよね！も、ほーんといい子過ぎるよね！
ほんとに助けてやらないと人としてダメだよね！

「・・・くだらないわ」

「・・・っ!？」

ガキーン！キュアアアアアアア

「まずい！」

「艦長！ダメです、庭園が崩れます！戻ってください！この規模
の崩壊なら

次元断層は起こりませんから！クロノ君たちも脱出して！崩壊ま
で、もう時間が無いの！」

「了解した。フェイト・テストロッサ！フェイト！」

「私は向かう・・・アルハザードへ・・・そして全てを取り戻す
！過去も未来も、そして幸福も！」

「っあ！母さん！」

「フェイト！」

つと、まづいまづい。そろそろ行くかね！

「一緒に逝きましようアリシア……今度はもう……離れないわ……」

「だが断る！ ハアアアアッ！」

「朱兔！」

「
・
・
・
・
あなたは！
」

「ハーツハツハッハ！フイーツシュ！！！！これぞ天剣技の鋼糸の技だー！」

「っ！崩れるよ！」

「捉えたぜえ！フイト！俺に掴まれ！」

おい、フェイトもアルフも掴まったな！プレシアとアリシアもしっかり鋼糸で確保した！

よし！瞬間移動だ！転移先は……アースラブリッジ！いつかえええええ！！！！

なんとか無事にあの場にいた人間は転送できたわけだが……な
ーんでこのKY君まで

くつついてきてるのかな？ かな？ まあどうでもいいけど……さて
さて、此処からはきっちり

と説得&SEKKYOUをしないといけないわけだ。ま、プレシア
の嘘も全部

ばれてるわけだから、説得は簡単だろうけどな？

「ん……ここは……？」

「いよう、目が覚めたかい？」

「貴方は……っ！ ここは！」

「せいかーい、ここh「母さん！」 フェイト落ち着けー」

「プレシア・テストロッサ！ 時空管理法違反及び管理局艦船への攻
撃容疑で

貴方を逮捕します！」

「全くこのKYヤロウが……『全員動くな！』まったく。無駄な労力を使わせんじゃねえよ」

「つく！君は！一体なにをしたんだ！」

「あゝあゝ？」

「しゅくん落ち着いて……」

「大丈夫だよ？なのちゃん。俺はしっかり落ち着いてるからね？」

「とりあえず、動けるようにしてもらえないかしら？」

「しゃあねえな……ただし！俺の邪魔をするヤツ及び話を邪魔するヤツには

容赦しねえ。そこんどこヨロシク」

「わかりました。総員手出しはしないように」

「艦長！」

「黙りなさいクロノ！これは艦長命令です！」

「つく！」

っへ、KY小僧さまあW まあこっからはしっかりと話をしないと
いけないから

邪魔されると困るしな。さーて、上手く説得できるかね？

「なぜ邪魔をしたの……」

「ん？なにがさ？」

「私はあのままアルハザードへ！」

「はいダウト。っていうかさ？俺とアンタの会話ログっつーか映像は、もう全員に

見せた後だから」

「！ということなの！？」

「なにが？あ、もしかしてさ、俺が付けてるこのヘッドホンがデバイスって

気付いてなかった？」

「デバイスっ！？」

『はじめましてMi'sプレシア。私はマスターのデバイスのデヴァと申します』

「……そう、私は貴方の手の上で踊らされていたのね？」

「いんや？実際問題アンタがフェイトを突き放して、自分でもないと思ってる

アルハザードへ行くとか言って虚数空間へ落ちるのは、流石に俺でも止めるぜ？」

「貴方達も映像を見たのなら私の命が長くないのは知っているでしょう？」

「っ母さん！」

「安心しろって、ちゃんと二人とも減刑を確約させたからよ！
破った時は、俺が管理局を潰すって断言してやったしな！」

「……ふ、貴方なら本当にやれそうね」

「はっ、余裕だろ？」

「それでもっゴホッゴホゴホッゴフツ！」

「母さん！」

「つとー、とりあえず此処じゃ何だから、医務室にでも行こうや？」

「そうですね……では、エイミィはここで、私は一緒に行きます」

「んだなー、俺とプレシア・アリシア・フェイト・アルフ・なのち
ゃん・リンディさんくらいか？」

「僕も行くにきまっているだろう！」

「……ああ、お前も来るの？」

「当たり前だ！」

「んじゃKY君と淫獣も追加ってことか……」

「いい加減にKYと呼ぶのはやめろ！ 僕の名前はクロノ・ハラオウ
ンだ！」

「僕はユーノ・スクライアなんだけど……」

がなる野郎共を無視して医務室へ移動する。にしてもアリシアもプレシアもさっさと治して

やんないとなあ。かといってエリクサーも……っと、待てよ？
この間京谷さんが

いいものを持ってきてくれたよな？ たしか……『アスクレピオ
スの杖』だっけ？

おし！ 使ってみようじゃないか！

「さーて、んじゃ全員そこに並べー」

「何をはじめのかしら？」

「しゅうくんどうしたの？」

「まあいいから並んで並んで……んじゃ行くぞー、出ろ『アス
クレピオスの杖』」

一瞬全員を光が包む……。すると全員の傷が嘘のように消えてい
た。さすが京谷さんだな！

んでもって……。ん、よしプレシアの病気も治ってるな。あとは

アリシアか！

「おーっし、全員治ったなー？」

「これは・・・！？」

「どうよプレシア？アンタの病気も治ってるはずだぜ？」

「それもロストログアかい？」

「は？コレはロストログアじゃなくて宝具っつーんだよ」

「宝具？なにそれ？」

「宝具っつーのはな？英雄や神が生前に築き上げた伝説の象徴で、彼らの武装を基に伝説を形にした『物質化した奇跡』なんだよ」

「神の武装って・・・」

「んでもってこの『アスクレピオスの杖』っていうのは、医神アスクレピオスが

持っていた蛇が巻きついた杖でな？どんな怪我や病気でも一瞬で治すことが

出来るわけだ」

「はああああ！？」

「だからプレシアの病気も治ってるはずだぞ？あ、落ちた体力は戻らんから

「これ飲んどけ」

といいつつエリクサーを渡してみる。アスクレピオスの杖とエリクサーの

二段構えなら死角はない！・・・はずだ？さて、アリシア、アリシア・・・っと

「さてお立会い、野郎連中は後ろ見とけー」

「なにを始めるつもりなのかしら？」

「朱兎・・・」

「ん？何をもってアリシアを生き返らせるんだろ？」

「っな！そんなことが出来るわけが！」

「ありえないってか？あのなあ『ありえない、なんてことはありえない』んだよ！」

「そんな・・・」

さてさて、そんなこんなでアリシアを蘇生させるようにはなったんだけども・・・どの方法でやるか・・・それが問題だよな。魔法・道具・召喚・・・どれがいいかなあ？

別にどの方法でも俺としてはいいんだが。部屋の中だから召喚はま

ずいよな？

んじや道具か魔法だよな？あ、そういえば時の庭園のなかで消えそうなほどに

小さな魔力の塊を持ってきたんだけど、こいつも一緒に回復させるかねえ。

まったく・・・それにしても俺に言われるまで、アリシアを下から見上げてた

ユーノは100%淫獣確定だな！さて！さっさと気合を入れて復活させますかー！

20話 神？あんなどアホウに祈ったって無駄だったの！（後書き）

作者・朱兎「あとがけ！のコーナー！」

作者「まずは御礼から！K Y O様！幻想の庭師様！んんん（・▽・）様

感想ありがとうございます！これからも頑張ります！」

朱兎「だな！頑張るぜ！」

作者「はい！ってことで大幅に改編しちゃったわけですけども！」

朱兎「二人とも助けちゃったもんな」

作者「でも・・・方法をどうするのかが決まらない・・・」

朱兎「それはお前が未熟だからだろ？」

作者「そんなこと言ったってさあ・・・」

朱兎「どっちにしたって、もう改変は始まっちゃったんだからさ」

作者「やっぱアレイズか？でもなあ・・・」

朱兎「聞けよ！」

作者「そうそう、あの消えそうな魔力の塊ってなんだ？」

朱兎「んあ？あれは・・・内緒だよ」

作者「内緒？おいおいお前さん」

朱兎「はぁ？なんだよ」

作者「俺に隠し事が出来るとでも思ってるのか？」

朱兎「おーい照姉」

作者「すみませんっした！」

天照「なんじゃ？呼んだかや？」

朱兎「いや？作者がなんか用だって」

作者「うえ！？いや！言っていないですから！」

天照「む？最近わらわの出番が無いではないかえ？」

作者「そ、それはですね・・・@@；」

朱兎「さて、作者が照姉に捕まってる間に・・・っと

次回！『???』をお楽しみに・・・ってなんだこれ？」

作者「あー！こら勝手に！」

天照「こりゃ、待ちや？まだ話は終わっておらぬぞえ？」

作者「アッー！！！」

朱兎「作者の字が汚すぎて読めねえ・・・みんなごめん・・・」

21話 燃え上がっれゝ燃え上がっるゝ燃え尽きっるゝ以下略！（前書き）

更新が遅くなりました！

微妙に体調不良です？

それでも書いてます…

本人がSS依存症っぽいのですよ…

それでは21話をどうぞ！

21話 燃え上がっく燃え上がっく燃え尽きっく以下略！

「あーリンディさんや？」

「なにかしら？」

「そんなにがん見されると恥ずかしいんですけども。」

「あら、気にしなくてもいいのよ？」

「いやいや、実はボクはシャイなので？」

「あらあら、そうだったの？」

「さあ？」

「生き返らせることが出来るって言うのは本当なの！？」

「こらこら、落ち着けー…」

「落ち着けるわけがないでしょう！」

「はあ…とりあえずリンディさん、どうか広い場所でもないですかね？」

「そうねえ…だったら訓練室なんてどうかしら？艦内とはいえなかなか広いわよ？」

「へー、ならそこにするかな…ってことで移動するぞー」

そういいながらリンディさんに先を促して医務室から出る。真っ先について来る淫獣…

お前は別に来なくてもいいんだよ！蹴ってやろうか…ツチ、避けやがった！

まあいいや…後で絞めるけどな！とりあえずはアリシアの入ったカプセルを

浮遊させながらの移動…誰かシートでもかけてあげて！丸見えですから！

赤くなりつつも見てんじゃねえぞKY君！エイミーさんにチクツてやろうか…

まあそんなこんなでほぼ無言での移動だったんだけど…空気が重い！

誰か！誰かなんとかしてくれ！この空気に俺が耐えられなくなる前に！

「着いたわよ」

「ナイスタイミンツ！！」

「どうしたの？」

「いえ、なんでもないです！」

いえない……空気に耐えられなかったなんて言えないっ！

「さーて、野郎共はでてけー」

「君を監視s「スケベヤロウ…」失礼するっ！」

「淫獣も出て行っとけよ」

「当たり前だよっ！」

「はぁ…やれやれ、ここで使うのも本当は面倒なんだけどもさ？
アリシアは可哀想だし、プレシアの哀しみもわかるからさー
本当にしょうがなくなんだぜ？リンディさんもだけど、絶対に
全員誰にも言うなよ？」

「本当にアリシアを生き返らせることができるの！？」

「あー？余裕っしょ？」

「そんな…：死者の蘇生が本当に出来るわけが…！」

「甘めえゼリンディさん？この世ってーのは不可解なことや不可思議なこと
ばっかりなのさ。坊やも言ってただろ？『世界はいつだって…こ
んなはずじゃ
ないことばかりだよ』ってさ」

「それでも！」

「まあまあ、こんなに長年方法を探し続けてた母親への神様からの

プレゼント

って考えておきなよ。ま、神様つつつても女神限定だけだな！」

「お願い！アリシアを…アリシアを！…！」

「りょーかいっと、まあ見てろ。俺に不可能はない！」

「しゅうくんかっこいい……／／／」

「朱兎……」

さーてさて、とりあえずまずはカプセルから出して、シーツの上にも寝かせますかねえ

流石にカプセル内で蘇生したら溺れるぜ？

っと…準備が出来たようだな。んじゃやりますかー！

「んじゃま、エイミィさんが録画しててもまずいから結界を張って…と。」

さて、全員離れとけよ？いくぜえ！」

と言いつつ手首を切って血をアリシアにかけていく…ま、よく言う触媒ってやつだな

俺の血は魔力の塊みたいなものだから、最高の触媒つつーか餌だろうさ！実際には詠唱も

触媒もいらなただけども、確実性を持たせたいからな！失敗したら笑えねえ：

「古の盟約により・我が呼びかけに答えよ・汝気高き炎なり・我が血を糧に現れよ

来やがれ！『フェニックス』！！！！」

クエエエエエエエエ！！！！

アリシアにかけた血が魔方陣になって、そこからフェニックスが躍り出た。

いやゝいつ見ても綺麗だよなゝ：つとと、さっさと血を止めないと眩暈がしてきた：

エリクサー飲んでこ：

「よし！よく来てくれたなフェニックス！その子に『転生の炎』を使ってくれるか？」

クエエエエエエ！

フェニックスが一声啼いた時に、その瞳から一粒の涙が落ちた。その涙がアリシアに触れた瞬間、アリシアが炎に包まれた：いやゝこのエフェクトって何回見ても素晴らしい

ですねー初めて見ると火葬かと思うけども…？って、もしかして…？

「アリシアー！！！」

「ちょー！落ち着けて！大丈夫だから！！！」

案の定でした！っかー説明するの忘れてたー！！！！俺もあせってたのか！？

「心配いらねーからさ！黙ってみてろって！」

「ア・アリシア…」

お！終わったっばいな。フェニックスがこっちにチラッと視線を向けてから消えてったからな。と、いうことはアリシアももう大丈夫なはずだけども？

「さーて、終わったっばいなー。っと！プレシアあと全員『動くなよ？』」

「っな！どうして！？」

「あのなあ…長い間全く身体を使ってないんだから回復させないとどうしようもないワケよ？わかる？」

「それは！…でも…」

「ま、心配するねい！俺に任せときな」

さてさて、ここはエリクサーだろ。病気や怪我ってワケじゃないから『アスクレピオスの杖』はあんまり効果が無いかもしれないしな…でも…待てよ？あの方法を試してみるか？よく覚えてないけども…

たしか…小周天から大周天がどうとかって言ってたよな？

小周天は、腕と腕の間で気を回転させる方法で、大周天は…ええいめんどくせえ！結局は頭から足の裏までキツチリ回せばいいんだろ？

んじゃ気を全力まで高めて…ついでに魔力と剋力も混ぜてみようこれで手になんか玉を持ってるような感覚だったっけ？で、その玉を具現化する

くらいに気とかを練り上げていくんだったよな？………案外難しいな。

Side リンディ

「甘めえぜリンディさん？この世ってーのは不可解なことや不可思

議なこと

ばっかりなのさ。坊やも言ってただろ？『世界はいつだって…こんなはずじゃ

ないことばかりだよ』ってさ」

目の前の彼がそう言ってから、その後に起こったことは本当に信じ難いことだった。

部屋全てを覆う結界の強度もありえないものだったし、召喚魔法というのは私が

知っている物は虫を使役するものだったが、あんな幻獣を使役できる人間なんて

聞いたことも無かった。一体彼は何者なのか？つい数日前に言われた『マジで減刑等

よろしく願いますよ？出来ないとか言ったら、俺が管理局を潰しに行きますんで』

という言葉も、あの魔力の大きさだけでも十分に真実味がある。彼の機嫌を損ねたら、

このアースラさえも簡単に沈むようなきがする…そんな事を考えていた時だった。

彼が信じられないほどの魔力を放出し始めたのは…

「一体なにをするつもりなのかしら？」

「ちっと黙っててくれない？」

「娘の身体を心配するのは親として当然でしょう！」

「だったらそこでフェイトの心配でもしとけー、こっちは忙しいんだから」

「単に目をつぶって魔力を放出してるようにしか見えないんだだけで？」

「っつーかマジで集中したいから黙ってくれないかなあ？」

「いい加減何をしているのか教えてもらえないかしら？」

「そうね、アリシアを治してくれるんじゃないかな」 「黙れ」 っ！

「リンディさんもフェイトちゃんのお母さんも、しゅうくんを信じて待ってたほうが

いいと思うよ？」

「ん…朱兎は嘘つかない」

「あなた達…」

あまりにありえない事に動揺してしまったみたいね…それに、彼を信用するには

情報が少なすぎるといいうのもあるし。もう少し彼の情報が欲しいのだけれど…っ！

あれは…何なの！？

Sideリンディ SideOut

やれやれ…やっとな凝縮できてきたぞ…と。…と？…お？？…
はい？？？

コレは一体なんだろう？俺には固形物に見えるんだけど…あるえ
？？？

確か龍狼伝ではただの気の塊になってたよな？なんで？魔力と剋力
を混ぜたから！？

なんで俺の手と手の間に握りこぶし大の碧い宝石っぽいものが浮か
んでるのかと！

なんで結晶化！？っていうかコレ…内包魔力が……凄く大きいで
す……

っていうかなんで2個？俺は1個の玉をイメージしてたのに？

…まあいいや、コレをアリシアの魂の埋め込んだら十分補助にはな
るだろう。

さて、コレを心霊医療の技術を利用して……と。寝ている女の
子の胸の中に

手が入っていく……シュールだ……って！欲情とかそんなのはない
からな！？

勘違いすんなよ！あくまで医療行為ですから！！さて、あとは状態
を霊視しておけば

いいかな？うまく全身に気が行き渡ったら成功だけでも……よし！
大丈夫だな！

「さーて、これでOKだ。もう大丈夫だぜー」

「アリシアー!!」

「橘君? いい加減に拘束を解いてもらえないかしら?」

あ、言霊で縛ってたの忘れてた……けど、まあいいか。先にアリシアを起こそう

「まあまちなよ。先にアリシアを起こして診察してからだからさ」

「さっき大丈夫っていわなかったかしら?」

「言ったよ? 身体と魂の固着はしっかりしてるし、身体的な欠損や萎縮なんかないし?」

「……なんで疑問系なのかな?」

「それはねー記憶が大丈夫かどうかは、起きてからじゃないと調べようが無いからだよ」

「アリシア! アリシアーツ!!!」

「じゃかーしい! さっきから落ち着けつつってんだろーが!」

はあ……やれやれ、さっさと起こして診察しますかねえ……

えーっと確か起こす魔法は…

「さて…『ザメハ』ってこれでいいはず？」

「ふええ！？なのはに聞かれてもわかんないよ！？」

「……………んう」

「お、起きたっぽいな」

「んー？ここはあ？」

「おはようアリシア」

「おはよう？おにいちゃんだあれ？」

「アリシアー！」

「あ、おかあさん…」

「ストップだ！さてアリシア、まず聞きたいんだけど。いま君は何歳だ？」

「えー？わたしは5歳だよー？」

「ふむ…プレシア、相違は？」

「……………ないわ」

「では次の質問だ。君が覚えていることは？」

「おぼえてること？」

「そう、君はいま起きたね？じゃあ寝る前には何をしていたのかな？」

「んーとねー、おかあさんのお仕事を見にいったのー」

「なるほど…間違いないな？プレシア」

「ええ…ないわ……」

「おかあさんどーしたのー？なんでないてるのー？」

「大丈夫よ…なんでもないのよ…！」

「んー？」

「さて、感動の再会というわけだ、…っと『全解除』これでこの部屋の結果も

すべて解除できたからな。俺たちは外に出ていよう」

「待って！」

「ん？なんだよ？」

「ありがとう…」

「フ…感謝されるいわれはないさ。俺の自己満足でやっただけのこ

とだ」

「ええ…それでも…御礼を言わせて頂戴」

「…好きにすればいいさ。…ああそうだ」

「なに？」

「ちゃんとフェイトも紹介しとけよ？」

「わかっているわ…本当にありがとう」

「じゃあな、空白を埋めるためにも、しっかりと話すことだ」

「ええ」

あーしんど…あとは今後の話し合いをすることくらいかな？もう面倒なのは

勘弁な…流石に飽きた！なんでこの世界ってこんな危険なことばっかなんだろうなあ

明らかに9歳児には厳しすぎるだろう？なのはにしてもフェイトにしてもさ…

どう見てもまだ自分の判断だけで全てを決めるのは早すぎると思うぞ？

俺は中の人ですでに30オーバーなわけだから大丈夫だけでもさ？え？何故に30オーバーかって？いま9歳なんだから前が21歳以上だったら30オーバー

だろうさ。まあそれは置いといて…いいから置いとけっ！で！ブリッジに来たわけだが…

みんなの視線が痛いです……主にリンディさんのだけでもっ！あとはクロノが睨んでくる

くらいか？あ、エイミィさんもこっち見てるな…

「なぜ彼女達をあ部屋で自由にさせているんだ！」

「あー？危険があるとしても言いたいのか？」

「今回の騒動は、すべて彼女達の起こしたものでしょう！」

「ハア？何いつてんのお前？」

「彼女達が個人の利益のみで動かなければ今回の事件は起きなかったんだ！」

「ふーん、それで？」

「彼女達を拘束させてもらう！僕は執務官として見逃せない！」

「黙れ小僧！お前に彼女達の不幸を癒せたのか！お前にアリシアが救えたのか！」

「そんなことは関係ない！僕は執務官としての職務を遂行するだけだ！」

「関係ないだと！」

「邪魔をするなら君も拘束させてもらう！」

「やってみろ小僧：貴様が1歩でも動いた瞬間この船を沈めてくれる」

「っな！脅すつもりか！」

「脅す？貴様ごとき矮小な存在をなぜ脅す必要がある？俺は単に事実を述べているだけだ」

「きっさm「やめなさいクロノ！」艦長！」

「リンディ・ハラオウン：俺を止める気か？」

「いいえ、約束しましたしね？」

「フ……話のわかる相手に助かるよ」

「艦長！」

「黙りなさいクロノ。貴方では彼にはかなわないわ」

「っな！どうしてですか！」

「簡単なことだ……」

「なにい！」

「坊やだからさ」

やれやれ：なんにしてもこれで一件落着かな？　もういい加減終わりにしてくれよな：

クロノはまだ納得できてないみたいだけれども、どうでもいいしな！
さて…これで

帰れるよな？あ、まだリンディさんと話さないといけないのか……

[illegible]

21話 燃え上がっ！燃え上がっ！燃え尽きっ！以下略！（後書き）

作者・朱兎 「あとがき？のコーナー！」

作者 「まずは謝罪から！更新が遅れて申し訳ありませんでした！」

朱兎 「泊りがけで友人？の家に行ってたんだよな」

作者 「んむ！ちょっとイロイロあったんだよ」

朱兎 「しらんがな。さっさと更新しろよ」

作者 「ひどい！ひどいわあ！？」

朱兎 「キモイわ！」

作者 「冗談は置いといて、御礼の時間です！」

朱兎 「だな！」

作者 「k y o様・幻想の庭師様・んんん（・▽・）様・イセリア様・
マイペース様・

秋風様・蒼様・鴨川板様・津堂祐華様！特にk y o様と秋風
様は複数回の感想

誠にありがとうございます！」

朱兎 「みなさま本当にありがとうございます！」

作者 「そろそろ無印が終わりそうな予感です！」

朱兎「さっさと完結させろや！」

作者「難しいんだよ!？」

朱兎「関係ないね！」

作者「……よし、お前は直人さんに鍛えなおしてもらって来い」

朱兎「はぁ? そんな無理にきまってんだろうが」

作者「だが答えは聞いてない! 『転送』!!!」

朱兎「なっ! 覚えてろよー!」

作者「この間に続いて、朱兎が居なくなったところで予告を!

次回『……』やっぱり次回は内緒にします!」

???「しゅーおにいちゃん?」

作者「おっと! いま居ないから、また後でねーってことで次回の更新を

お楽しみに! それでは!」

P・S・ 作者「秋風様、うちの朱兎なんかでよかったら、本編・番外編・あとがきの

どこでもいいので雑用にでも使ってやってください!」

22話 エピロー……ぐ？（前書き）

更新が遅くなってすみませんでした。イロイロありまして

気が付いたら投稿を始めて1ヶ月がたちました。

時がたつのは早いもので……カウンターが回るのも早いもので…

1ヶ月の時点での報告ですー

PV…586, 698アクセス ユニーク…53, 122人……

すげえ……

見てくださっている皆様方に感謝感謝でございます！では本編をどうぞ？

22話 エピロー……ぐ？

あれからいろいろな事があった…結局時空理局は俺との約束を守らなかった。

プレシアは虚数空間に落ちて死亡したことにされ、アリシアも死亡のままの扱いだった。

フェイトは減刑はされたが、その罪の殆どはプレシアのせいにされた。

そのうえ、罪を償ったあとは管理局で働かされるそうだ。

なのはは、あの時の俺とアースラの艦長であるリンディさんの約束を見ていた為、

口封じのように、遠方の事件の解決をメインに使われている。

俺には我慢が出来なかった。傲慢な管理局も……それを正そうとしないクズ共も…

そして俺は……管理局と敵対した……

いま俺の目の前には、なのはとフェイトがいる。管理局へ攻撃に来た俺へと

ぶつけるための捨て駒としてなのはを…そして同じく逆らうことが出来ないフェイトを……

腐ってやがる！……俺は必ず管理局を潰してやる！！！！

「しゅうくん！もうやめて！」

「朱兎！」

「なのちゃん…フェイト……ごめん、もう無理なんだ」

「そんなことないよ！まだ間に合うから！」

「まだ大丈夫っ」

「ありがとう二人とも……でも、もう止まらないんだ！」

「だったら…だったらなのはがしゅうくんを止める！」

「わたしもなのはを手伝うよ」

「そっか……なら俺は二人を倒さないといけない……」

「しゅうくん！」

「許してくれとは言わない……だけど、俺は管理局を潰す！そして、管理局の独裁を…

哀しみの連鎖を終わらせる！」

「しゅうくん……」

『何をしている高町なのは、フェイト・ハラオウン！さっさとヤツを倒したまえ！』

「なのは！時間がない！」

「フェイトちゃん……」

「くっ！いつまでも二人に責任を擦り付けて！まだわからないのかあんだ達は！」

『高町なのは、フェイト・ハラOWN説得は無駄だ。彼はすでに錯乱している』

「ふざけるな！アンタは一体なんなんだ！？」

『我々が管理局だ。さあ早く彼を倒したまえ』

「しゅうくんごめんなさい……」

「ごめん朱兎……」

「ふざけやがって…また戦争がしたいのか！？アンタ達はあ……！」

そして俺となのは、フェイトによる戦いが始まった……出来れば二人を傷つきたくはなかったが。殺らなければ殺られる……二人とも非殺傷設定を切っていた。直撃を

喰らえば確実に墜ちるだろう……そう、これは殺し合い…戦争なんだ……！！

という、夢を見た。

やあ久しぶり、朱兎だよ。今俺は自宅に帰ってきているんだ。でもね？そろそろきついんだ。

え？何がかって？よく聞いてくれたね。実は今、正座をさせられているんだ。

アリシアを生き返らせた事……つまりは死者蘇生なわけだけど、完全に禁止事項だった

らしいんだよね。おかげで今は照姉からSEKKYOU中なわけだよ。いい加減さ……

許してくれてもいいと思うんだよ？流石に正座で3時間とかしんどいからね？

いくら身体能力がチートでも足は痺れるんだよ？っていうかもう感覚がないんだよ？

今立ってって言われても多分立てないよ？

「よいか？軽々しく魂を根の国から戻してはいかんのじゃ」

「あー、ごめんなさい」

「天地の理が崩れてしまうじゃろ？……まったく、もうしないようにの」

「りょーかいです……」

「うむ、ならばわから言うことは以上じゃ」

「すみませんでした……」

お……終わった……もうゴールしてもいいよね……

「それで、その助けた娘とやらはどんな者なのかえ？」

「あ、そういえばまだ紹介してなかったな。まあ後でつれてくるよ」

「いまはどこかに居るのかや？」

「ん？隣に空き家があっただろ？そこに引っ越してきてるはずだけ
ど」

「ふむ…ならば今から連れてくるがよい」

「は？今から？それはさすがにk『ピンポーン』わーお奇遇ねっ」

「む？客かの？」

「たぶん今言ってたとなr「おにいちちゃん！」ゲフツ！！！」

アリシア…急に横からタックルをされたら、流石に俺でも耐えられ
ないよ……

っていうか、プレシアも止めろよ……

「この娘が汝が助けたという娘かや？」

「あー、そうそうアリシアくこのお姉ちゃんにご挨拶は？」

「ありしあ・てすたろっさです！」

「……………」

「ん？どうしたのさ照姉？」

妙に赤くなってフルフルしてっけど？

「どーしたのー？」

「朱兎よ…」

「な・なにさ？」

「ぐっじょぶじゃ！」

なにそのサムズアップは！？どこで覚えたのさ！？

「なんで微妙な英語なんだよ…まあいいけど。この子が『アリシア・リユート』ね」

「そして私の娘よ」

「む？」

「あープレシア…とりあえずいきなり全力で横からタックルするのはやめさせる…」

「あら、貴方なら大丈夫でしょう？」

「あのダメージだったら俺以外なら逝けるぞ！？」

「大丈夫よ。貴方以外には今のところ被害は出ていないから」

「俺限定！？」

さてさて、とりあえずはひと段落ついたわけだ。まずは近況報告をしようか。

俺が特許を取ってから急激に資産が増えたわけだけでも……弊害もあつたわけだ。

なにかというと、まあぶっちゃけ近所のやつかみ？小さな安アパートに住んでたからな。

俺は平気なんだけど、母さんが結構ストレスを受けててさ……いろいろ言われて

たっぽいわ。俺が学校に行ってる間とか、外出してる間にさ。ほかにも、絶縁してた

母さんの家族が急に近寄ってきたり、いなくなってた父親っぽいヤツが家に来て見たり、

ドコの誰かもわからないような親戚が尋ねてきたり。またうちの母さんも人がいい

もんだからちゃんと部屋に上げちゃうわけよ。悪意があるヤツなんかはアイリスと

照姉が対処してくれてたみたいだけどさ……

ってことでアースラから帰って早々に引越しました！場所は翠屋の近くの一軒家ですよ……と。

なんか資産が順調に増えてて逆に怖いわけで。ってことで人外魔境な翠屋の近くに

引っ越したわけよ（笑）母さんも翠屋でウェイトレスをやってることだしな！

……迷惑をかけてないかが……いや、考えるのはやめておこう……この間会った時に

士郎さんがなにも言ってなかったからたぶん大丈夫だろ……う。うん……心配だけどな？

まあそれは置いておいて、その家の隣にもそこそいい家が空き家

になってたんだ。

で、その家にプレシアがアリシアを連れて引っ越してきたわけだ。まあその前に俺が

いろいろとツテを頼って……まあ士郎さんとか月村家の方々とかに頼んだわけだけでも、

プレシアとアリシアに海鳴での戸籍を作成したわけだ。で、『テストタロッサ』だと

ちよつとまずいから改名してもらいました。それが『リユート』ってわけ。

だから今は『プレシア・リユート』と『アリシア・リユート』なわけだ。

フェイト？フェイトはなぜか原作どおりにミッドに行っちゃったさ。

まあ大幅な減刑を確約させといたからすぐにこっちに来れると思うけどね。でもこれで

原作を大幅に改変しちゃったなーとか思ってたらさ、歴史の修正力とでも言うのかな？

なんか結局フェイトはリンディさんのところに養女になる事になってました。

保護観察処分ってやつかな。フェイトもプレシアも納得してるみたいだから問題はない

……と思うんだけどね。いつでも会いに来れるからな。

俺個人の近況としては、最近は図書館に籠ってる感じ。医学書とかの専門書を読み漁ってます。

この前の時に結局原因を調べられなかったからさ、ちよつと勉強しておこうと思ってるね。

前の人生の時に医大生だったから結構知識はあったわけけども、まだまだ未熟だって

思い知ったんだよね。だから一生懸命勉強中です。

あ、あとはやてとも友達になったよ。やっぱり原作通り図書館に通い詰めなんだね。

ほぼ毎日のようにいるもん。俺は当然、影分身を学校に行かせてるから大丈夫だけどね！

ってことでついこの前本をとってあげたことで知り合ってたね。そこから一緒に翠屋に

シュークリームを食べに行ったりしたんだ。そういえばはやての家にも行ったよ。

嚴重に封印されてるっぽく見える本が闇の書だね。あれのせいではやてが歩けない

わけだ……完全に封印してやろうかとも一瞬考えたけど、いろいろまずいからな（笑）

そういえばこの間、海鳴市で妙な魔力を感じたんだ。日付を確認したら6月3日。

うん。あれだ。闇の書が起動したわけだね。俺がはやての家に行ったのが6月1日……

ギリギリだったのか！ってことは……だ。つまりはA・Sにも介入確定ですね？

はあ……ま、無印では暴れられなかったし？ヴォルケنز相手だったらもつと

熱い戦いができるだろ！ある意味楽しみだぜ！！！！

22話 エピロー……ぐ？（後書き）

作者「あとがきこゝな」

作者「つてことで朱兎がそろそろ帰ってくると思うので一人でやってまゝす」

アリシア「ねーねー、おにいちゃんはある？」

作者「おっと、どしたの急に？」

アリシア「んーとね、お母さんがあいさつしてきなさいってー」

作者「そっかー、もうそろそろ朱兎も帰ってくると思うからね」

アリシア「ん！じゃーまってる」

作者「おうちには帰らなくてもいいのかな？」

アリシア「んう？」

作者「ぐはっ！そのこてつと首をかしげながらの上目使いはっ！」

アリシア「どしたのー？」

作者「落ち着け…Coolだ！Coolになるんだ！」

朱兎「アホかー！」

作者「ゲフウツ！」

アリシア「あ！おにいちゃん！」

朱兎「ほらアリシア、ここは危険だからお家で待っていてくれるかな？」

アリシア「はあい」

朱兎「んで？なにをとち狂ってるんだダメ人間」

作者「ってか、いきなりシャイニングウィザードはひどいと思うんだよ！？」

朱兎「お前が悪い！」

作者「なんでさ！？」

朱兎「まあそんなどうでもいいことは置いといて」

作者「おいとかれた！？」

朱兎「直人さんと秋風様に会ってきたぜ！」

作者「おおお！どうだったどうだった！？」

朱兎「かつこよかったぜ！なんていうのかな…大人の雰囲気っていのかな」

作者「おー！さすがだなあ……」

朱兎「あ、それから番外編のことは考えておくってさ」

作者「マジか！？やべえ……蝶嬉しい！！！」

朱兎「あ、それから直人さんがこっちに遊びにきたいって

作者「あ、それは大歓迎だね！」

朱兎「だな！んじゃ俺は直人さんにもらった『クラウド技全集』の練習してくる！」

作者「あ、あー行っちゃった……まあいいや。とりあえず出演依頼とかこんなネタ

を使って欲しいとかは常時受け付けております！ぜひぜひよろしくお願いします！

それでは次回は多分ステータスとかになると思います。ではでは！」

キャラシートっぽいもの(前書き)

今更ながらキャラシートっぽいものを投下してみます。

変更もあるかもしれませんが……？

キャラシートっぽいもの

主人公

名前 .. 橘 たちばな 朱兎 しゅう

身長 .. 135 cm (8歳現在)

体重 .. 28 kg (8歳現在)

誕生日 .. 10月29日

所属学校 .. 私立聖祥大附属中学3年生

好きなもの .. 獄辛や極甘など極端 理論 自分の意思がしっかりした相手

嫌いなもの .. 曖昧な味 空気が読めない人間

筋力	..	EX
敏捷性	..	A+
耐久値	..	A+
魔力	..	EX
霊力	..	EX
到力	..	EX
妖力	..	EX
神力	..	EX
魅力	..	EX

幸運 ..E一

1・黄金聖闘士^{ゴールドセイント}を凌駕する身体能力

なおこの特性には、一度受けた技は二度は効かない

自身の身体能力だけで拳速が光速を超えるなど物理法則を無視したものである

2・某ゲームの『王の財宝』が使用可能

（この世界のすべての武器防具宝具宝飾具が内蔵されている。

この武器には神・魔・聖などの名前が付く物も含まれる

例「聖剣デュランダル・魔剣ティルフィング・神剣^{あまのむらぐものつるぎ}天叢雲剣」等

3・死という概念を消去したことにより、完全な不死

4・ミームルの泉水の効果により、この世のすべての知識を有する

5・天照の勾玉により霊的・魔法的防御がEXランクである

以下は願いにより付加されたもの

1・記憶の保護（一切の記憶を失うことが無くなる）

2・記憶の修復（水津樹 周治としての記憶を失わずに転生させる）

3・力の類の極大化（魔力・霊力・気力・神力・妖力・剋力・魅力

が全てEXランクである)

4・FINAL FANTASYの召喚獣を召喚できる(シリーズ
全て)

5・全ての宝具の真名開放可能

6・古今東西のありとあらゆる武術を使用可能(武器の種類問わず)

7・周治が記憶している作品(漫画・アニメ・ゲーム・小説等)の
武術・魔術・技術使用可能

8・使い魔かそれに順ずるなにかが欲しい(アルテミスが常に傍に
いることになった要因)

9・アンサートーカー答えを出す者の能力の付与

10・周治が選択したアイテムを限界数圧縮して『ゲートオブバビロン王の財宝』に収納
(限界数とは255個である)

周治が選択したアイテムの内訳

エリクサー・ラストエリクサー・コテージ・フルポーション・フル
エーテル

万能薬・弾丸等銃火器の備品・オリハルコン・ヒビイロカネ日緋色金・ミスリル
スリースターズ(FF6)・ダイヤバンダ(FF7)・マスター
マテリア(魔法・コマンド・召喚)

デバイス

名前…ディーバ

待機状態…ヘッドホン

セットアップ時…ヘッドセット+オプションとして正12面体のビットが多数

特徴…歌姫の名前に恥じず、持ち主の音声及び脳波を増幅・感応しビットを操る。

ヘッドセット部にはマイクが付いており、どんなに雑音が激しくても持ち主の

音声のみを拾うことが出来る。またヘッドギア部にはコアが2つあり

並列演算処理及び数キロ先から砂粒一つまで正確に把握できるほどのセンサー

と持ち主の周囲2キロまでのどんな微かな動きも見逃さないほどの情報収集

能力を持っている。またビットを己のストレージ内で製造及び保管しているために

ストレージデバイスとして使用することは出来ない。

ビットにはバイオコア及び超高出力魔力炉とディーバのコピーの簡易AIが

搭載されており単独行動をさせることも可能。

個別にアブソーブ・チャージャー・システムを搭載すること

により、光・熱・魔力を

吸収しほぼ持ち主からの魔力供給を必要としない。またビットを集合させて盾を作ると

相手の魔法を受け止め吸収することも可能である。

キャラシートっぽいもの（後書き）

作者・朱兎 「あとがきっぽいかもしれないコーナー」

作者 「うんあれだ!」

朱兎 「は?」

作者 「お前チートすぎ!」

朱兎 「お前のせいじゃん!」?

作者 「とりあえず、お客様です!」

朱兎 「無視かよっ!」

直人 「よ、この間ぶりだな朱兎」

朱兎 「あ!直人さん!」

作者 「はい、無理言ってきたいただきました!」

直人 「いやいやそこまで無理じゃなかったからな」

朱兎 「本当にすいません。こんなダメ作者で……」

作者 「ほんとわがままなお願いしちゃってすみません」

直人 「ははは、まあうちの作者の身体が持てばいいけどな」

朱兎「ほらみろ！お前が変なお願いするから！」

作者「いや、ほんとすみません……」

直人「でも本当にすごいチートだな。デバイスまで常識外だろう？」

朱兎「ですね。自分でも恐ろしいものを作ってしまった……とか思いました」

作者「本当はもっと機能をふや「黙れ」はいすいません」

直人「そういえばA'sに入ったんだな」

朱兎「はい、やっと無印が終わりました！」

作者「なんとか終わらせることが出来まして……」

直人「ん？満足してないみたいだな？」

朱兎「あー、コイツは自重してないだけです」

作者「いやいや、お前がフラグ乱立してるのがさ」

朱兎「は？いつそんなことしたんだよ？」

直人「…………気付いてないのか？」

作者「気付いてないんですよ……」

朱兎「?????」

作者・直人「はぁ……………」

「???」「主?主?主!」

朱兎「あれ?この声って」

直人「おっと、マリカが探しているみたいだからそろそろ帰るよ」

作者「あ、秋風様にご無理をいって申し訳ありませんって言つてください!」

直人「了解した」

朱兎「あ、これお土産です!もってってください!スリースターズとダイヤバングルを合成して

マテリアを付けられるようになったものとマスターマテリア3種のセットを4人分です!」

直人「あ、ああ…………使うかどうかはわからないけどな」

作者「もし使えたら使ってやってください。それを装備してたら使用魔力がどんな魔法でも1に

なる上にFF7の魔法が使えるとかいうロストログイアクラスのアクセサリですから（笑）」

朱兎「やっぱりみんなが怪我とかしたら辛いですから…………」

直人「…………そうだな、じゃあもらっていくよ」

朱兎「はい！これからも頑張ってくださいね！応援してますから！」

作者「今日はありがとうございました！」

直人「それじゃあな」

直人転移中……

朱兎「やっぱ直人さんはカッコイイな……」

作者「だなあ……お前もあんなふうになれるように頑張れよ？」

朱兎「おう！ま、お前次第だけだな！」

作者「H A H A H A！」

朱兎「なんで微妙な片言なんだよ……」

作者「まあまあ、それではまた次回！」

朱兎「お楽しみに！」

23話 おっしゃー！A，s じっくりぜえ！（前書き）

ってことでA，sに突入しました！

いける限り書き続けるつもりなので見捨てないでやってください！

それでは本編をどうぞ！

23話 おっしゃー！A，s いくぜえ！

ん？あれは……すずかとはやてか？ってことは…A，s 開始か？
えつと今日は12月2日………わーすーれーてーたー！！！！え！
？ってことは

もう蒐集も開始しちゃってるわけ！？管理局の魔導師から魔力を蒐集しちゃってる

わけ！？あいたたたたた………介入時期逃したー！！！！

「そっかぁ 同い年なんだー」

「うん、時々ここでみかけてたんよお？あぁ、同い年くらいの子やあつて」

「あ、実はわたしも」

「「ふふっ」」

「えと、わたし月村すずか」

「すずかちゃん…八神はやています」

「はやてちゃん…」

「ひらがなではやて…変な名前やろ？」

「そんなことないよ！綺麗な名前だと思う」

「ありがとう」

「そうだな、俺も綺麗な名前だと思うぞ？」

「「朱兎君！」」

「よ、二人とも元気か？」

「あれ？朱兎君もはやてちゃんの事知ってるの？」

「おー」

「まえになあ、ここでナンパされたんよ」

「朱兎君！？」

「ちょっとまって…お前はいつもそうやって話をめんどくさくするんだから……」

「でも、今日のすずかちゃんとおんなじやあ？うちが本を取ろうとしとるときに

助けてくれたんよお」

「そうなんだー。朱兎君も教えてくれたらよかったのに」

「あー、まあなんだ。タイミングがな？」

「うちのことを独占したかったんとちゃうん？」

「お前もいちいちかき混ぜんな！っつーか帰らなくていいのか？」

「ああ、ほやなあ。そろそろ戻らなあかなあ」

「だったらさっさと行こうぜ？俺が押してってやつから」

「あ、わたしが押したいな」

「ん？そか？だったらすずかに任せるか」

「うん！」

あー、このほのぼのした空気がいいわー……この二人の組み合わせはある意味至高だね！

いや癒し的な意味でだよ？このゆったりとした空気がまたなんとも……

「ありがとおすずかちゃん。ここでええよお」

「うん、それじゃあ」

「お話してくれておおきに、ありがとうなあ」

「俺にはなにも言わんのかい」

「朱兎君はいつものことやろお？」

「まーな…あー、シャルさんどーも」

「こんにちは、はやてちゃん帰りましょう？」

「そやなあ。そしたら朱兎君、すずかちゃんまたなあ？」

「ああ、またな」

「うん、またねはやてちゃん！」

さーて、今夜にもなのはV S ヴィータがあるんだな……どうするか……
まあアレだな。その時になってから考えたほうがいいよな！どうせ
考えてたって

どうしようもないんだからさ。なんかでも言ってたしな『考えるな、
感じろ！』ってさ！

ま、なるようになるだろ！さてさて、夜まで研究でもしてようかな
……

つと、今結界が張られたな？ってことは今から始まるってことだな
……

よし、行くか！とりあえずなのはとヴィータに見つからないように！

「んっ…」

『It comes.』

「っ！……っん！………っあ！」

『Homing bullet.』

「くうっ！うううう………ああ！」

「テートリヒシュラークッ！」

ドガアアアアアッバゴオオオオンンン！！！！

「あああああ！」

あっちゃー………フッ飛ばされちまったか………どないしょー………

「くふっうう…レイジングハート！お願い！」

『Standby, ready, setup…』

おー変身シーンっつーのはアレか？問答無用で時間が止まるのか？

律儀に相手が待ってくれてるけども……

『Schwalbefliegen.』

「フッ！」

おー！ナイスショットー！パンヤーとでも言うべきか？

「おらあああああああああああああ！」

「いきなり襲い掛かれる覚えはないんだけど！どこの子？いったいなんでこんなことするの！」

いやいや理由があるからやってんでしようよ……しかも戦闘中に聞くことじゃなくね？

あいかわらずなのは理屈が通じない子だなあ……（汗

「教えてくれなきゃ！わからないってばあ！！！」

「っあ……っうあ！」

ドコオオオンンッ！

「このやろおおお！！！」

『Flash Move. … Shooting Mode.』

「話を…『Divine』聞いてっばあー！『Buster.』

ダキュウウウウウウー！！！！！！

「っ！……っあ！」

あーあ……帽子が逝ったか……ヴィータが切れるなあ……そろそろ出るか？

ジャキイイイン

「グラーフアイゼン！カートリッジ・ロード！」

『Explosion.』

ガキイイイイン！

『Raketenform.』

「ふ、ふええ！？」

「ラケーテン……！！！！……ううおおおおお！！！！！！」

「くうっ！……っああ！」

「ハンマー！！！！！！」

「あああああああつ」

ドガシヤアアアアアアアアアンツ！

「ケホケホッ……ゴホッ……」

「でえええええええええ
いいいい！！！」

Protection.

「ぶっちぬけええええええ！！！」

Jawohl.

ガガガガガガガガアアアアアア！！！！

「残念だけど……無理だね
『万難排す戦女神の盾』」
アイギス

アイギス

「つな！誰だてめーは！」

「しゅうくん！」

「やれやれ、人に名前を尋ねる時は自分から名乗るものじゃないのかね？」

「つく！だまれーっ！」

「まったく……出ろ『アスクレピオスの杖』そして癒せ」

「にゃあ!?!」

「そろそろ来るか……私の出番は終わりのようだ。ではな」

「なにい!」

『マスター 転移します』

「じゃあね、なのちゃん」

「ふええ!?!」

さて、あんまり介入しすぎるのもアレだから此処からは隠れてみて
いようか

「邪魔がはいったけど……くらえ!」

ガキイイイイイイイン!

「ごめんなのは……遅くなった」

「ユーノ君?」

「仲間っか!」

『Scythe Form.』

「……………友達だ！」

いやゝあれだね！やっぱフェイトのフラグを叩き潰すのもアレだもんな！

このシーンも好きなんだよなゝ一応なのは完全回復させておいたから問題はないだろ。

ま、淫獣がいるから回復もいらなかったかも知れないけどな？問題はレイハさんの損傷か？

でもコレを基点としてカートリッジシステムを導入するからなあ……ま、いいか！

後は……シャルがなのはからリンカーコアを抜き出すのを阻止するくらいか？

っと！その前にフェイトを護らないといけないな……流石に淫獣が追加した程度じゃ

ヴォルケンズの3人を相手にするのは厳しいだろうからな！さーて楽しくなってきたぜえ！

23話 おっしゃー！A's じっくりぜえ！（後書き）

作者・朱兎 「あとがきだー！」

作者 「なかなか厳しい状況だね」

朱兎 「まー、ザファイラが出てきたら出るぜ！」

作者 「うーむ」

朱兎 「なのはのリンカーコアを盗らせるわけにはいかないからな！」

作者 「やっぱお前ってフラグ乱立してるよな…」

朱兎 「はあ？なんのことだってばよ！？」

作者 「ま、いいさ」

朱兎 「とりあえず、はさっさと続きを書けよな！」

作者 「んむ！んじゃ今回はさっさと終わらせるか」

朱兎 「って！短くないか！？」

作者 「だいじょうぶだいじょうぶ！」

朱兎 「そうかあ？」

作者 「あ、あと鈴木 健様の質問の『フェイトが管理局に入ったの

は、同じ性がダメだったから?」

というのですね、朱兎・プレシア・リンディさんで話し合
いをした時に、プレシアが生きて

いないという状況にしたほうが穏便に話が進むということで
各人納得した上での選択です。

で、結局はリンディさんの養女ってことで落ち着きました。
フェイト本人は外部協力者である

なのはを護る為に執務官を目指したようです。やっぱり友達
っていいですねえ」

朱兎「そういやーそんな話し合いもしたなあ」

作者「だから隣に引っ越してきたんだろうが……」

朱兎「はっはっは!」

作者「まあいいや…灰色の野良猫様・神崎はやて様・鈴木 健様!
感想をありがとうございます!」

朱兎「出来る限り頑張って逝かせますので!」

作者「です…って逝くの!?!」

朱兎「当たり前っしょ」

作者「おおう……と、とりあえず次回をお楽しみに!」

朱兎「次回は格闘戦だぜ!」

22. 5話 いまさら閑話? (前書き)

はい、ということで! 23話のあとなのに22. 5話を投下してみました!

なぜ割り込み投稿をしないのかというと、割り込みだと更新があったように

見えないために、気付いてもらえない可能性がある……つとことなのです。

まあそんなのはどうでもいいことですよね?

では、閑話ですが、どうぞ!

22. 5話 いまさら閑話？

「さーて、お前の整備もしないといけないなあ？なディーヴァ」

『ええ、そうしてもらえると嬉しいです』

「やっぱデュアルコアにして半分をユニゾンにしないか？」

『それでもかまいませんけれど……』

「ん？なにか問題があるか？」

『ユニゾンの身体が出来たら、私はいらないんじゃないでしょうか？』

「ばーか、んなわけないだろ？お前は俺の大事な相棒だよ」

『マスター……』

はい、ってことでね！初っ端からこんな会話ですいませんね。

実を言うとコイツを作ったのはいいんだけど、今のままじゃ処理能力が若干弱いんだよね。

俺が搭載した機能のせいってのはあるんだけど……コイツも、もっと上を目指してるからさ

だったらいつそのことユニゾンとインテリジェンスのデュアルコアにしたらどうだろう？

ってことで……ちょっと改良をしてみようと思ってね。

たしか原作では、はやてが管理局と協力してリインフォース？を作ったはず。

……だから俺にも作れるだろう。と思ったら案の定出来ました。
あとは人格の投射だけの状態で保管してあったんだ。だから最後の
詰めはディーヴァ次第
だったわけなんだ。あ、あと勘違いすんなよな！別に直人さんのと
ころのマリカさんとか
京谷さんのところのフィオネさんがうらやましかったわけじゃない
んだからね！

「どうかな？この素体なら俺との相性は100%オーバー間違いな
いからさ」

『……それがマスターのためになるのなら』

「俺のためになるかならないかじゃないんだよ。ディーヴァはどう
したいんだ？」

『私は……私はマスターのお役に立ちたいです』

「それは」

『もっとマスターに必要とされたいんです！』

「……わかった。じゃあ記憶の転写を開始するぞ？」

『はい。でも、デュアルっていうことは、こちらの機能も……』

「心配すんなって。ユニゾンとインテリジェンスの両方の意識が統
合するようにリンクさせるからさ」

『っ！はいっ！』

「さて、じゃあやるぞ？」

『お願いします』

さーさて、じゃあやりますかー！ここをこうして……っど、ここはこうだから……

少年作業中……………

ってことで出来たわけだ！いくら俺が作ったからってあんまり趣味全開にするのも

どうかなーって思ったからさ。ユニゾンの見た目は普通だぜ？

髪の毛の長さ…腰まであるロング

髪の色…淡い栗色

瞳の色…薄い青

身長…155cm

体重・3サイズは秘密の方向で！……だがEランクだとだけ言っておこう！

外見年齢…17歳ってとこかな

な、普通だろ？え？普通じゃない？いやいや、この世界の女性に比べたら普通だって！

だって髪の色だけでもピンクとか水色とかさ？色素的に不思議じゃね？……まあいいや、
そしてそしてー！拘ったのが声！声がまたイイ感じなんだよ！CV…島本須美って感じでさ！
こうね……「おじさま」って言われたい感じなわけよ！え？わからない？それはいかんなあ
お答えしよう！そう……クラ○ス・ド・カリ○ストロな声なわけだよ！しかも性格も温厚で
献身的でさ！……はやく起きないかな？

「ん………」

「お、目が覚めたか？」

「あ……マスター？」

「おはようディーヴァ」

「おはようございます。マスター」

ダメだ……満開の笑顔ってわけじゃなくて、ふわっとほころんだような笑顔なのに癒される……
あれだね……五右衛門が『可憐だ……』って言ったのも納得できるよね！

「さて、そこにある服をきてから隣の研究室に来るようにね」

「あ、はい」

流石に全裸にシーツだけの女の子を連れて研究なんて出来ませんよ？どこぞの変態でもあるまいし。

ま……この間見つけた魔力の塊でも解析しましょうかねえ。微妙に意思の欠片があるっぽかったから拾ってきて保護してるんだけど……どうやったらいいもんかね？

「マスター？」

「お、来たか。どう？服はきつくない？あと身体は動きにくいとかない？」

「服は問題ないです。身体は少し違和感がありますけど……」

「けど？」

「すぐに慣れることができそうです。あと、慣れたら服は自分で生成できそうですよ？」

「そっか、それは良かった。ま、慣れるまではちゃんと服着ところかな？」

「はい」

「ところでさ、この魔力の塊を増幅っつーか回復？させるのはどう

すればいいと思う？」

「それは……この間保護したのですか？」

「そ、俺が魔力を流し込んだら消し飛びそうだな」

「そうですね……あ、だったらこの間作った魔力核を入れてみたらどうですか？」

「ん？ そんなものつくったっけ？」

「アリシアさんに使用した宝石ですよ」

「あーなるほど！ それならいいかも！」

「少しはお役に立てましたか？」

「バッチリさ！ 俺はあれの存在を忘れてたしな」

そーかそーか！ アレがあったか！ よしよし……んじゃ入れてみるか！
それにしても、この笑顔は結構アレだね。癒し効果抜群だね！

「さて……んじゃ入れるぞー」

「はい……」

「ん？ どうしたんだよ。そんなに緊張して」

「なにかあったらマスターを護らないといけませんもの」

「心配いらねーって！ディーヴァはそこで見ててくれればいいからさ」

「ですが……」

「あとさ、あんまり硬い喋り方はやめてくれると嬉しいかな」

「それは……マスターがそう言うのなら、出来る限りなおしますね」

「ああ、よろしくな。んじゃいくぜえ」

つと、さて…どうなることやら？

結果発表くくえーつと……なんだろう？なんていえるのか？

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ？

『俺が魔力の塊の中に魔力核？を落としたら、俺の目でも捉えられないほどのスピードで

魔力核が消えた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが俺も何があったのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…幻術とか超スピードとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつとありえないものの片鱗を味わったぜ……って感じ？

見た目はただの魔力の塊のはずなのに、目の前で固形物を飲み込んだのか？

……コイツが危険なものだったら、俺が責任を持って消し飛ばしてやる！

コイツはいま無指向性の魔力核を取り込んで、形を取り始めている……来やがれ！

悪意を感じた瞬間にぶっ潰してやんよ！

………って、あるえ？

「……ん……」

「なあデューヴァ……」

「どうしたんですか？ マスター」

「俺には女性に見えるんだが？」

「私にも女性に見えますよ？」

「……ここは……ああ……あなたが私を助けてくれたんですね」

「はい？ いやゝ助けたっていうか、単に魔力の塊に魔力核を放り込んだだけなんだけど」

「あれがなければ、私は時の庭園と共に消えていましたから」

「はぁ……そうっすか」

「私の名前は「すとーっぷ」え？」

「とりあえず服を着ろや」

「あ、ごめんなさい。すぐに生成します」

「魔力は大丈夫なのかよ？」

「あの魔力核の魔力だけで、私が実体化した状態で10年はいられますから」

「ハア？ なんだそれ……」

「非常に強力な魔力の塊を作っていたのですね……マスター」

「はっはっは……ないわぁ………」

それからその女性と適当に会話しつつ、母さんになんて話そうか考えつつこれからのことを

考えていたんだ。でもなぁ……どう考えてもっていうか、何度考えてもはやてを絶望の淵に

叩き込みやがるあの猫どもはなんとかしないといけないよな。あと

なのはのリンカーコアの
蒐集も止めないといけない。かといってあんまり介入しすぎるとカ
ートリッジシステムとか
みたいなデバイスの強化や本人たちの強化に繋がらなくなる……本
当に危険だと判断した時
以外には介入は控えるべきかね……まあ仲間も増えたことだし、や
ってやるしかねえけどな！
さーて！サクツつとA' S介入を始めますかー！！！！

22. 5話 いまさら閑話? (後書き)

作者・朱兎 「あとがきかもしれないコーナー?」

作者 「ということで閑話だったわけですから!」

朱兎 「書く順番を間違えてるよな?」

作者 「はっはっは! キンスンナって!」

朱兎 「単に急遽思いついただけだろ?」

作者 「な・なんのことかな?」

朱兎 「しかも別の話を考えてて書くのがおそくなったんだよな?」

作者 「いやいやいや、気のせいだって!」

朱兎 「大丈夫だって! 別に怒ってないからさ」

作者 「へ? そうなの?」

朱兎 「ああ、だってもう罰が届いてるからな」

作者 「はい? って……ぬおおお! ?」

朱兎 「『万難排す戦女神の盾』^{アイギス} これはマリカさんのクリスタルダガ
ーだな」

作者「ちょ！おま！」

朱兎「ほーら気合入れて避けろよー」

作者「ぬお！はっ！ほっ！」

朱兎「おー結構避けんじゃん」

作者「はっはっはっは！って！ぬおわああああ！」

朱兎「あゝあ……結局当たってるし」

ディーヴァ「あの……マスター？」

朱兎「ん？ああ、ディーヴァか」

ディーヴァ「この方は、治してあげなくてもいいんですか？」

朱兎「あー、気が向いたら復活するだろ？」

ディーヴァ「そうなんですか？あら……この紙は？」

朱兎「ん？なんだ？」

ディーヴァ「ええと……k y o様・ゴンゴ様・神崎はやて様・秋風様・++幽鬼++様

感想をありがとうございます！……だそうです」

朱兎「あんにゃろ……自分で言えよな！まったく！」

ディーヴァ「それでも読んでくださっている方々がいるのは嬉しい
ことです」

朱兎「だな！皆様本当にありがとうございます！！！」

24話 善とか悪とか、そんなのは後付けなんだよ！（前書き）

連投でございますよう！

実は22・5話より先に、出来てはいたんです。

いたんですけども！あっちを優先させてたら遅くなりました。
ごめんなさい。

ではでは本編をどうぞ！

24話 善とか悪とか、そんなのは後付けなんだよ！

「んっ！」

「…民間人への魔法攻撃…軽犯罪では済まない罪だ」

「あんだてめー！管理局の魔導師かあ？」

「時空管理局囑託魔導師…フェイト・テストロッサ……抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある…」

同意するなら…武装を解除して！」

「誰がするかよお！」

「ユーノ！なのはをお願い！」

「うんっ！」

さーて、フェイトが追いかけてったってことは、そろそろシグナムとザッフィーが来るな！

ってことはアレだな？俺も闘ってもいいんだな？魔法？使いませんよ？漢なら拳でしょ！

……にしてもヴィータもひどいよね、何度かはやての家に行ったこともあるのにさあ……

「ユーノ君……」

「うん……フェイトの裁判が終わって、みんなでなのはに連絡しようとしたんだ。」

「そしたら通信は繋がらないし……局の方で調べたら広域結界はできてるし……」

「だから、あわてて僕たちが来たんだよ」

「……そっか……ごめんね、ありがとう」

「あれは誰？なんでなのはを！」

「わかんない……急に襲ってきたの……」

「でももう大丈夫！フェイトもいるし、アルフもいるから」

「アルフさんも？あ、でもさっきまでしゅうくんも居てくれたんだよ？」

「え？彼が？」

「うん、あの子にプロテクションを破られそうな時に助けてくれたの、なのはの回復もしてくれたの」

「そっか、それでこんなにひどい惨状なのに無傷なんだね」

「うん！」

「あゝあ……淫獣マジ涙目だな（笑） 折角の回復で立てるフラグも俺が叩き折ったからな！」

「さて、こっちはもう大丈夫だよな……あっちはそろそろ来る頃だろ」

……よし、行くか！

……ってか外に出たはいいけど、まだ来てないじゃん……って！淫獣はなんでなのはを

外に連れてくるかなあ！？連れてくるからフラグが立つってのに……

「アルフさんも来てくれたんだ……」

「クロノたちも、アースラの整備を一旦保留にして動いてくれるよ」

キイイイイン！

ガキキイイイイイン！

「んっ……ふっ！」

「こんのーっ！……っ！ぐううっ！うぐううっ！……むううっ！」

「……終わりだね。名前と出身世界・目的を教えてください」

「つく…むうううううう！……！」

「……っあ！なんかヤバイよ！？フェイト！」

ガキイイイイイイインンッ！！

「うあっ！」

「…………シグナム」

おっしゃー！来たぜコレ！！ザッフィーも来たな！じゃあこつからが俺の出番だ！

「つあ！」

「ふうっ！」

ドゴオオ！

「レヴァンティン……カートリッジ・ロード」

⌈ Explosion. ⌋

「紫電一閃！はああああ！」

ザシユウウウウウウ……

「手ごたえがない!?!?!?!?!? 何! 消えた!?!」

「残像だ」

「残像だと！？ 貴様……何者だ！」

「悪いが答える必要がないな……フェイト、アルフと一緒にシグナ

ムを抑えてくれ」

「あ……ありがとう朱兎」

「気にするな。さて、俺はそっちの男に相手になってもらおうか！」

「貴様！なぜ私の名を知っている！答えろ！」

「アンタの相手はこっちだよっ！」

「さて……じゃあ頼んだぞ？フェイト」

「うん。朱兎も気をつけて」

「フ……愚問だな」

さして、あっちのことは任せてザッフィーと楽しめますかね！やっぱ格闘戦つてのは燃えるぜ！

「待たせたな」

「かまわん……たしか橘とかいったな？」

「ああ、あんたは覚えていたのか。なあ、ザフィーラさんよ？」

「む……我のことがわかるということとは」

「ああ、あんた達の主のことも……な」

「はっはっはあ！やるじゃねーの！俺のラッシュについてくるとはなあー！！！」

まあ手加減はしてますけどねーしなかったら瞬殺だし？っと！そろそろ……

『朱兎、フェイトとアルフがてこずっているようです』

『ああ？シグナムだけじゃないのか？』

『ヴィータがアルフと闘っているために、ユーノが動いていないようですから』

「あの淫獣が……っ！」 『わかった。危なそうなら助けてやっていぞ』

『いいんですか？』

『ん？なにがだ？』

『私の存在を教えてしまっても？』

『最初から教えるつもりだったんだよ。フェイトがミッドから戻ったなら』

『そうですか……わかりました。なら、全力で助けますね』

『気をつけろよ？ シグナムの斬撃は結構きついぜ？』

『大丈夫ですよ。朱兎からもらった魔力なら、大体の攻撃は止められますから』

『そっか、ならまかせたぜ！』

『はい。そちらもお気をつけて』

よし、あっちはコレでOKだな……あとは……なのはか！

「悪いなザフィーラさんよ。今回はここまでだ！」

「む！逃げるか！」

「あーばよーとつつあーん！つてな〜」

さーてさて、急いでなのはのところに行かないとな……早くしないとリンカーコアが

蒐集されてしまうぜ……ここは瞬動でも使って……いや、アレのほうがい早いかな！

あの技だったら直線しか移動できない瞬動より使い勝手がいいかもしれないしな

問題は驚異的な脚力による超高速移動なわけだから、確実に発動して制御することは

可能………なんだけれども足場がなあ………やっぱ空中に足場を作って行くしかないか

ま！俺ならなんとかなるだろ！おっしやー！さっさと行ってシヤマ
ルを止めるかー！！！！

24話 善とか悪とか、そんなのは後付けなんだよ！（後書き）

作者・朱兎 「あとがきっぽいものなきがするもののコーナー」

朱兎 「あとがきのタイトルがなげーよ！」

作者 「いきなりダメだし!？」

朱兎 「おまえは……もうちょっと考えてだなあ」

作者 「ということで十十幽鬼十十様と九十九君が来てくれてたみたいだよ」

朱兎 「俺の話は無視かよ!」

作者 「まあまあ……でも、あんなアドバイスでよかったのかな？」

朱兎 「よかったもなにも、お前にはあれくらいしか言えないだろうが」

作者 「……まあそうなんだけどね」

朱兎 「ま、九十九君とはいつでも組み手をして見たいからさ」

作者 「ボソリ……（この格闘マニア）」

朱兎 「なんか言ったか？」

作者 「言っていないよ？」

朱兎「まあいいや……いつでも呼んでもらってOKですよ……っ」と

作者「バトル・J「聞こえてるぜ？」なん……だと……」

朱兎「さて、皆さん。こんな作品ですけども、生暖かい目で見守ってやってくださいな」

作者「んー！ー！むぐううー！ー！……」

朱兎「んじゃ今回のあとがきはこの辺で！俺は今からコイツを拷問げふんげふん教育してくる！」

25話 その魂……極彩と散れ……（前書き）

ということで4日も空いてしまいましたが、25話の投稿です。

時系列的には24話をUPするべきなんですけども、
こっちが先にできちゃいましたのでUPします。

それでは25話をどうぞ？

25話 その魂……極彩と散れ……

「ディーヴァ、サーチを」

『はい……左後方に500mに魔力反応です』

「わかった」

さて……んじや行くか！瞬間移動以外での俺の最速の移動法……

「いくぜっ！クルダ流交殺法影門最源流技『神移^{カムイ}』！」

発動と共に、自分以外の動きが止まる。たとえどんな達人だろうが知覚することすら

出来ないほどのスピード……光すらも置き去りにするほどの速度を瞬間的に出すことが

できる技、それがクルダ流交殺法影門最源流技『神移^{カムイ}』原理は単純だ。

驚異的な脚力により超高速移動を行う。ただそれだけ。だが誰にも破れはしないであろう

技である。発動した瞬間にはすでに目標とした場所に到達することが出来るものを、

誰が止めることが出来るのか！いや、できまい！そして今、俺はその技を使った。

つまり……だ。ほんの少し離れたところに、シャルさんがいるわけだ。さて、止めよう……

「……そう、なるべく急いで、確実に済ませます……クリアールヴェント、導いてね」

『J a . P e n d e l f o r m .』

間に合ったか……つまりははやてとの通話が終わった直後ということだな？ だったら……

「しまった……はずしちゃった！……っ！？」

さて……行くか……

「な……なんなの！？ この殺気は！？」

「逃げるなら……いや、もう遅いか」

「っ誰！？」

「俺か？ 俺はなのは達を護る者だよ」

「……だったら敵っていうことですね」

「そうなるかな」

「では：倒して続きをs「運が良かったな」どういふことですか？」

「大凶にあたるなんて、選ばれた人間の証だよ」

「っ！あなたは！」

「さあ：殺し合おう」

そういいながらナイフを構える。このはナイフ儀礼用で結構気に入ってるんだ。

「なっ！」

「ああ、安心するといい。このナイフは特別製でね？非殺傷の効果があるのさ」

「貴方は管理局の！？」

「いや？言っただけだ。俺はなのは達を護るモノだと」

「くっ！クラールヴィント！」

『Panzerhinderis.』

「残念……『極死』」

パキイイイイイイン！

「そんな！障壁が！？」

「甘い……『七夜』」

ザシユウウウウツ!!

「きゃあああああああ!!」

「斬刑に処す。その六銭、無用と思え………ふっ、終わったな」

「シャマルー!!!」

やれやれ……シャマルさんを倒したら、今度はヴィータか？

「てっめえー!!」

「相手をしてやってもいいが、時間の無駄だと思うぞ」

「んだとお!!」

「見ろ、なのはが結界を破るところだ」

「っな!!」

「さて、俺はここで引かせてもらおう」

「てめえ! 待ちやがれ!!」

「いいのか? 管理局が来るぞ?」

「ヴィータ、引くぞ」

「ザフィーラ！でも！」

「時間がない。……勝負は預ける。いいな？」

「オーケイ、預かろう。……じゃあな」

さて、管理局に捕捉はされなかったみたいだな。とりあえずなのは
の所に行くとうとうか。
それにしてもいいタイミングで介入できたものだな……っと、いか
んいかん。流石にこの
キャラのままだったら大変なことになるからな……切り替え切り替
えっと

「やれやれ、逃げたようだな」

「あ！しゅうくん！」

「朱兎！」

「アンタ！」

「フェイトとアルフも無事か？」

「うん、大丈夫」

「アタシたちは……まあ無事だけどさ」

「待ちなよ！なんでなのはには聞かないんだ！」

「うるさいぞ淫獣。なのは俺が護ったんだから無事なのはわかってる」

「護った？」

「スターライトブレイカーのカウンtdownの時に、なのはの胸から出てきた手があっただろ」

「あ……」

「でもすぐ消えたじゃないか！」

「当たり前だろう。俺が術者を倒したんだから」

「君が！？」

「お前は殆ど役に立っていなかったようだがな」

「それは！」

「もういいだろう。さっさとアースラにでも報告に行け」

「しゅうくんは？」

「俺はまだやることがあるからね。だから一緒にはいけないんだよ？なのちゃん」

「そうなの？」

「そうなの。だからみんなで行っておいで？」

「朱兎、戻ったら……」

「わかってる。帰ったらちゃんと話をしてやるよ。それでいいだろう？ フェイト」

「ん……」

「そら、全員さっさと行かないと、KY君がやってくるぞ？」

「KYって……」

「さて、俺はもう行く。じゃあまたな」

そういう残して瞬間移動をする。行き先は当然自宅前なわけで。それにしてもあの技はやっぱりすげえな……障壁もあっさり貫通したしな！ ま、この儀礼用の非殺傷ナイフ以外は危なくて使えやしないけどさ。さて、これでなのは蒐集を防げたってことは、闇の書がSLBを撃ってくることはないだろう。と、いうことは多少は危険が減るかな？

「朱兎」

「ん？ああ、そっちも大丈夫だった見たいだな」

「当然ですよ。こういう言い方は変かもしれませんが、文字通り魔力の桁が違うんですから」

「ふむ……やっぱ多いのか？」

「そうですね……プロテクションを使わなくても、なのはさんの魔法を防げるくらいには」

「……………それって、滅茶苦茶多いんじゃない？」

「ですから桁が違うって言ったんです」

「さいですか……」

「ところで」

「ん？なんだ？」

「フェイトたちにはまだ事情を説明していないんですけど」

「ああ、帰ってきたら話すって言った」

「そうですか。なら私はディーヴァと一緒に食事の用意でもしますね」

「りょーかい。んじゃ俺はちょっとアースラまで行って来るわ」

「アースラに？一体なにを……？」

「なーに……ちょーつとばかり挨拶を……な」

さーて……俺直々に会いに行つてやるんだ……くだらん話を聞かせるんじゃねえぜ？

つとー、んじゃま、行きますかね！

「ディーヴァ」

『はい、マスター』

「なのはの居る場所はわかるな？」

『もちろんです。不可視状態のビットが護衛してますもの』

「そっか……近くに転移は出来るか？」

『出来ますよ。マスターなら、魔法を使わなくてもいけるんじゃないですか？』

「ふむ……だったら座標及びなのはの気配の探知を頼む」

『わかりました。………でました。イメージをリンクさせますね？』

「ああ……よし、いいぞ。じゃ、行つて来るか。あとは頼んだぜ？
リニス」

「夜遊びは関心しませんけどね」

「ばーか、んじゃ行ってくらあっと！転移！」

さーてさて……黒幕にご挨拶にでも行きますかねえ……

それにしても、管理局の警備はザルなのか？こんなに簡単に進入できるとは思わなかったぞ。

ま、気配も魔力も遮蔽して瞬間移動での進入なんて、普通は想定していないだろうけどな。

んじゃ、ま、なのは達が呼び出されるのに付いていってみますかね。それにしても

このステルス迷彩ってのは便利だな……流石に実用化と論文化はしないけど。

どう鼻肩目にみても兵器として利用される未来しか思い浮かばないからなあ……

そんな事を考えてウチにどっかの部屋に着いたみたいだな。とうとう黒幕とご対面か。

さあ黒幕さんよお……あんたのやり方……はつきり言う、気に入らんな。

あんたの計画……俺がぶっ潰してやんぜ！

25話 その魂……極彩と散れ……（後書き）

作者・朱兎「あとがきです！のコーナー」

作者「それにしても、右腕が……」

朱兎「まあしょうがないんじゃない？」

作者「なんでさ!？」

朱兎「心当たりは？」

作者「……たぶんないよ？」

朱兎「ふーん、まあどうでもいいけどさ」

作者「ひでえ……それにしても、お前さん」

朱兎「急になにさ？」

作者「京谷君との模擬戦は楽しかったかい？」

朱兎「おう！すげーんだぜ！スカーレットニードルを喰らっても平気なの！」

作者「ほー、確かにすげえな……あれって1発で常人なら悶死するんじゃないかったか？」

朱兎「誘拐犯には14発撃ったけどね」

作者「よく死ななかったな……」

朱兎「そこは手加減してますよ」

作者「京谷君には？」

朱兎「出来るわけないじゃん？ してたら負けてたよ」

作者「やっぱすげえなあ……k y o様にちゃんと御礼を言っておくんだぞ？」

朱兎「当然！ k y o様、本当にありがとうございました！！！！」

作者「んでもって、フィオネさんに抱きしめられて真っ赤になっていたという……」

朱兎「……斬刑に処す」

作者「だが断る！ ランダム転移発動！」

朱兎「うわ！ てめえ覚えてろよおおおお………」

作者「ふうやれやれ……朱兎がいなくなったところで、簡単なアンケートでも。」

みなさんに質問です。ヒロインは誰にしましょうか？」

ディーヴァ「あら、まだ決まっていなかったんですか？」

作者「そうなんだよね……っていつの間に！？」

ディーヴァ「最初からですよ？それで、候補はいるんですか？」

作者「ん？いないよ？だから悩んでるんじゃないか」

ディーヴァ「そ、そうですか……」

作者「ということで、ヒロインを誰にするかの助言っぽいアンケートをば

票が多かったキャラが確実にヒロインになるとは限りませんが……」

ディーヴァ「それって意味はあるんですか？」

作者「あるの！ってことで今回はここまでです」

ディーヴァ「次回は24話の裏話の予定だそうですよ？え？たぶん？」

作者「先に26話ができるかもだからね……」

ディーヴァ「それでは、次回をお楽しみに」

作者「はあ……左手だけで打つのはしんどいなあ……」

24話―EX　　っていうか裏？家政婦は見たっ！かしんない（前書き）

ってことで24話の裏です。

前回は感想の御礼を書けてなくて申し訳ありませんでした。

それでは短いですが、どうぞ！

24話―EX

っていうか裏？家政婦は見たっ！かしんない

Side フェイト

『Photon lancer.』

キュイイイイン！！

「レヴァンティン……私の甲冑を」

『Panzergeist.』

「撃ちぬけ……Fire！」

ダギユウウウウウン！！

ガキキキイイイイン！！！！

「つああ！？」

そんなっ！弾かれた！？

「魔導師にしては悪くない手だ……だが、ベルカの騎士に1対1を挑むには……まだ足りん！」

シュキイイイイン！！！！

「つくう！」

「はああああっ！！！！」

「っあ！」

ガキイイイイイイイン！……………パリイイイイイン！

っあ！お・重いっ！

ジャキーン

「っはああっ！レヴァンティン！叩っ切れ！！！！」

『J a w o h l .』

「っはああ！！」

ガキイイイイイイン！！！！

「っくうう！」

バキキ…パキイツ！

ドゴオオオオオオオオオンン！！！！！！！！！！

ブシュウウウウ……ガシャン！

ガキイイン！！

『Nachladen.』

あれだ……あの弾丸……あれで一時的に魔力を高めてるんだ

「終わりか？ならばじっとしている。抵抗しなければ命までは取らん」

「っ誰が！」

「いい気迫だ……私はベルカの騎士・ヴォルケンリッターの将シグナム

そして我が剣……レヴァンティン！お前の名は？」

「……ミッドチルダの魔導師……時空管理局囑託……フェイト・テストロッサ！

この子はバルディッシュ」

いけるよね……バルディッシュ！

「テストロッサ……それにバルディッシュか」

「っん！」

この人……強いつ！でもわたしにも負けられない理由がある……だから退かない！

「はあああああつ！！」

パキイイイイイン

「はい、そこまでですよ？」

っえ？……嘘……あなたはっ！？

Side フェイト Side Out

Side リニス

『わかった。危なそうなら助けてやっていいぞ』

『いいんですか？』

『ん？なにがだ？』

『私の存在を教えてしまっても?』

『最初から教えるつもりだったんだよ。フェイトがミッドから戻ったらな』

『そうですか……わかりました。なら、全力で助けますね』

『気をつけろよ? シグナムの斬撃は結構きついぜ?』

『大丈夫ですよ。朱兎からもらった魔力なら、大体の攻撃は止められますから』

『そっか、ならまかせたぜ!』

『はい。そちらもお気をつけて』

んー、朱兎からの許可はできましたけどねえ……このまま手助けをしちゃっても

フェイトの為にならないような気がするんですよ……だったらもう少し様子を見たほうが

いいのかもs「っはああっ! レヴァンティン! 叩っ切れ!!」あらあら……

『J a w o h l .』

「っはああ!!」

ガキイイイイイン!!!

「つくうう！」

バキキ…パキイツ！

バルディッシュもそこその強度はあったと思うんですけどねえ……あの女の人の、斬撃がそれだけ強烈ということなのでしょうかね？ だったら、もう助けたほうがいいのかも？ では次の激突の時にとめましょうか。

「いい気迫だ……私はベルカの騎士・ヴォルケンリッターの将シグナム

そして我が剣……レヴァンティン！ お前の名は？」

「……ミッドチルダの魔導師……時空管理局囑託……フェイト・テストロッサ！」

この子はバルディッシュ」

「テストロッサ……それにバルディッシュか」

「っん！」

「はあああああっ！！」

さ、頃合のようですね。それでは行きましょうか。

パキイイイイイン

「はい、そこまですよ？ フェイト、私はもっと魔力を収束させる用に言いませんでしたか？」

「えっ……！？」

「何者だっ！ 1対1の勝負に介入する気か！」

「そうですねえ……介入しないと、私の教え子が墜ちちやいそうでしたので」

「なんだと？」

「そんな……リニスッ！？」

「お久しぶりですねフェイト。元気でしたか？」

「リニス！ リニスッ！！！」

「あらあら、今はそんなときじゃないでしょう？」

「その魔力……貴様、先ほどの男の手のものか！」

「手のもの……というわけでもないんですけどねえ」

「問答無用だっ！ レヴァンティン！ カートリッジ・ロード！！！」

ガキイイイン！

『Explosion.』

「受ける！紫電一閃！！はあああああっ！！！！」

あらあら……ずいぶんと頭に血が上っているようですねえ……
単調な攻撃では、どんなに1撃のダメージが大きくても、簡単に防
がれてしまいますよ？

「フェイト、いいですか？障壁も全体に満遍なく展開するんじゃない
くて
攻撃の当たる部分のみを厚くしておけば、貫通されにくいんです
よ？」

パキイイイン！

「っな！紫電一閃を防ぐだと！」

「今言いましたよ？『攻撃の当たる部分のみを厚くしておけば貫通
されにくい』って」

「つく！」

「なの……は……？」

「どうしました、フェイト？」

あらあら、なのはさんの胸から腕が出ていますね……不思議な現象

です。

朱兎が急いでいたのはあれを止めるためだったんでしょうか？だとしたら失敗ですかねえ

……おや？一旦もどっていったかと思ったら、出てこなくなりましてけど……

あれで終わりでしょうか？なのはさんの魔力もそのままですし……ということとは……

砲撃がそのままこちらに向かってくるということでしょうか？

………一応防げるとは朱兎にはいいましたけど……やっぱ凄まじい魔力ですから
怖いような気がしますねえ……

「どういうことだ……なぜ蒐集が開始されない!？」

「あら、わかりませんか？」

「なにっ!？」

「先ほどまで、あそこのわんちゃんとか戦っていた少年が止めたのですよ」

「っな!ばかな!」

「え……朱兎が？」

「フェイト、彼はこういってましたよ? 『俺はなのは達を護るモノだ』と」

「それって……」

「達ということは貴方も入っていると思いますよ？」

「朱兎……………／／／／／」

『きゃあああああああ！！』

「シャル！？つく！勝負は預けるぞ！ヴィータ！ザファイラ！」

「そうですねえ、そろそろ管理局も到着するかも知れませんからね」

あらあら、あんなに急いで……まあ朱兎は全てを知っているみたいですから

放っておいてもかまいませんよね？それじゃあ私は先に帰りましょうか。

夕食の準備も終わってませんしね♪

24話―EX　　っていうか裏？家政婦は見たっ！かしんない（後書き）

作者・朱兎「あとがきなのですよ……コーナー」

作者「まずは謝罪を！前回のあとがきは、先にメモに書いてあったのを

コピペしてしまったので、感想に対する御礼を書き忘れていました。

本当に申し訳ありませんでした！！！！」

朱兎「お前はなんでそんな大事なことを忘れるかなあ」

作者「ちよつと病院いたり仕事だったりで忙しくて……」

朱兎「かんけーねえだろ？」

作者「そうだね……本当にごめんなさい」

朱兎「ん、改めて感想の御礼だな」

作者「うん、k y o様・死食經典義様・H A Z U K I様、感想誠にありがとうございます」

朱兎「なんかイロイロお土産まで頂いちゃってさ」

作者「なんか武器が凄いだよね……」

朱兎「俺っていままで盾以外はほとんど使ったことがない気がするんだけど？」

作者「お前が武器や魔法を使ったら無敵すぎるからさ」

朱兎「じゃあ、基本は体術？」

作者「そのつもり。でもそれでも強いのにには変わらないんだよね」

朱兎「まあ、物理法則を無視したような武術も多いからなあ」

作者「まあねえ……と、それにしても今回から新キャラがでたよ」

朱兎「新キャラっていうかさ、あれってそのフラグだったのか？」

作者「うん。どうせなら、一家を纏めて助けようかと思ってさ」

朱兎「ふーん、違和感無い様に頑張れよ？」

作者「…………おおう、難しいですよ」

朱兎「ま、それがお前の選んだ道ってな」

作者「っは！」

朱兎「ん？どうした？」

作者「いまなんか『キュピーン！』ってきた。あのガン〇ムのNT
な人たちみたいに」

朱兎「…………電波か？」

作者「……無限さん、貴様……見ているな!!!!」

朱兎「なに言い出すんだよ急に」

作者「ん? ああ、なんでもないなんでもない」

朱兎「変なヤツ……で? なんかアンケートやってんだって?」

作者「そうそう、前回のあとがきでアンケート募集したんだけど、
回答率が0でさあ」

朱兎「あれだよ。自分で考えろってことだ」

作者「むう……まあもうちょっと待ってみるよ。それでは次回をお
楽しみに!」

朱兎「次回は26話だったはず!……このドライバースセットは何に
使おうか……」

26話 人の心の中に踏み込むには、それ相応の資格がいる？（前書き）

はい、連投です。26話はまだ笑いが少ないです……

笑いの成分が不足しているっ！なんとかしなければ！

ということで本編をどうぞ！

26話 人の心の中に踏み込むには、それ相応の資格がいる？

「なのは君は日本人なんだな？懐かしいな日本の風景は」

「ふえ？」

「私も、君と々世界の出身だよ。イギリス人だ」

「ふええ！？そうなんですかあ！？」

「あの世界の人間の殆どは魔力を持たないが稀にいるんだよ、君や私のような

高い魔力資質を持つものが……ははっ、魔法との出会い方まで、私とそっくりだ

私の場合は、助けたのは管理局の局員だったんだがね。もう……50年以上昔の話だよ」

「はああ……」

「フェイト君、君はなのは君の友達なんだね？」

「はい」

「約束して欲しいことは一つだけだ。友達や、自分を信頼してくれる人のことは

決して裏切ってはいけない。それが出来るなら、私は君の行動についてなにも

制限しないことを約束するよ。………できるかね？」

「……はい。必ズ「あんたにそれを言う資格があんのかよ」え？」

「君は……誰かね？」

「はっ！あんたに名乗る名前はないね」

「なっ！提督に対して無礼だぞ！それに、どこから入ったんだ！」

「黙りなKYヤロウ。俺はそのおっさんに喋ってんだ」

「KYKYと…っ！僕にはクロノ・ハラオウンという名前がある！」

「わかってねえなあ……」

「何がだっ！」

「そういうところがKYだってんだよ！」

「っ！」

「クロノ……」

「しゅうくん……」

「もう一度聞ぐが、君は誰かね？」

「ああ？だk「彼は『橘朱兎』なのはの幼馴染です」KY…てめえ……」

「君も魔導師なのか？」

「みてわからねえのか？」

「流石に見ただけでは解りかねるよ」

「節穴だな。招待されたわけでもないのにここにいる時点で気付けよ」

「む……まさか自分の力で此処まで転移を？」

「さあな。てめえで考えな」

「そうか……それで君は何をしにここまで来たのかね？」

「なあに、簡単なことだ」

「ほう……一体何かね？」

「あんたの妄執、俺が殺してやるよ」

「……………何？」

「わからねえか？ あんたがやってる人形遊び、俺がその幻想をぶっ殺す！」

「っ！ 君は…っ！」

「答えは聞いてない。宣言はしたぜ？ さて、俺の用事は終わった」

「待ちたまえ！まだ話は！」

「言ったはずだ。答えは聞いてないんだよ。さて俺は先に帰るぜ」

「朱兎……」

「フェイト……帰ってきたらちゃんと話してやるから、そんなに悲しそうな顔をするなよ」

「むーしゅうくん？」

「なのちゃんもそんなに睨まないの。可愛い顔が台無しだぞ？」

「残念だがこの部屋に結界を張った！帰る前に全部話してもらう！」

「相変わらずのKYだなお前。ま、結界なんざ無意味だけどな。さて、じゃね二人とも」

そういいながら転移発動！あの一瞬のグレアムのおっさんの呆然とした顔は見ものだったぜ？

さてと……このまま帰るか、はやての家にでも顔を出すか……あんまり強いダメージは

当ててないから、もうシャルさんも復帰してる頃だろうしな……よし！行くか！

少年移動中……………

ピンポーン……

「はい、ちょっとまってなあ」

お、この声ははやてだな？

「はいはい……と、朱兎君やん。どないしたん？」

「よ、ちょっと様子を見に……な」

「そうなん？まあええわあ、ほなあがってってやあ」

「ん、そうさせてもらおうか」

「丁度今からお風呂に入ろうとおもったんよお。一緒にはいる？」

「ばーか」

「もう…ひどいなあ」

「はやてちゃん？お客さmっ!？」

「こんばんわシャルさん『先ほどぶりですね』」

「……貴方は」

「シャルどしたん？朱兎君は前にも来たことあったやろお？」

「え……ええ、そうですね……」

「ああ、コレお土産です」

「あ…それ翠屋さんのお？」

「そ、家が近いからね」

こんなこともあろうかと、『ゲートオブバビロン王の財宝』に入れてありますよ？
だって翠屋のシュークリーム&ケーキはどこにお土産に持って行っても喜ばれるしね！

当然追加で自作のアイスクリームも入れておきましたよ？黙々とアイスを食べてる

ヴィータは可愛いですから！……まあそんなことは置いといて

「ようザフィーラ。今日もいい毛並みだなあ『戦いに来たわけじゃないよ』」

「わふっ『わかっている』」

「こんな遅くに何用か？『貴様は……ザフィーラは知っていたのか！？』」

「どしたん？シグナム」

「いえ、こんな遅くに子供が出歩くのは危険だと思っただけです
で『目的はなんだ』」

「大丈夫大丈夫、こう見えても俺ってそこそこ強いから『4対1で
も勝てるくらいにはな』」

「そうか……『貴様……』」

「わふっ『落ち着けシグナム。お前も煽るんじゃない』」

「ははっザッフィーは相変わらずでっかいよなあ『悪い悪い』」

「……主、先にシャマル・ヴィータとお風呂にいかれてはどうですか？」

「んう？でも朱兎君もおるし」

「彼の相手は私とザフィーラで致しましょう。ですから気にせず
どうぞ」

「だな、早めに風呂に入ってきたよ。出たらデザートを食ったら
いいいな」

「そうかあ？ほな先に行かしてもらおかなあ」

「おう、ゆっくりあったまって来な」

「朱兎君もゆっくりしてってなあ？」

「ま、あんまり遅くならない程度にはな」

さーて、こっからが勝負かねえ……

「それで、一体なにをしに来たのだ」

「ま、そう警戒すんなよ」

「それは無理というものだろう。先ほどまで戦っていた相手なのだからな」

「ま、ね」

「ヴィータは気付いていないみたいだがな」

「ヴィータとは直接闘ってないからな」

「もう一度聞く。目的はなんだ」

「まあそう焦るなよ」

「貴様……」

「落ち着けシグナム、橘も煽るな」

「ははっ、まあいいや。じゃ、単刀直入に言うぜ？」

「何？」

「簡単なことだ。蒐集をやめろ」

「ふざけるな！それがどういふことなのかわかっていない貴様n」
「知ってんぜ？」なんだと！」

「はやての足が動かない原因だろ」

「貴様！わかっていながらそれを言うのか！」

「シグナム、落ち着けと言っているだろう」

「くっ！」

「お前らは何故魔力を集めているんだ？」

「主はやての為だ」

「魔力を蒐集して闇の書を完成させれば、主はやての身体も治るだろう」

「…………なるほどね。なんも知らないってことか」

「何？」

「いいさ、教えてやんよ。闇の書がどういうものでどうなるのかな」

シャルさんとヴィータには言わなくてもいいだろうから、ここで2人にしつかりと

話すことにしよう。信じられないかもしれないが、どうにか説得しないとな……

少しでも被害を減らすために。そしてこいつらの罪をすこしでも軽くするために……

やーれやれ……めんどろだけども頑張りますかねえ！

26話 人の心の中に踏み込むには、それ相応の資格がいる？（後書き）

作者・朱兎「あとがきっぽいコーナー」

作者「ということで即UPです」

朱兎「まあ、24話裏とはほぼ同時進行だったしな」

作者「なかなか難しかったけどね」

朱兎「それで、ヴォルケンズに話すのか？」

作者「それはお前がすることであってだな」

朱兎「お前が書いてるんだろうが」

作者「知らねーよ。こっちはさっさと家に帰らせようと思ってたのにさ」

朱兎「は？なんだよ急に」

作者「お前が勝手にはやての家にいくから、予定が狂ってんの！」

朱兎「そんなのは俺のせいじゃねーだろ！」

作者「お前の家の全員に『女の人に囲まれて楽しそうだった』って言ってる」

朱兎「ちょ！マジで命に関わるから！！！」

作者「だが断る！」

朱兎「をい……それにしても……」

作者「ん？」

朱兎「最近笑いの要素が足りないんじゃないか？」

作者「ギクッ」

朱兎「どういうことだよ？」

作者「あー、ぶっちゃけネタがさあ？」

朱兎「いろいろあるだろうが」

作者「あるにはあるんだけど、使うタイミングがさ」

朱兎「そこを何とかするのが作者ってもんだろが」

作者「まあ、おっさる通りなんですけどね？」

朱兎「ってことで、もっと精進しろ」

作者「へーい……ということで次回27話をお楽しみに……」

朱兎「また見てくれよな！」

EX PV1, 000, 000記念 閑話っばいものです? (前書き)

2月9日から投稿を始めて、約40日がたちました。

気が付けばお気に入り870件に総合評価2, 225Pになっていました。

おまけにPVも100万を超え、ユニークまで10万を超えてしまいました。

みなさまの感想と応援に感謝感謝でございます……プレッシャーもあるけどね。

ということで今回は本編ではなくEXです。なんかおかしいことになってます。

それではどうぞ！

EX PV1, 000, 000 記念 閑話っぽいものです？

「アリシアも学校に行きたいだって？」

「そうなのよ。知識的にはもう高校卒業程度の能力はあるのよ？」

「ふむ……で、俺にどうしろと？」

「どうにかできないかしら」

「アリシアは、まだ5歳だっただろ……小学校は6歳からだぜ？」

「無理かしら……」

「できるっちゃできるけどさあ……戸籍の書き換えを何とかすればいいんだろ？」

「お願いできない？」

「んゝまあやるだけやってみるよ」

ある休日の俺とプレシアの会話なわけなんだが……アリシアも俺やフェイトと一緒に学校に

行きたいということらしい。まあここに引っ越してくる時に士郎さんに頼んだわけだから

今回も頼むことになるんだろうなあ……ということとは？え？もしかしてまた鍛錬に付き合うの？

しんどのに……超しんどのに！士郎さんは諦めないからめんど……げふんげふん
んで、士郎さんとやってたら、恭也と美由希さんまで混ざってくるし！

これだからバトルジャンキーは……え？自分のことはどうなのかって？俺はそんなじゃない
デスヨ？ただちょっと格闘の時は熱くなるってだけデスヨ？

「ということ……アリシアの戸籍を1歳分はやめて、今6歳ということにできません？」

「またいきなり難しいことを言うね」

「あー、まあ難しいのはわかるんですけどねえ……どうにかありません？」

「そうだなあ……出来ないことはないんだが」

「え、できるんですか？」

「そりゃあね、前に戸籍を作った時にも言ったとおもうけど」

「あーそういえばそんな覚えも……」

「ははは、そういうことで報酬はいつも通り模擬戦でいいかな？」

「まあそういうだろうとは予想してましたけどね……」

まあそんなこんなでアリシアの聖祥への転入が決まったわけだ。これがA'sが始まるより前……たしか9月くらいだったから2学期が始まる時に編入したってことだな。まあこれでアリシアの希望を叶えたわけだから暫くは問題ないだろ。

と思っただんだよ？なのになんでプレシアに呼び出されてんの？今度はなんなの？

「アリシアと同じ年代の子供の親って若いのよね」

「はぁ……それを俺にどうしろと？」

「どうにかできないかしら」

「……できることもないが」

「お願いしてもいいかしら？」

「まあやるのはいいんだけどね」

「じゃあお願いね」

「へいへい……『時の砂の呪文』サンス・オブ・タイム つと、設定は24でいいな」

「まって！それじゃあ！」

「つと何だよ？たしか事故があったのが16年前だっただろうが。でもってアリシアが

6歳だったら24がギリギリなんだよ……日本の法律上な」

「私は……失った時間を取り戻せると言うの……？」

「ただし！今度はちゃんとフェイトのことも娘として愛してやれよ」

「当然でしょう！フェイトは私の大事な娘ですもの」

「おっしや、んじや行くぜ？『時の砂の呪文』サンス・オブ・タイム」

目の前で時間が撒き戻るように若返っていくプレシア。もともと若く見えてたけども

実際に若返ったら、滅茶苦茶美人なんだなあ……ああそうそう、この魔法だけどさ

ドラゴンクエスト列伝 ロトの紋章の中に出てきた大賢者カダルが使っていたものなんだけどな？

使い勝手は良さそうなんけども、いまいち使いどころがないっていうか、明らかに若返ったら

不自然っていうか……な感じで使ってなかったんだよな。その点プ

レシアだったらまだ引越しを

したばかりだし、知り合いもそうはいないだろうからな。それにアリシアが喜ぶならいいよな？

……でも、この時の俺は気付いてなかったんだ。コレが元であることになるなんて……

「でもさでもさ、無限さんも結構強いんじゃないの？」

「いやいやいや、そんなことないですって」

「っていうか、何度も言うけどさあ……俺のほうが明らかに年下なんだからもっと碎けた

話し方にしようよ」

「んー、この話し方になれてるんですよー」

「……慣れって恐ろしいね」

「ですよー」

あ……この人『無限さん』っていつて、ついこの間知り合ったんだけどさ。知り合った経緯が

また非常識なわけなんだ。どう非常識かって？えーっとその件は黙

秘らせていただきます！

今喋ったらいらない突っ込みが、どこからともなく来そうな予感がするので！

主にスキマとかスキマとかスキマから……え？黙秘できてない？いやいやキノセイデスヨ？

「で？なぜかあっちの世界に迷い込んで不思議な力に目覚めた……と？」

「そうそう、『気を使う程度能力』っていうんですけどね？」

「なんか腰の低そうな能力じゃない？」

「いやいやいや、ドラゴンボールとかみたいな方の気ですって」

「あ、なるほど」

「あと、紫さんからいつでもある人呼び出せるからってスペカをもらいました」

「しっ！その名前は言っちゃダメ！」

「ダメなんですか？」

「俺はまだ幻想入りしたくないから！」

「k t k r w」

「ってことで言っちゃダメだかね！……で呼び出せるのって誰？」

「嫁ですよ！」

「はい？」

「ああ、魔理沙さんです。『霧雨^{きりさめ} 魔理沙』」

「えーっと……」

「博霊大結界の外に出られるからって、結構来てくれますよ」

「そーなのかー………っていいのか？」

まあそんな話をしながら翠屋に来たわけですけども………んで、無限さんと一緒に座席に座って

注文をしようと士郎さんを待ってたんだけども………なぜか俺と無限さんは女性陣に囲まれています。

えっと、桃子さんとリンディさんと美由希さんにプレシアとアイリスと照姉まで……

どうしてこうなった！………なんかプレシアがすまなさそうにしてるけども？………もしかして？

「ねえ朱兎君」

「は、はい！なんででしょうか桃子さん！」

「プレシア・テストロッサは現在40歳のはずよね？」

「いや、流石にそういう風に明言するのはどうかと思いますよ？ リンディさん」

「彼女の肌の艶と張りは、明らかに20代のものと思わない？」

「えーっと、俺にはわかりかねますよ？ ね！無限さん！」

「ちよっ！僕に振らないでくださいよ！」

「無限君っていうの……私はリンディ・ハラウンって言うのよ。よろしくね？」

「ねえ、君も思うでしょ？彼女のお肌の滑らかさは40代のものじゃないわよね？」

「え、ええっと……そうですね……」

「ちょ！無限さん！？」

「朱兎君」

「……なんだよプレシア」

「ごめんなさいね、あのこと話しちゃったのよ」

「……………ハア！？」

「「ねえ朱兎君、ちよっとO☆H A☆N A☆S H Iしましょうか？」

」

はい…………結論から言いますと、桃子さんに魔法の存在がばれました。

なんかね？プレシアもアリシアも翠屋の常連なんだって……俺聞いてないよ？

でだ、今日は参観日だったらしいんだわ。んで帰りに翠屋に寄った……と。そこまではいい。

そこまではいいんだ。そこで桃子さんとリンディさんに肌艶のことを聞かれたらしい。

最初は化粧水がどうかって誤魔化してたらしいんだけど……問い詰められて話したんだって。

しかもリンディさんが桃子さんの前で、サラッと魔法でしょとかいう発言をしたとか……

一般人には秘密なんじゃなかったんですか！？リンディさん！！！！

「朱兎君、私達にもその魔法を使ってくれるわよね？」

「そうそう、お母さんは若い方がフェイトもクロノも喜ぶと思うのよ」

「えーっと……お二方とも十分に若いと思われるのですが……ね！無限さん！」

「だから僕に振らないでくださいってば！」

「一蓮托生ってことで！」

「ちょっ！おま！助けてゆかりーん！」

「ぬあ！？その名前はダメだってn「呼んだかしら？」ああ……才ワタ……」

「あ！紫さん、助けてくださいよ！」

「面白そうな話をしましたわね」

「あら？どなたですか？」

「あら失礼、自己紹介を致しますわ。私は神隠しの主犯こと『八雲紫』と申しますわ」

「あ、ご丁寧にどうも。リンディ・ハラオウンと申します」

「私はこの翠屋のパティシエールの、高町桃子です」

「……無限さん、今のうちに脱出を」

「やめといったほうがいいと思いますけど……」

「しゅうお兄ちゃん、どこいくの？」

おうふ……アリシアに捕まるとか……ダメだ、逃げられねえ……
朱兎は逃げ出した！しかし回り込まれてしまった！逃げられない！
っていう文字が見えるよ…

にしても『神隠しの主犯』ってのに疑問は持たないのか？

「んう？しゅうお兄ちゃん、こっちのお兄ちゃんはだあれ？」

「ああ、お兄ちゃんの友達だね？無限さんっていうんだよ」

「こんにちは、僕は無限っていいいます」

「ん…むげんお兄ちゃん？」

上目遣いでそういいながら、軽くくびをかしげるアリシア……相変
わらずかわいいな

「ぐはっ……」

「無限さーん……なにをダメージを受けてるんだか……全く」

「むげんお兄ちゃん、だいじょーぶ？」

「そうだ！よしアリシア、ちょっと無限さんとお話してくれませんか？お兄ちゃんは

お母さん達とO☆H A☆N A☆S H Iをしないといけないっぽいからさ……」

「ちょっ！朱兎くん！？」

「無限さん……健闘を祈る！」

よし……アリシアは流石に巻き込めないからな、とりあえずこの間作った超高性能美容クリームを
ひのふのみの……5個出しておくか……アイリスと照姉はいらないだろ。もしいるようだったら
家で作ってやればいいだろうからな。さて、尋問開始ですかねえ……俺の………

「あなたは魔法使いですね」

「ん？なにさ、妖怪の賢者サマにまで知られてんの？」

「今、みなさんにお聞きしたのですわ」

「……さいですか」

「朱兎君、私も24歳くらいになりたいな」

「えーっと……桃子さんは十分すぎるほど若いと思いますヨ？」

「朱兎君……一般人への魔法の秘匿義務違反よ？」

「さっきは自分からバラしてましたよね!？」

「黙っててあげるから私も24歳にしてくれないかしら？」

「結局リンディさんもそれが目的ですか!」

「もてもてですわね」「それじゃあお店を閉めてくるわ」

「これがモテモテに見えるんだったらあんたの目は節穴だ!」

「あら、生意気ですこと……」

「……やんのか?」

「私はかまいませんわよ?」

「あんたも十分長生きしただろ、そろそろ逝くか?……出る『ふつのみ布津御霊剣』」
たまのつるぎ

「それは……神剣!」

「妖怪には効果抜群だよなあ?」

「本気ですのね……」

「逃げるなら……いや、もう遅いか」

「……舐められたものですわね」

「さあ…殺し合お「朱兎君聞いてる?」「ごめんなさい!」

あぶねえ……七夜モードになるところだったぜ……武器も戻してつと、それにしても

一瞬やばかった。本気で殺し合いになるとこだった……

「……やらないんですの？」

「すまん！あんたの妖気に当てられていたらしいわ」

「どういことですか？」

「今のあんたは人に仇名す存在じゃねえだろ？しかも友人の知り合
いときたもんだ。

俺にはあんたと戦う理由がねえんだよ」

「あらあら、拍子抜けですわね」

「幻想郷の守護者を敵に回すほど俺は馬鹿じゃねえよ」

「……貴方にも興味がわきましたわ」

「勘弁してくれ」

そんな話をしているうちに、店内には客が居なくなっていたわけで
……アレ？

まだそんな時間じゃないよな？なんでだ？

「とりあえずお店はClosesにしてきたわよ」

「これなら魔法を使っても大丈夫でしょ？」

「えーっと……俺には拒否権は……」

「「ないわよ（ね）」」

「さいですか……わかった、わかりましたよ！やればいいんでしょ、やれば！」

「ええ、お願いね」

「楽しみだわ♪」

「24歳設定で……『時の砂の呪文』」

サズ・オフ・タイム

結局二人にも魔法を使ってしまった……八雲紫には興味をもたれるし……不幸だー！！！！

ああそれと、出していた美容クリームも回収されました……小瓶だったから大体1週間分

だったんだけど、桃子さん・リンディさん・美由希さん・プレシアに紫まで持って帰った。

そして！！！！一週間後が地獄でした。つまり、今日なんだけどね？もっと大量に作れとか言われて

休日に丸一日軟禁されてるんだぞ！逃げようとしたら紫がスキマから監視してるし！

アイリスも照姉も助けてくれないし！なにこの嫌がらせ！いいもん

ね、今度こそ逃げてやる…

「よし……転移かいS」「どこにいくんですの？」八雲紫……」

「あの美容クリームは私も気に入ってますわよ？」

「できる時に作ったんでいいじゃん！」

「あらあら、逃げるのかしら？」

「くっそー！あんたはもうゆかりんって呼んでやる！」

「かまいませんわよ」

「そこは否定しろよ！」

「言いましたわよね？貴方に興味が沸きました……と」

「俺の平穩はどこに行ったんだ……」

「それはただの幻想ですわ」

「勘弁してくれよ……」

そのままゆかりんに監視されながら製作をつづけましたとさ。ちくしょう……

余談だけど、無限さんはあの後も時々翠屋に通っているらしい。ア

リシアの紹介でフェイトと

なのはも挨拶をしたんだってさ。さらに言うと、最近桃子さんがもの凄く人気が高いらしい。

若くて美人で料理も上手なんだから当然か、士郎さんも大喜びだったみたいだしな。

リンディさんのほうは……なにも言うまい……いろいろ怖いから！それから俺は心労が増えました。

なんでって？簡単なことだよ。あれから時々ゆかりんが家に來てるからだよ……今度は蘭と橙も

連れて來るってさ、かわいいものの好きの照姉が喜びそうだな。とりあえずもう一回言わせてくれ。

…………不幸だ……………！！！！！！

EX PV1, 000, 000 記念 閑話っぽいものです? (後書き)

作者・朱兎 「座談会っぽいものこーなー」

作者 「まずは御礼から、秋風様・ヴォルス様・D o s s 様! 感想ありがとうございます!」

朱兎 「秋風様! あっちのS S ちゃんと読んでますからご安心を!」

作者 「いつも楽しませていただいています!」

朱兎 「問題は、お前がライダー系は一切わからないことくらいだよな」

作者 「あははは……平成ライダーは555しかわかんないんだよね」

475

朱兎 「勉強不足だな」

作者 「まあ仕事の都合上見られる時間じゃないからね」

朱兎 「まあいいけどさ。で?」

作者 「ん? でってなにが?」

朱兎 「ゆかりんまで出してどうする気だよ」

作者 「いやゝ流石に番外の閑話以外では出さないよ?」

朱兎 「出されたらカオスだからな!」

作者「まあ、そこまで文章構成能力があるとも思えないからさ」

朱兎「自己分析ができるのはいいことだけだな」

作者「はっはっは……まあ、今度はアリシア主観の話とかを書いて
も面白そうだけど」

朱兎「無理じゃね？」

作者「難しいだよな」

朱兎「ま、諦めて本編をさっさと書けよ」

作者「そうするよ。この辺からはほとんどオリジナル設定になって
くるだろうしね」

朱兎「みんなからもらった武装はどうやって使えばいいんだろう……
」

作者「直人さんからミーティアユニットもらってるんだろ？」

朱兎「うん……とりあえず他のとあわせて使い方を考えてくるわ」

作者「はいよーいつてらっさい……朱兎がいなくなったところで、
今のところ

ヒロインアンケートの票はさすが嬢に1票のみで他には入っ
ておりません。

まだ決めかねている状態ですので、みなさまよろしく願
います。

ではまた次回をお楽しみに！」

EX-2 なぜか閑話が2本目！（前書き）

なぜか気が付いてたら書いていたEX-2です。

27話を書いていたはずなのに……俺自重！

1日で110万を超えたからじゃないと思うんだけど……

確証が持てない今日この頃です。ではEX-2をどうぞ！

EX-2 なぜか閑話が2本目！

A'sに突入してから数日、俺はいつも通りの日常を送っていた。そこ！「嘘だっ！」とか言わない！日常ったら日常なの！家でいつも通り研究して、時間がやばくなったらゆかりんのスキマで学校の屋上に放り出されて学校に行って。
んでもって学校が終わったら、またスキマで研究室に送られて……
……あれ？
なんか悲しくなってきたよ？なんでこんなに缶詰状態なのかな？かな？
えーっと、こうなった経緯を思い出してみよう……

自宅でまったりしている

←

ゆかりん襲撃

←

追加で藍と橙も来る

←

なぜか忍さんが来訪

←

いきなり酒宴が始まる

←

ゆかりん（藍・橙）が妖怪だとばらす

←

人間を食べる食べないという話になる

←

人間の変わりになるようなものがあればいいという話になる

← 俺に研究しろという指令が出る

← 拒否しようとしたら藍が涙目で懇願してくる

← 橙の可愛さにメロメロな照姉からも指令が出る

← 俺に拒否権がなくなる

← 研究室への缶詰が始まる

← そして今に至る

そんな人間の代わりになるものなんて簡単に作れるわけじゃないじゃん！
なにこの無理ゲー！

………って考えてただけどね？ なんか意外に簡単に出来ちゃったわけよ。

神が（日本のだからな？ まあ仏教のだけど）鬼子母神に人肉の代わりにコレを喰え！

って言ったのが柘榴なわけじゃん？ その方面からもアプローチと、

鋼の錬金術師の

賢者の石方面からアプローチしてみたんだけど………あの賢者の石って大量の生贄が

いるじゃん？ あれってさ、どうも魔力の供給を増やしてやれば生贄をそこまで使わなくても

いいっぽいだわ。で、大量の肉（果物でもできた）と大量の魔力を贄にして練成したら

上手いことあの賢者の石ができたわけだ。最初は肉屋で買ってきた

肉に魔力や生命力を

付与する方向で考えてたんだけど、熱を加えたら生命力が抜けるし、かといって

ゆかりんが生肉を食ってるのを想像するのもなんかおかしいしなあ………ってことで、

試行錯誤してたわけなんだが……これで納得してもらえりゃ、やっ
と普通の生活に戻る！

………納得してもらえればだけどな

「ってことで、俺の背後で覗いてるんだろ？さっさと喰ってみろよ」

「あら、ばれてましたのね？」

「ほぼ毎日覗かれてりゃぁいい加減なれるわ……」

「うふふ、愛ですわね」

「なんでさ……まぁいいからコレを喰ってみろって」

「なんですの？これは……石？」

「ああ、いろいろ弄ったんだけどさ。俺の研究の成果だよ」

「飲み込めばいいんですの？」

「そ、簡単だろ？」

「では………コクリ………っ！」

「ああ、その名前は『賢者の石』だからな？」

「これは……凄いですわね。この小さな一粒だけで人間10人分ほどもあるなんて」

「まーな。結構作るのに苦労したんだからあんまり使いすぎんなよ？」

「ええ、蘭と橙の分もあるんですわよね？」

「そののでけえ瓶1本分作つといた。近隣の八百屋とかデパートとかの果物を

一氣に買い漁っちまったぜ。肉も大量に買ったしな」

「果物と家畜の肉でできていますの！？」

「あとは俺の魔力と血液と気だな。腹が減りすぎて狂うことがないようにしろよ？」

「感謝させていただきますわ」

「問題ない」

「貴方が窮地の時はいつでもお呼びなさいな、幻想郷の守護者たる私は貴方の個人的な

味方ですわ」

「そいつはどーも。ま、そんなことはそうそうないだろうけどな」

「そうですわね。それでも私が貴方に好意を抱いていることは覚えておいてくださいな」

「はいよ。まあサンキューな」

そういつてどこことなく嬉しそうな感じでスキマに消えていくゆかりん……まあいいことをしたんだろうなあ。人助けになるのかな？ コレは……

「マスター！」

「ぬお！？ どうしたんだよディーヴァ。そんなに焦って」

「すずかさんとなのはさんが攫われました」

「は？」

「急いで助けに「まで、どういうことだ？」ですから！」

「もう一度聞くだ。どういうことだ」

「はい、それが…学校が終わり、アリサさん・すずかさん・なのはさん・フェイトさんで帰っていたようなんですけど」

「けど？」

「アリスさんが一旦自宅へ車で戻り、フェイトさんの家へ（ハラオウン家）向かい、
フェイトさんがマンションから出てくるまでにお二人が攫われてしまったようなんです」

「ほうう………ククク」

「あ、あの……マスター？」

「ハハハ……ああ、いやいや……ちょっと愉しくてな」

「え？」

「こうやって堂々と俺に喧嘩を売ってくるなんてなあ」

「マ、マスター？」

「ディーヴァ、エリアサーチ……地球上の砂粒一つまで見逃すな」

「は、はいっ！………え？」

「どうした？」

「おかしいんです。地球上のどこにもお二人の反応がないんです」

「そうか……『リンディさん聞こえますか？』ディーヴァ、少し待ってろ」

「はい」

『朱兎君？どうしたの？』

『なのはとすずかが攫われた』

『え！？どういうこと！？』

『ディーヴァのサーチで探したが、地球上には反応がなかった』

『それは……』

『次元犯罪者の可能性がある。もしかしたら俺が大魔法を使うかもしれない』

『ちょっとくらいなら大丈夫だけど……見つかるのかしら？』

『俺なら余裕だ。リンディさんには騒ぎにならないように配慮を頼む』

『わかったわ。気をつけてね？』

『心配なら俺じゃなく犯人の安全を心配しておくことだな』

『え？』

『悪いが……今回、俺は手加減を出来ないかもしれん』

『……どういうこと？』

『こう見えて……俺は結構怒っている』

『朱兎君！？ちょっと朱兎君！』

さて……行くか……なのは気のパターンを検索……ヒット……場所別次元だな。

アースラの転移機構を解析していて良かった直で飛べるな……

「ディーヴァ…検索完了だ。飛ぶぞ」

「あ、はい！」

攫ったヤツらは……ぶっ潰す……！！！！

「いっか……」

「サーチ……マスター、あの山の地下300mのところにラボがあるようです」

「わかった。まずはなのところに転移するぞ」

「はい！」

「行くぞ…『転移』」

ここは……倉庫か？なののは……いた！

「なのちゃん！大丈夫！？」

『Master doesn't return consideration.』

「面倒だ、日本語で喋れ。ディーヴァ、ツールダウンロード」

「はい、ではレイジングハート、リンクしますね」

『Sorry. ……ダウンロード完了しました』

「よし、なにがあった？」

『はい、マスターとすずかさんが二人だけになった時に、すずかさんを人質にして

マスターの動きを制限し、捕獲・拘束の後にこの建物へ転移しま

した』

「すずかは？」

『貴重なサンプルと言って薬で眠らされて連れて行かれました』

「その時になのはどうなっていたんだ？」

『後頭部を強打され、意識を失われていました』

「……………そうか。『ケアルガ』」

その直後になのはの身体が淡く光り、かすり傷一つ残さず全快した。これでなのはの心配はないな。あとはディーヴァに結界を任せておけば大丈夫だろう。俺はすずかを助けに行く！

「ディーヴァ、ここで結界を」

「はい！……………マスターはどうするんですか？」

「知れた事、俺はすずかを助けに行く」

「！……………御武運を」

「誰に向かって言っている？心配は無用だ」

そう言って俺はすずかの気の方向へ転移することにした。待ってろよすずか！

すぐに助けてやるからな！

「な！なんだ貴様は！」

「黙れ雑種」

「おい！他のヤツらは何をしているんだ！」

「口を開くな下郎。空気が穢れる」

「なっ！」

「すずか、迎えに来たぞ……………すずか？」

「そのサンプルの身内か！…………ク、ククク…………ハーツハハハハハ！遅かったようだな！

すでに実験は始まっている！そのサンプルの意思などどうにないわ！」

「……………何をした」

「強力な精神魔法で精神を上書きし服従させたのよ！そして最強のカメラを造るのだ！」

「魔法か…………『ルールブレイカー破戒すべき全ての符』」

「なんだそのナイフは？」

「黙れと言ったぞ雑種」

そういいながらすずかにルールブレイカーを刺す……間に合ってくれ！

「ん……………ここは……………」

「すずか…迎えに来たよ」

「え……………？ 朱兎君？」

「ばかな！あの魔法が解けるわけg「口を開くなと言ったぞ下郎」
貴様あああ！！！！」

『リンディさん、すずかを確保した』

『朱兎君！？……………補足したわ！すぐに向かいます！』

「さ、すずか。帰ろうか」

「う、うん……………あの」

「どうした？」

「……………恥ずかしくて……………／／／」

そこで自分が裸のすずかを抱き上げていることに気付く……遅えよ！
もっと早く気付けよ俺！

一旦すずかを下ろして『王の財宝』ゲート・オブ・バビロンから黒いコートを出しすずかを包む……

これでひとまずは……いいことにしよう。そうしよう。まだ喚いている下衆は放置でいいだろ

もうすぐアースラも来ることだしな。

「さ、なのはも拾ってさっさと帰ろうか」

「あ！なのはちゃんは大丈夫なの！？」

「心配しなくても大丈夫だ。いまはディーヴァが護ってるさ」

「ほんと？」

「ほんとだよ」

「よかった……っ！朱兎君あぶないっ！」

「え？」

ターン……

響く銃声

倒れるすずか

今何が起こった？

「クハハハハ！私の研究の邪魔をするからだ！」

「すずか？どうしたんだよ……急にこけたりしてさ……おいすずか？」

「…………しゅうくん………だいじょうぶ？」

「なんだよこれ………なんで血が出てるんだよ………」

「よかった……しゅうくんが無事で………よかった………」

「おいすずか？すずか！？すずか！！！」

「ハハハハハハ！！！！！！死んだか！次は貴様だ！！！！！」

『朱兎君！到着したわ！早く転送を！』

『マスター！なのはさんは私が連れて行きますから、すずかさんを連れて早くマスターも！』

「大丈夫。大丈夫だよすずか……すぐに治してあげるからさ」

「死ねーーーー！！！！！」

タンツタンツタンツタンツ……

「さあ治れ……『フルケア』」

すずかを光が包む……傷跡も血痕も消えた……これで大丈夫だよな？
呼吸は……大丈夫だな！

良かった……失わずにすんだっ！！！！本当に良かった！！！！

「何故だ！何故あたらん！？」

『リンディさん、この施設内の生命反応を全てアースラに転送する』

『っ！……わかったわ。送って頂戴』

『行きますよ』

「施設内の生命反応全補足……強制転移………開始！」

「なっ！貴様！」

「さ、一緒に帰ろう？すずか」

「こうなればこの研究所ごと、この星も爆破してやる！！！！！」

「下郎があ……………」

『リンディさん、すずかを送る。一応医務室へ頼む』

『わかったわ……貴方は？』

『後始末をつけて帰る』

『……………気をつけてね？』

あーあ……久々にブチキレしまったなあ……この施設ごと消滅させても問題ないよなあ？

徹底的に……二度と使えないなんて甘いことは言わねえ……この世から消滅させてやる！

転移で施設の上空に移動して、あの魔法をぶちかましてやる！

「暗黒よ……闇よ……負界の混沌より禁断の黒炎を呼び覚ませ……」

『詠唱魔法？聞いたことがない魔法ね……』

「パーラ・ノードイ・フォーモー・ブルール・ネーイ・ヴァセ・イーダー・イー・エイター・
ナール・アイドル・ヘーブン・ン・ヘイル・イアイアンマ・
ダイオミ・ギーザ・オージ」

『艦長！膨大な魔力です！危険です！……！』

『朱兎君……なにをするつもりなの！？』

「消えうせろ！『死黒核爆烈地獄』……！！！！！！」
ブラゴザハース

音もなく山ごと消滅していく研究所……これは膨大な魔力を用い閉鎖された空間（暗黒結界）を作り出しその中と異界とを同時に重ねあわせ融合させる事で禁断の黒炎（核爆発）を引き起こす呪文だ。俺が使える魔法の中でもトップクラスの威力を誇る。発生した高エネルギーは対象を消滅させた後に閉鎖空間を別次元に転送する。焦点温度数億度を誇るこの呪文は大地の岩盤が溶けえぐれる程の威力の、まさに禁呪なんだ。

「これで二度と使おうなんて思えないだろ」

『朱兎君……やりすぎじゃないかしら』

「まだ甘いくらいだ。殺さなかったただけマシだと思ってもらおうか」

『…………そうね、今回捕らえた人達は管理局で厳しく裁くから』

「そうしてくれ、そうじゃなかったら俺が消しに行くと伝えてくれ」

『そうならないように手を尽くすわ……』

「ああ、俺は先に帰る。ディーヴァになのはとすずかを連れて帰れ
って言っといてくれ」

『ええ、それじゃあ気をつけてね?』

「ああ…………紫、いるんだろう」

「あら、気付いていたの?」

「あの下衆野郎の銃弾を逸らしてくれたのはお前だろ」

「あの程度のことはなんでもないですわ」

「いや、礼を言わせてくれ。あれが当たっていたら理性を保てなかつた」

「私は貴方に好意を持っているといいましたわよね?」

「…………ああ」

「もっと好きになりましたわ♪」

「……奇特なヤツだな」

「あらあら、さあ帰りましょう？」

「ああ、頼む」

そう言って紫のスキマに入る。魔力を使わずに転移できるから楽といえば楽か……

それにしてもこれまで以上の警戒が必要ということだな。さすがとアリサにもなにか

護身用のアイテムを渡しておくか……

後日談だが、俺が魔法をぶっ放した世界ではありえないほどの魔力が検出されたとかで

管理局が調べにきたそうだ。だがその頃にはアースラからの報告書が上がっていて

うやむやになったそうだ。ま、リンディさんに感謝だな。それにしても俺もまだまだ

未熟ということを思い知った……これから鍛錬を欠かしてはいけないな。全てを護れる

くらいになりたい……所詮はちっぽけな人間だけど、俺の目に映る……手の届く範囲の人たちを

護りたいから。俺は……そのためになら悪にでもなってやる！力なき正義は悪だというけど。

悪には悪の正義がある！俺はこの信念を貫いてやるぜ！！！！

EX-2 なぜか閑話が2本目！（後書き）

作者・朱兎 「御礼と謝罪とあとがきのコーナー」

作者 「まずは御礼から〜十六夜 刻様・ASTRY様・灰色の野良猫様・死食經典義様・

レオニール様！皆様感想をありがとうございます！」

朱兎 「お前の執筆意欲の元だもんな」

作者 「当然だ！もの凄くやる気が出てくるよ！」

朱兎 「俺も殺る気がでるよ！」

作者 「をいをい……」

朱兎 「んで、謝罪って？」

作者 「それはね？27話を書くはずが、気が付いたらEX-2を書いてたからさ！」

朱兎 「なんでだよ……」

作者 「わかんねえ……」

朱兎 「まあいいけどさ」

作者 「まああれだ、アンケートの結果は今のところ、すずか2票・なのは2票・

フェイト1票・ハーレム1票だ」

朱兎「なんのアンケートなんだ？」

作者「それは秘密です！」

朱兎「なんでさ……」

作者「まあいいじゃん！つてことで今回は短いですけどもこの辺で！」

朱兎「次回もヨロシク！……こんどこそは27話なんだろうな？」

作者「わかんねえ……」

朱兎「おいおい……」

27話 悪には悪の正義があるっ！よね？（前書き）

更新が遅くなってもうしわけありませんでしたー！

もう少し早く更新できるように頑張りますので！！

ますので！！！！見捨てないでください！

では本編をどうぞ

27話 悪には悪の正義があるっ！よね？

「さて、出る『時空統べる大神の大鎌』」
サイズ・オブ・クロノス

「っな！貴様！」

「落ち着けシグナム。橘からはやる気は感じられん」

「そのとおりだ。コイツの能力は時間の掌握、俺達3人以外の時間を停止させた」

「ばかなっ！そんなことが出来るはずがない！」

「出来るんだよ、俺にはな。3人だけを小型の結界で囲って、それ以外を停止させたんだ」

「貴様は神だとしても言うのか……」

「はっ、あんなのと一緒にされたくはないがな」

「どういうことだ？」

「きにすんな、話を戻すぜ？」

「ああ、頼む」

「お前らは闇の書についてどれだけ知っている？」

「我らは闇の書のシステムにして闇の書本体や主を護衛し、主の命

令に従って行動する。

そしてリンカーコアの確保を行う事が主な役目だ」

「それがはやての意思じゃなくてもか？」

「それは！」

「そうだ、そうしなければ主はやては遠からぬうちにその命を蝕まれてしまうだろう」

「ザフィーラ！」

「ふむ……お前ら『夜天の魔道書』って知ってるか？」

「いや、我は聞いたことがない」

「私もないな」

「やっぱりな……結論から言うぞ」

「なんだ？」

「お前らがやっていることは、はやてを死なせる」

「な！ふざけるな！」

「我らが魔力を蒐集することで、主の身体を闇の書の侵食から護らねばならんだ！」

「話は最後まで聞け……いいか？」

そこから俺の説明が始まったわけだが、要約すると

・闇の書とは歴代の所有者のうちの誰かが改変を行ったために、そのシステムに多大なバグを抱えている欠陥品であること

・元々は夜天の魔道書と呼ばれていたこと

・蒐集を続けると、完成直後に暴走しはやてを殺してしまうこと

・はやての死後はまた転生して別の主を破滅に導くこと

・実はもう一人の守護騎士がいること

などだ。実をいうと対処のために、時空管理局の無限書庫にディーヴァの端末を

大量に潜入させている。情報が届き次第解析し対処法を作成する予定だ。ま、このことは言わないけどな。

「どうにかして主はやてを救えないのか？」

「だから言ってるだろうが、蒐集を抑えてくれりゃいいんだよ」

「話を聞く限りでは、抑えたところでどうにもならないと思うのだが」

「俺が今方法を探索中だ」

「貴様が？」

「信用できないか？」

「出k「信用しよう」ザファイーラ!？」

「我らは主を救うために、主の思いを裏切っている。しかしそれでも主を救うことは

出来ないという。頼む橘……我らに力を貸してくれ」

「……それは依頼か？」

「何？」

「それは依頼かと聞いている」

「貴様！ザファイーラが頭をs「黙れシグナム」なんだとっ！」

「今一度問う。盾の守護獣ザファイーラ、今のは依頼か？」

「……そうだ。私の力では足りん。助力を依頼する」

「いいだろう。一人の傭兵として、その依頼受けよう」

「傭兵としてだと!？」

「俺は『クルダの傭兵』だ」

ハイソコ！突っ込みはなしの方向で！

「クルダだと？」

「受けた依頼は必ず遂行する……それがクルダの傭兵だ！」

「……すまん……橘」

「まあ見てろ、俺に不可能はない！それから、いいか？この会話の内容は他の2人には

言うなよ？少しでも情報が漏れるのを防ぎたいからな」

「わかった。だが蒐集を遅らせるのは難しいぞ」

「ここに俺の魔力は使わずに、自然の魔力のみを結晶化させたものがある」

「魔力の結晶だと！？」

「これをすこしづつ蒐集させるといい。いいな？少しずつだぞ？」

「了解した」

「よし、ではこの話は終わりだ。解除するぞ」

はあ……やれやれ、これで話し合いは終わったな。あとは闇の書の完成までに対処法を手に入れるだけだな。……いや、待てよ？先に邪魔が入らないようにあいつらをなんとかしておこうか。そう……あの猫姉妹をな！

「さて…俺はそろそろ帰るぜ」

「何？主はやてを待たないのか？」

「今日の俺の目的はお前らと話をすることさ、はやての顔も見れたし十分だよ」

「む……そうか」

「ああ、んじやはやてによろしくな」

これから一仕事あるからよ……

そういい残してはやての家を出たわけだが………いるな。確実に視

線を感じる。

ここで逃がすと後々面倒だな。さっさとケリをつけてしまおうか……

「ん？お、猫か」

「みゃう」

ククク……偽装は完璧ってかあ？

「おー、かわいいなあ！どれどれ……」

「みゃー」

「ほら、おいでー………よーしよしよし。いーこだねえ」

「みゃう！？ふ……にゆう………うにゃあ」

ふっ……メロメロだな！動物である以上この技術の持ち主の手からは逃げられないんだよ！

……そう！この『ムツゴロウさんの腕』からはな！さあ………どう料理してやろうか……

『マスター……怖いです……』

うつさい！……さて、完全に堕ちたな。んじゃま、今のうちに逃げられないように結界を張って……と

「よしよし……んじゃま、出ろ『時空統べる大神の大鎌』サイズ・オブ・クロノスそして停めろ」

「っ！？」

「まあそんなに驚かなくてもいいだろ？」

「にゃう」

「んで？どっちだ？俺たち以外の時間は停めてるから助けはこないぜ？」

「……いつから？」

「あ？最初からに決まってんだろ」

「そうなの……」

「で？お前さんの名前は？」

「……必要n「答えないならポチと呼ぶ」リーゼアリアよ！」

「んじゃアリアでいいな」

「拒否権はないんでしょう？」

「それでもいいぜ？出来るんならな」

「……いいわ。好きに呼んで」

「よし、じゃあちよつと話をしようか」

それから闇の書についていろいろ話をした。

守護騎士に危険性を伝えたこと・元々は『夜天の魔道書』という名前だったこと・俺が

どうにかして修正するから時間が欲しいこと・そのために手を貸して欲しいということ

……時間を停めたままで交渉するのは、さっきのこともあるから正直しんどかった。

でも、ここで気を抜けば意味がなくなる。気を抜くのは全てが終わってからだ！

27話 悪には悪の正義があるっ！よね？（後書き）

作者・朱兎「あとかきのようなもののこーなー」

作者「まずは恒例のお礼から！Arishia様・地球軍兵様・マ
イペース様・

気高き漆黒を知る者様・死食經典義様・黒天使様・風鳴様・
Fate・T・Harlown様。皆様感想をありがとうございます！
「

朱兎「このダメ人間のやる気に繋がってます……たぶん」

作者「繋がってるよ!？」

朱兎「それにしても遅かったじゃねーの」

作者「う……それは……」

朱兎「結局なにやってたんだ？」

作者「いやいやいや！ダブルスポイラーなんてやってませんよ?」

朱兎「をい……」

作者「まあ、もう諦めたからねっ！頑張って書くよ!」

朱兎「ああ、そうかよ……で？ツールはダウンロードじゃないんじ
ゃないかって」

作者「ああ、それはね？強制的にインストールするのをレイジングハート視点への

言い方でダウンロード『させろ』って言外に言ってたわけだよ」

朱兎「相変わらずわかりにくい表現を使うやつだなあ……」

作者「あとクロノスだけど、正確にはゼウスの父親はKρ? v o?で時間の神はXρ? v o?

なんだ。実際は別の神なんけども、発音から混同されてて、現地の人間でも

間違えるっていうことだから、あえて混同させてもらいました！」

朱兎「それを先にいっとかないから質問が来るんだろうが……」

作者「まあそうなんだけどね」

朱兎「使った魔法とか技・武器とかの説明もちゃんとしろよな」

作者「それは今度ちゃんとするよ」

朱兎「んで？アンケートってヤツの票がフェイト・ハーレム・紫……ゆかり!?

おい！このアンケートって一体なんなんだよ！」

作者「あーだいじょぶだいじょぶ……気にしなくても問題ないさ」

朱兎「本当だろうな……?」

作者「おう！問題ないぞ！（作者はな！）」

朱兎「ならいいけど……とりあえずさっさと書けよな！」

作者「了解了解、んじゃ次回は……あ……ま、まあがんばろう」

朱兎「なんだよそれ！気になるじゃねーか！」

作者「それではまた次回！あと、今回短くてスイマセンでした……！！」

朱兎「あ！おい！てめえ待ちやがれえ！」

28話 正義でも悪でもいい！俺は俺の正義を貫くだけだ！（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんでした！ちょっと仕事が忙しくて……

前よりは少し遅れるかも知れませんが、ちゃんと更新しますので

気長に見守ってやってください！それでは本編をどうぞ！……今回は短いですが

かなり悩んでいます………

28話 正義でも悪でもいい！俺は俺の正義を貫くだけだ！

「本当にとうさまの罪を無くしてくれるのね？」

「ああ、だから俺に協力しろ」

「本当に信じてもいいの？」

「別に信じなくてもかまわないが？」

「……信じなかったらどうする気？」

「簡単なことだろ？敵は徹底的に叩き潰す…それだけだ」

「っな！」

「傲慢に聞こえるか？でもな敵に情けをかけて後からツケが回ってくるよりは

最初から徹底的に潰しておいたほうがいいんだよ」

「私たちにだって理由があるわ！」

「すでに死んだ相手の怨みとかさ、そんなのは詭弁なんだよ！結局は自分がどうしたいか

だろう！自分の気が晴れないから怨みを晴らそうとするんだろうが！そんなのはてめえ

一人でやりやがれ！今を必死で生きている子供を犠牲にするのが納得いかねえんだよ！」

「っ……それは……」

「大体なあ…はやての両親が死んでからグレアムの野郎ははやてに会ったのか？どうなんだ！

会ってねえんだろ！あの広い家にたった一人で……しかも足が動かない女の子をだぞ！

なんで犠牲に出来るっつーんだよ！」

大多数を救うために1人を犠牲にする？為政者としては正しい姿なのかも知れないけどな…

俺はそんなのは認めねえ！やるってんならどうして全てを救える方向に考えねえんだ！

大体はやてには一切の罪もないだろうが！あんないい子に全てを背負わせて、その上で

殺すだど？そんなのは俺が絶対に阻止してやる！

「仕方ないじゃない！闇の書に選ばれてしまったんだもの！」

「ふざけんな！！！！そんなのはてめえらのエゴだろうが！」

「じゃあどうしろって言うのよ！それだけがとうさまの生きる意味になってるのよ！」

「知ったことか！俺はグレアムに言ったはずだぜ？『てめえの妄執を殺す』ってな！」

「そんなのd「最後まで聞けよ」っ！」

「質問だ。いいか？」

「NOって言っても聞くんでしょう？」

「まーな。お前はグレアムに罪を犯させたいのか？」

「そんなわけじゃない！それでも、とうさまの望みだからっ！」

「オーケーわかった。だったら話は簡単だ。闇の書の一件が終わるまででいい、俺に従え」

「はぁ！？どういうことよ！」

「闇の書は俺がどうにかして夜天の魔道書に戻す。その手伝いをしてくれ」

「そんなの……」

「今ならまだ俺以外はこのことを知らない。だから動くなら今しかない」

「……私にとうさまを裏切れっていうの？」

「違うな。グレアムを護りたかったら、俺に従えてことだ」

「っ卑怯者！」

「自分の目的を達成するために子供を犠牲にするグレアムとドコが違うんだ？」

「そ、それは……」

「まあそんなのはどうでもいいさ。お前にやってもらいたいのは無限書庫への俺のデバイスの

アクセス許可及び入場許可の申請だ」

「無限書庫への？　どういうこと？」

「無限書庫つーのは『世界の記憶を収めた場所』なんだろう？　俺のデバイスのディーヴァなら

目的の資料を探し出すことも可能だ」

「無理よ！　いくら優秀なデバイスだからってあそこから目的の資料を探し出すなんて！

それに、無限書庫にはユーノ・スクライアが居るわ！」

「俺のディーヴァは地球上の砂粒1つまですべてを瞬時に把握することが出来る。あとユーノは

優秀なのはわかっているが、今はスピードが勝負だからな。残念だが宛には出来ない」

「………なによ、そのロストログアクラスのスペックは」

「俺の自作だ」

「はあ!？」

まあ驚くのも無理はないわな。創った本人である俺ですら全スペックは把握できてないんだから。

しかもインテリジェンスとユニゾンをリンクシステムで繋げたおかげで、自分でどんどん更新

していくもんだから……今ではハイスペックどころか廃スペックと化してるもんなあ……………

「それで？それだけでいいの？」

「ん？納得したのか？」

「言っても無駄なんでしょう？だったら少しでもとうさまの罪を軽く出来るようにするわ」

「なるほどね……そういうの好きだぜ？」

「つべ、別にアンタのためにやるわけじゃないんだから！」

「そうだな。グレアムのためなんだろう？」

「そうよ！」

なんで赤くなってるんだ？まあよくわからんが……とりあえずこれで端末だけを侵入させてた時より効率が良くなるはずだ。タイムリミットは12月24日……クリスマス・イブだな……俺に出来る

全力ではやてを……いや、全員を救ってみせる！まあ照姉には怒られるだろうけどな……

「それで……他にはさせたいことはないのね？」

「氷結の杖デュランダル」

「っ！」

「もう完成してるのか？」

「……………してないわ」

「作成作業の状況を教えてくれ」

「まって、それは闇の書封印の切り札として製作されたデバイスよ？
？どうして知ってるの？」

「さあな。情報ソースは軽々しく話せるもんじゃねえよ」

「……………いいわ。連絡はどうすればいいの？」

「俺は時々はやての家に来ているからな、その時にでも念話で声をかけてくれ」

「守護騎士にばれるんじゃない？」

「シグナムとザフィーラには説明済みだ」

「!……私のことは」

「安心しろ、グレアムのことは言っていない。もちろんお前達のことな」

「……わかったわ」

「さてと、それじゃあ結界を解除するぜ」

そういつつ大鎌を『^{ゲート・オブ・バビロン}王の財宝』にしまう。これで時間の凍結は解除された。

あとは結界消せばいいだけだけど……ま、大丈夫だろ。いくらなんでも解除したあとに

喋ったりしないだろうしな。あとは……ちょっと裏工作でもしておこうかな。グレアムは

闇の書への妄執さえなければいい奴なんだろう、そうじゃなきゃ時空管理局の顧問官なんて

要職には就けねえだろうからな。こっからは時間との勝負だ……言うならばワクチンを

作るのが先か、闇の書が暴走するのが先か……だな。さて、アリアも帰ったことだし

とりあえず今は家に帰りますかね! いやな予感もするけどな……

28話 正義でも悪でもいい！俺は俺の正義を貫くだけだ！（後書き）

作者・朱兎の「あとがきという名の言い訳こーなー」

作者「まずは更新が遅れて申し訳ありませんでした！」

朱兎「何やってたんだよ。かなり遅かったじゃねーか」

作者「ぶっちゃけると……やっぱ言えない……」

朱兎「何だよそれ……」

作者「まあいろいろあったんだよ！では恒例のお礼行こう！」

朱兎「そこはきっちり書いとけよ？」

作者「うむ！K y o様・第六十手様・サカイ様・B a r u様感想ありがとうございます」

朱兎「k y o様は何度も感想頂いてて、マジで嬉しいもんな！」

作者「うん、凄く励みになるよ」

朱兎「それにしてもお前はいつも表現を約しすぎ！」

作者「あゝ、まあ……ねえ」

朱兎「あのサッカーの件も『サッカーをやってるヤツならオフサイドのことくらい」

わかってるはずだからちゃんと手前でパスを受け取る』って
考えてたんだろ？」

作者「まあね、一応弟がサッカーやってたし」

朱兎「もうちょっと描写を細かくしろってことだろうか」

作者「あゝ…ごめんなさい」

朱兎「んで、男性キャラの扱いが悪いって」

作者「正確の改悪はした覚えはないよ？無印の途中からアニメを全部見た上で、しかも

UPの前に友人に読んで貰って違和感がないって言われてるし」

朱兎「ふうん、まあ受け取り方は10人10色ってことだわな」

作者「だねえ、にしてもお前DONって言われてるぞ？」

朱兎「え……マジで？」

作者「マジで」

朱兎「まあ他人の評価なんて俺は気にしないけどさ」

作者「気にしろよ！まあDONって言葉自体がすでに使用しないほうがいいんだけどな」

朱兎「そうなのか？」

作者「『2007年2月に策定された「発信者情報開示関係ガイドライン」の中で、「DQN」が

「いずれも侮蔑的な表現を使って原告を誹謗中傷する内容である」と認められ、原告の

社会的地位を低下させるものであると認められる」（東京地裁平成15年9月17日判決）

と判示され、初めて司法の場によって「DQN」が侮蔑語として認められたことが示され

ている。今後匿名掲示板において「DQN」の言葉を用いると、書き込んだ者のリモート

ホストや氏名などの個人情報が開示される危険性があるとニースサイトなどの

メディアで報道された』ってのが現状だもんよ」

朱兎「そーなのかー」

作者「んで、侮辱語ってことは侮辱罪が適用されるわけだ。良い子のみんなは使わないようにしようね！」

朱兎「ダレに言ってるんだよ……」

作者「まあ性格ってのは描写が難しいんだよ」

朱兎「そりゃなあ」

作者「ってことで今回はこの辺にしとこう！」

朱兎「あいよ。んじやお憑かれ」

作者「ってことで、アンケート結果の発表です。すずか嬢2票・なのは嬢2票・フェイト嬢2票

・ハーレム3票・紫2票……まさかのゆかりんとか……作者の技量的に厳しいですが

できるところまでハーレムルートへ行ってみようかと思えます。逝って見るかもですが…」

29話 意外すぎる協力者？（前書き）

と、いうことでまるまる1ヶ月デイレイがありまして！

更新を待っていてくださった方には篤く御礼を申し上げます。

あと、このSSはあくまで2次創作です。その辺はご了承ください。

29話 意外すぎる協力者？

ヴォルケンズやアリアと話をした翌日、俺は……………管理局にいた。

「なあアリア、なんで俺はここにいるんだ？」

「だってあなたの魔力は覚えやすいんだもの。だから無限書庫の申請のついでに

一緒にきてもらおうかなって思って」

「…………俺はアースラクルーやグレアム・ロッテには覚えられてるぞ？」

「大丈夫よ。とうさまやロッテには会わないようにスケジュールも把握してるから」

「さいですか…………」

どうやらアリアに拉致られたようだ…………あれ？照姉たちは止めなかったのか？

そもそも俺はパジャマに着替えて寝てたはずだぞ？どういふことなの？

「…………なあ」

「なに？」

「俺、なんで私服に着替えてるんだ？」

「黒髪のお姉さんが着替えさせてたわよ？」

「照姉か……ってことはここにいるのも」

「そうね、笑顔で送り出してくれたわよ」

照姉……流石にひどいと思います……超爆睡してたのにさ……

「さ、早く行きましょ？」

「へいへい……っと、ディーヴァもつれてこないと意味がないんじゃないかね？」

「大丈夫よ、ちゃんと登録とID発行はしておくから！」

そういうながら俺の腕にくっついてくるアリア……俺9歳児デスヨ？

「なあ……俺みたいなガキと腕を組んで面白いかな？」

「そうね、もう少し身長があれば面白かったんじゃないかしら」

「ふむ……んじゃま、ご要望にお答えしますかねえ。ちよっと手を離してくれ、ってことで『変化』」

「変化?……って、ええっ!?!」

アリアが手を離して俺のほうを見る一瞬の間に変化の術で20歳前後の姿になる。幻術じゃない

から俺の魔力が切れるまでばれる心配もないしな!俺の見た目?そういうえば言った事なかったよな。ここで俺のスペック(?)を紹介しておこうか!

名前……はわかるからいいとして、20歳の俺のスペックは……

身長 .. 186 cm

体重 .. 75 kg

髪長さ.. ショートカット

髪の色 .. 紅に近い茶色

瞳の色 .. 紅

……うん、なんだろう?俺人間だよな?筋力や魔力は変わりようが無いから言う必要も無いだろう。瞳の色が紅って……どこの吸血鬼ですか?真祖なの?個人的には人間を辞めたつもりはないんだけど!?!

「……ねえ、それって幻術？」

「いんや？俺の20歳の時くらいの成長後になってるだけだぜ？」

「20歳……」

「どうしたんだ？顔が赤いけど熱でもあんのか？」

「な、なんでもないわよ！」

「なんだよ……変なヤツだなあ」

結局アリアに腕を組まれて案内されながら無限書庫に向かった。まあ……なのはたちにはないであろう柔らかさがあったことだけは明言しておこう。ばれたらフルボッコにされるだろうけどな！……にしてもなんでコイツはこんなに上機嫌なんだ？俺に脅されて仕方なく協力してるんじゃないのか？……まあいいや、機嫌がいい分にはなんにも問題はない訳だからな。

「着いたわよ。ここが無限書庫」

「ほー、やっぱでっけなあ」

「本当に手伝わなくていいの？」

「おう大丈夫だ！だからさっさと許可証をくれ」

「……今から取りに行ってくるから少し待ってて」

「あいよー、んじゃその間に……」

「すぐに戻ってくるから、騒ぎとか起こさないでね？」

「へーい」

騒ぎ……ねえ。好んで起こすわけがないじゃんなあ？でも、ちょっとくらい探検とかしてみてもいいよなあ？え？ダメ？だが断る！せっかく管理局に来たんだから、少しくらいは見て周りたいじゃん？ってことで少し歩いてみよう。ま、俺の魔力を覚えてるらしいから？戻ってきたら探しにくるだろう。

「にしても、広いよなあ……」

俺は今、無限書庫から出て管理局内をあるいてる。当然もとの姿に戻ってからだけどな！ん？誰かに見つからないのかって？そんなの存在を稀薄にすれば見つからないって。気配を消しても魔力は隠してないから見つかるしさ。それに魔力だしてないとアリアが俺のこと探せないじゃん？だから稀薄にしてみた。これだったら認識してても興味を持たれな

いからばれにくいしな。

俺のことを知ってるヤツには効かないからこの場合には丁度いいだろ！さーてさて！

この角を曲がったら何があんのかな〜♪

「きゃっ」

「ぬぁ！」

はい、気配を消していた弊害ですよ……と。曲がったとたんにつかつてしまいました……

流石に想定外だったわぁ〜俺も気が緩んでたのかな……つと、謝らないと！

「ご、ごめんなさい！大丈夫ですか？」

「あらあら〜大丈夫よ〜？あなたは大丈夫〜？」

「あ、うん！大丈夫……だけど」

おっかしいな……なんかこの人見覚えがある気がするんだけど……？転生後の記憶は全て

あるから転生前でか？でも転生前で『リリなの』はstsの10話までしか見てないからなあ

……正直わからん！っていうか覚えてない！とりあえずは……関係者の子供ってことにして

演技をしておきますか……

「気をつけてないと危ないわよ？」

「うん、ごめんなさい……」

「怖いおじさんとかも居るから気をつけましょうね？」

「うん！えっと……ボクは朱兎って言います！」

「そう、朱兎君っていうの。私はおばあちゃんって呼んでくれていいのよ？」

「え？でも……」

「いいからいいから」

「じゃ、じゃあ……ばあちゃん……？」

「なあに？」

そういつてにこにここと微笑んでいる初老の女性……あ、うん、この人には敵わない……と

俺の本能が速攻負けを認めてるわ。にしても誰だったかなあ……

「朱兎君はどうしてここにいるの？」

「えっと…アリアさんと一緒にいたんだけど、ちょっと近くを探検したいなあって思ってる」

「迷子になっちゃったの？」

「う……はい……」

「じゃあおばあちゃんと一緒にアリアちゃんを探しましょうか」

「え？」

「アリアちゃんっていうのはグレアム君のところのリーゼアリアちゃんでしょ？」

「あ……そう……だけど」

「どこに行く予定だったの？」

「えっと、無限書庫だよ？」

なんなんだコレは……なんかテンポが崩されるっていうか、誤魔化せないんだけど！？
え？なんで？

「無限書庫ならすぐそこだから一緒に行きましょうか」

「え……あ、うん……？」

おかしいな……俺は探検に行く予定だったはずだよな？ なんてばあちゃんに手をつかまれて
無限書庫に向かってるんだ？ あるえ？

「あ！どこに行ってたのよ！」

「あゝ、戻ってきてたんだ？」

「すぐに戻るって言ったじゃない！」

「まあ、なんつーか……すまん？」

「あらあら～アリアちゃんもそう興奮しないのよ～？」

「っ！も、申し訳ありません！くら「いいからいいから」しかし」

「わたしはただのおばあちゃんよ？」

「え、でも……」

「気にせずにおばあちゃんって呼んでくれるかしら？」

「それは……」

「そういえば朱兎君ってアリアちゃんの知り合いなのかしら？」

「あ、はい。どうしても調べたいことがあるというので無限書庫につれてきたんですけど……」

「無限書庫じゃないと、調べられないような事なのね？」

「……正直に言いますと、無限書庫でも難しいかと思ひます」

「おいアリア！いいのかよ？」

「あらあら朱兎君はおばあちゃんには言えないことをしてるのかしら？」

「えっと……『アリア、ばあちゃんって話しても大丈夫だと思う？』」

『……この方なら、大丈夫だと思うけれど……』

『……わかった』

『何をする気なの？』

『さあな』

「ねえ、ばあちゃん」

「なあに？」

「ちよつとごめんね！出る」
『サイズ・オブ・クロノス 時空統べる大神の大鎌』

「ちよつと！」

「あらあら？」

「俺たち3人以外の時間を停めた。これで誰にも聞かれる心配は無い」

「どういうつもりよ！」

「ばあちゃん」

「なあに？」

「俺は第97管理外世界である地球の人間で、ここには闇の書について調べに来たんだ」

「ちよつと！何を言い出すのよ！」

「……それで？」

「今、俺の世界には闇の書がある」

「それは困ったわねえ」

「うん、でも俺は闇の書を暴走させないように修復したいと思っているんだ」

「あらあらそんなことできるのかしら？」

「出来るんじゃない。やるんだ！」

「そう、それでおばあちゃんに何をして欲しいの？」

「え？」

「こうして話してくれたっていうことは、なにかして欲しいことがあるんじゃないの？」

「それは……」

「クローベル本局統幕議長！」

「なっ！本局統幕議長だって！？」

「あらあらダメじゃないアリアちゃん」

どっかで見たことがあると思ったら！STSの10話で出てきてた

伝説の三提督の一人かよ！

敵対されると困るじゃねーか！参ったな……どうするか……

「それで？朱兎君はおばあちゃんにどうして欲しいの？」

「え……？あ…俺の大事な仲間を侵食してるから助けたくて……」

「でも、まだ管理局は知らないんじゃないのかしら？」

「いや……実は……」

それから俺は、アリアと一緒にA'sが始まってからのことをミゼットばあちゃんに説明した。

アリアも最初は渋っていたけど、俺の「グレアムも関わってる」の一言で吹っ切れたみたいだ。

それから、はやての状況や海鳴の状況・グレアムとの敵対・俺が個人的に管理局が嫌いだとか

を全部話してみた。もちろん俺のことは殆ど話してはいないけどな。

「そう……そんなことがあったの？」

「うん……もし良かったらばあちゃんにも手を貸して欲しい」

「もし断ったら？」

「……正直が進まないけど」

「殺しちゃうのかしら？」

「そ、そんなことしないよ！ちょっと俺にあった記憶を消させてもらうだけだよ」

「それもあんまり嬉しくないわねえ」

「出来れば俺もそんなことしたくないけどさ……」

「それにしてもグレアム君も思い切ったことをするわねえ」

「思い切ったこと？」

「そうよ、もし封印が成功したとしても、管理局を追われる事になるもの」

「……職権乱用とか？」

「いろいろね」

「お願いします！とうさまの罪を軽くしてください！」

「でさ、俺のお願いってのはその事なんだよね」

「どういふことなの？」

「闇の書の一件が終わった後に、グレアムが管理局を辞めようとしても受理しないで欲しいんだ」

「つまり？」

「グレアムが関係していたという形跡は俺が消す。だからあいつが何を言っても無視しといて？」

それで、ばあちゃんのところの直接来ることがあったら『はやてに会いに行くように』って
言っただけなんだ」

「闇の書の主ね？」

「うん、はやてはずっと一人だったんだ。まだ9歳なのにさ……親権者がグレアムになってるから

俺の友人の家とかにも引き取れないしさ」

「あら……はやてちゃんってどういう子なのかしら？」

「えっとさ、けな気で、芯が強く、頑張り屋で、すごく優しい子なんだ」

「そう……いいわ」

「え？」

「管理局のことはおばあちゃんとアリアちゃんに任せておきなさい」

「ふえ!?!」

急に話を振られて驚いているアリア……ちょっと可愛いとか思ったのは秘密だ! それにしても

これで協力者ができたわけか……予想よりはかなり上位の相手が釣れちゃったわけだけでも……

上手くいくといいな……いや、上手くいかせるんだ! 必ず成功させて……全員救って見せる!

俺の力は……そのためにあるんだから!

29話 意外すぎる協力者？（後書き）

あとがき

今回は対話形式ではありません。作者の愚痴とか考えを書き連ねたいと思います。

いきなりですが、やはり皆さん正義の味方が好きなようですね。感想にもあったのですが、

「プロローグではあれほどいいキャラだったのに話が進むにつれて最低キャラ

になっている気がする」

申し訳ないのですが、作者にはプロローグの際の主人公がいいキャラだとは思えません。

直接の死の原因は神のミスですが、それを補って余りあるほどの慢心とエゴの塊だと思

っています。主人公は転生前の恋人に対し、『ずっと一緒に居る』という約束を

しています。そして、自分の命を優先すれば、その場は生き残ることも出来るであろう

状況だったのです。その状況で他人の命を優先し自分の命を捨てる。自己犠牲といえ

ば聞こえはいいですが、どう考えてもただのエゴです。更に言うと、

作者は単に状況的に死なざるを得ない描写をしているだけで、いいキャラに見せようなどとは思っていません。残された相手の心情を考えると、いいキャラに見ることは不可能だとおもいますしね。

「原作キャラの扱いが悪い・原作の登場人物を原作ではありえない、より悪い性格に改変して、DQNで少々考え足らずな主人公をそれと比較してマシに見せる、というのは原作に対する侮辱と変わらない」

2次創作の意味を知っていますか？

2次創作とは

『一つの二次創作物について原作は一つとは限らず、複数の（ときには全くジャンルの異なる）

原作のキャラクターや世界を混在・交流させて新しい物語を創ることもある。また、原作の

世界観に基づいて独自キャラクターを追加することや、原作のキャラクターを用いて別世界

の話を構築することもしばしばであり、これらは「パラレルもの」と呼ばれる。さらに、

原作からは世界観のみを借用し、キャラクターやその他の要素については独自創作に

こだわる形態もあり、こちらは「1. 5次創作」と呼ばれている』

簡単にいつてしまえば、作者の原作キャラに対する印象と空想と妄想を用いて作り上げた作品

それが2次創作です。よって原作キャラを原作通りに描くということとはありえません。

むしろ原作通りに書くのは著作権法違反になるでしょう。なにより原作通りに書くくらいなら

原作を見ればいいんです。2次創作の意味が全くありませんしね。

「原作キャラを貶める以外の方法で主人公を魅力的に描いてほしい」「キョウヤ辺りはわからないでもないが、クロノとユーノに関してはやりすぎ」

意味がわかりません。何故恭也はいいのにクロノとユーノはダメなんでしょうか？

不快感を感じるというのなら、お手本にしますので、全ての人が満足できるものを

書いてみてもらえませんか？作者は自己満足で書いていますので100%全員に満足

してもらえるとは思っていません。それでも、できる限りはいいものを書いていこうと

思っています。そのお手本にしたいので、是非書いてみてもらえる

と助かりますね。

さて、今回は変なテンションで書いてきました。最後になりましたが、感謝と謝罪を致します。

福音様・緋水様・タチャ様・ヒョウガ様・朱様・Baru様・サカイ様・第六十手様・KYO様

皆様感想をいただき、誠にありがとうございます。1ヶ月も更新せずにお礼も出来なくて申し訳ありませんでした。込み合ってた事情も解決?しましたので、また書き始めることが出来そうです。

ルートはハーレムルートということになりました……上手く書けるかどうかわかりませんが
頑張って書いていこうと思います。

30話 暗躍!……なんか素敵な響きだっ (前書き)

blankが長いので中途半端な文章になっているかも知れません。

っていうかなっていると思います。

生暖かい目で見てやってください。

30話 暗躍!……なんか素敵な響きだっ

アリアの可愛いところも見られたところで、無限書庫で探し物を開始しようと思った

俺だが、一つ何か引かかるものを感じた。

「そういえば……」

「朱兎?」

「どうしたの?」

「あ、そういえばこのまま行けばKY君がグレアムを逮捕しようとするんだった!」

「KY君? 誰のことなの?」

「誰かのイニシャルかしら?」

「いや、KYってのは空気が読めないの略なだけだよ。ぶっちゃけるとクロノさ」

「クロノが!?」

「クロノっていう子は……リンディちゃんのところの?」

「そうだよ。確かデュランダルのことアイツが調べたはずだ。面

倒だな……」

「私としては朱兎が知ってることの方が驚きだったんだけど」

そんなどうでもいいことはいいんだ。どうせ情報ソースがばれることは皆無だしな。

「……ばあちゃん」

「なあに？」

「『闇の書の封印に際して、現地の人間の犠牲も厭わない』っていう命令書を作って
もらえないかな？」

「っ！朱兎それは！」

「……出せるのは出せるけれどあんまり出したくはないわねえ」

「大丈夫、使わせる気は無いよ。作った後はエリアに渡してくれればいいんだ」

「私に？」

「ああ、その命令書の中に『封印に特化したデバイスを使用することを許可する』って
入れてくれてれば完璧だな」

「誰にもばれないように作ればいいのね？」

「出来ればね。絶対に信用できる相手でも、今回は秘密にしておいてくれると助かるかな」

どこで脳髓共が聞き耳を立ててるかわからねえからな。出来れば俺の情報も奴らには渡したく無い。便利な駒として使われるのはごめんだからな。

「わかったわーじゃあ今から作るわねーアリアちゃん行きましよう」

「は、はいっ！朱兎、ここは管理局内の施設なんだから魔法はなるべく使わないでね？」

「へいへい、わかったからさっさと命令書を貰って来いよな」

「わかってるわよ。今度は無限書庫から出ないでね……探すのが大変だから」

「心配しなくても調べごとが終わるまでは此処にいるさ」

「本当にわかってるのかしら……まあいいわ、じゃ行ってくるわね」

「ああ」

ばあちゃんとアリアと話してから、俺はディーバを呼び出す事にした。流石に一人で無限書庫を搜索するのは不可能だと前から思ってたし、このためにディーバはデュアルコアにしたし、大量のビットも使えるようにしたんだ。無理矢理夜天の書を改変することも可能だとは思う：が、どうせなら正攻法で攻略したいからな！

「さて……術式起動『召喚』対象…ディーバ」

俺の言葉に反応して、足元に魔法陣が展開した。俺の魔法陣はベルカ式のトライアングルとも、ミッド式のサークルとも違っている。形状はヘキサグラム……そう六芒星だ。ただし、普通の六芒星ではなく常に回転して魔力が循環している。つまり、注ぎ込む魔力を増やさなくても自動的に任意の強さに変換される素敵仕様なんだ。チート

「なにか御用ですか？ マスター」

「ん、ここが無限書庫だ」

「……夜天の書の原典探しですね？」

「ああ……できるな？」

「大丈夫です。でもここでビットを展開してもいいんでしょうか？」

「心配しなくてもアリアから許可証をもらってる」

「アリア……さんですか？」

「ん？紹介してなかったか？」

「してもらってませんよ」

なぜか少し拗ねたような表情で睨まれた……なんでさ？

「ちょっと朱兎！あなた魔法を使ったでしょう！」

「おお、ナイスタイミングだぞアリア。ディーバ、こいつがアリアだ。正確にはリーゼアリアだな」

「リーゼ……もしかして…」

「ああ、そのまさかだな。グレアムのとこの双子の片割れさ」

「朱兎……魔法を使うときは、せめて結界を張ってからにしてもらえない？」

「ん？張ってるだろ？実際問題お前以外誰も気付いてないじゃねーか」

「張って……るわね……凄く大きな魔力を感じたのに……」

「ああ、認識されないようになる結界だけでもよ？お前は除外しといたからさ」

「除外……って……どうして？」

「ん？」

「特別っていうことなの？」

「あー、まあそういえばそうかな？」

「そ、そう……特別なんだ……／／／」

なんだ？なんでこいつは赤くなってるんだ？しかもなんかディーバが不貞腐れてるし？

意味がわからないんだけど……？？？

「マスターが鈍感なのは前からですから……もういいです」

「は？」

「あなたは朱兎の……？」

「ユニゾンデバイスのディーバです」

「そう……あなたも大変ね」

「ありがとうございます……アリアさんも……ですよ？」

「っ！わたしは！……まだわからないわ……」

一体二人はなんの話をしてるんだろう？ 全く意味がわからないんだが………

「なあ……そろそろ探索を開始したいんだけど……」

「あ、すみませんマスター」

「そうね、わたしも一緒に探してあげるわ」

「いらん。お前はさっさとばあちゃんのところから命令書をもってきて来い」

「あ、そうね。凄く大きな魔力を感じたから、急いで来たんだったわ！」

「ばあちゃんが待ってんじゃないかねえのか？」

「っ！朱兎！次からは魔法を使う前に、せめて念話で教えてくれる？」

「まあ了解」

「はあ……じゃあね」

そういいながら急いで書庫から出て行くエリア。どんだけ急いで来たんだよ……

まあそんなどうでもいいことは置いておいて、さっさと調べ物を終わらせてしまおう。

ディーバの力なら、たとえ無限書庫でも数分から十数分もあれば終わるだろうしな。

今回の作戦は絶対に成功させないといけないんだ。シグナムとザフィーラとも約束したからな。

絶対だ……絶対にうまく行かせて見せる！

30話 暗躍!……なんか素敵な響きだっ (後書き)

なんかぐだぐだ感が否めなくなってきたような気がします。

あ、ついでに言うと、作者はFATEをプレイしていないし
持っても居ませんのであしからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7765j/>

幻想と現象と残像と・・・・・・・・現存？

2010年12月3日07時02分発行